
魔法少女リリカルなのは～幻想の交響曲～

蒼妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜幻想の交響曲〜

【Nコード】

N2348J

【作者名】

蒼妃

【あらすじ】

ある魔導書の主となった高町なのは。なのはが見たのは管理局の“闇”。真実を知ったなのははどうするのか。

（注意）この作品の作者は文章力がない初心者です。

タイトルを変更しました。

プロローグ（前書き）

この作品は原作を知っていることを前提としています。

プロローグ

とある次元世界で1人の少女が戦っていた。

「これは……無理かな……」

少女の服は所々引きちぎれ、血に染まっていた。

「レイジングハートもぼろぼろだね。」

少女の相棒は返事を返さず、弱々しく点滅しているだけ。

「私……死んじゃうのかな……？」

周りには機械の兵士。救援は望めない。

《開け……》

「えっ！」

頭の中に謎の音が響く。

《開け、天界への扉。資格持ちし者を導け。》

「きゃあっ！」

少女が光に包まれ、少女は姿を消した。少女の名前は高町　なの
はといった。

ブログ（後書き）

以前から書きたいと思っていた作品を投稿しました。若輩者ですが、
よろしく願いいたします。

第1話 目覚め

魔法少女リリカルなのは
（聖騎士と黒騎士）

第1話目覚め

なのは視点

「此処は……………何処？」

目が覚めると周りは奇妙な紋章が刻まれた壁と1つの大きな扉があった。

意識がはっきりしていくにつれ、記憶がはっきりしてくる。

「確か…変な声が聞こえて……………それにしても……………」

目の前にある扉を見上げる。扉には壁と同じような紋章が刻まれている。

《扉を開けて。》

また、あの声……………。扉ってこの扉？

試しに扉に触れて見ると紋章が輝き、扉が開く。扉の先へと進んで行くと……………

「綺麗な宝石……」

よく見てみると……

「人が入ってる!!」

なのはが見たのは巨大なクリスタルとの中で眠っている女の子だった。

助けようとクリスタルに触れた瞬間、クリスタルはたちまち消滅した。

ズキッ!

「っ!!」

あつ頭が痛い……。何かの記憶が入ってくる。“聖騎士の魔導書”と“黒騎士の魔導書”? 確か…あの2つの魔導書は……

しかし、思考は激痛によって、阻まれる。先ほどの頭痛よりも激しい痛みが起こる。まるで身体を作り替えられているような……

ようやく、痛みが無くなるとなのはは自分の身体の異変に気付いた。

「傷が塞がってる……。」

此処に来るまでに受けた傷が完治していた。

「魔力も増えて……、あれ?」

なのはもう1つの違和感に気付いた。犬歯が鋭く伸びているのである。

なのははクリスタルの破片に映った自分の顔を見て、全てを悟った。

破片に映ったのは、紅い目をした自分だった。

吸血鬼になっちゃんだ。傷が完治してるのもそのおかげなんだね。

「落ち着きましたか、マスター？」

顔を上げるとそこに居たのは、白と黒の大きな一對の翼を背中に生やした蒼髪の女の子だった。

「誰？」

「聖騎士の魔導書と黒騎士の魔導書の統合管制人格、リネイヤ・グレイス。」

「私は…高町　なのは」

「はじめまして、主なのは。」

リネイヤと言った女の子は私に微笑みました。

リネイヤ視点

突然だが、私は後悔した。私の主はまだ幼い。幼い少女に残酷な運命を与えてしまった。私は嫌われる事を覚悟で事情を話した。

結果から言えば、主は私を嫌わなかった。寧ろ、好意的だった。更に感謝された。恨んだ主は居たが、感謝した主は居なかった。

「リネイヤ、真祖の吸血鬼って何か違うの？」

物思いに耽っていると声を掛けられた。

「吸血衝動と吸血鬼の弱点が存在しません。」

それを聞くと主は安心したように胸を撫で下ろした。友人に迷惑をかけたくないだろうからな。

「質問はありませんか？」

「外はどうなってるの？」

「なんとも言えません。この空間と外の空間は時間の流れが違いますから。」

「そっか。リネイヤ、外に出るよ。」

「貴方となら何処までも。マイ　マスター。」

「「ユニゾン・イン！！」」

私は主とユニゾンした。

《聖騎士モードを起動します。》

なのは視点

リネイヤとユニゾンし、聖騎士モードになったなのは。

栗色の髪は腰まで届く銀髪になり、黒い瞳は青くなって、手には聖剣エクスカリバー。背中には純白の巨大な一對の翼。

あれ？この騎士甲冑って……闇の書さんのとそっくり。

カラーリングこそ違うが、形状はかつて戦った闇の書の防衛人格の騎士甲冑と瓜二つだった。違うのは、赤いベルトがない所だけである。

《夜天の書を元に戻していますから、似て当たり前です。》

リネイヤの声が響く。

そこでなのはは先ほど脳に直接叩き込まれた記憶を思い出した。“
聖騎士の書”と“黒騎士の書”は夜天の書を元に作られたのである。
なのははある事を思い付いた。

「リネイヤ、夜天の書の管制人格を記憶を残したまま、復元できる？」

《はい。管制人格のデータが残っていますから、復元は可能です。記憶の方も欠片があるので可能です。ただし、かなりの時間を必要とします。》

リネイヤの話では、リインフォースさんの記憶の欠片を受け継いだらしい。

「それでも良いから復元をお願い。」

《了解しました。》

「じゃあ……行くよ!!」

翼を広げ、私たちは飛び立った。

第1話 目覚め（後書き）

はじめまして、蒼妃です。第1話を投稿しました。かなりの無理矢理感が所々あるような感じあります。これから何とか書いて行きたいと思います。

諸設定

今回はキャラクター設定です。

魔法少女リリカルなのは
＼ 聖騎士と黒騎士 ＼

高町 なのは

年齢：11歳

（レアスキル）

聖騎士モード：空間隔離

黒騎士モード：空間消滅

魔力量：SSS以上

（魔力光）

通常：桜色

聖騎士モード：白銀

黒騎士モード：漆黒

(ユニゾン)

聖騎士モード…腰まで届く銀髪に青い目。

黒騎士モード…腰まで届く黒髪に青い目。

“聖騎士の書”と“黒騎士の書”の主で真祖の吸血鬼。騎士甲冑は闇の書の防衛人格の物を元になっている。聖騎士モードでは、白を基調としている。黒騎士モードでは、黒を基調としている。

リネイヤ・グレイセス

身長：165cm

魔力量：SS

魔力光：灰色

“聖騎士の書”と“黒騎士の書”の統合管制人格。性格は基本的に真面目。騎士甲冑はSTS時代のなのはのBJ。背中に白と黒の翼が一枚ずつ生えてる。

容姿：腰まで届く蒼髪を肩位で1つに纏めている。目は明るい赤色。

《聖騎士モード》

白い騎士甲冑に一对の白い翼が生えた状態。補助魔法、治療魔法が主。攻撃魔法も使えるため、テクニカルな戦い方をする。

《黒騎士モード》

黒い騎士甲冑に黒い一对の翼が生えた状態。大威力の攻撃魔法が多い。代わりに治療魔法、補助魔法が極めて少ない。

“ 聖騎士の書 ” と “ 黒騎士の書 ” について

聖騎士の書と黒騎士の書は“ 夜天の書 ” を元に作られた2つで1つの魔導書。聖騎士の書には白い剣十字と翼の紋章、黒騎士の書には黒い剣十字と翼の紋章が刻まれている。また、それぞれの魔導書に宝具が内蔵されている。

宝具について

- ・ 宝具とは特殊な能力を持った武具の事。
- ・ 聖騎士と黒騎士では、使える宝具が違う。

レアスキル設定

空間遮断

空間を遮断し、存在を隠したり、空間を切断する能力。別名、空間切断

空間消滅

切り取った空間を消滅させる能力。滅多に使わない。

諸設定（後書き）

宝具の設定は随時、後書きに載せて行きます。

第2話 発覚（前書き）

開始早々、グダグダになってしまいました。

第2話 発覚

天界から戻って来たのはトリネイヤ。なのはが降り立った場所は……

魔法少女リリカルなのは
「聖騎士と黒騎士」

第2話 発覚

「ミットチルダ上空」

なのは視点

「無事に天界から戻って来たけど……」

見渡して見るが、元いた場所ではなかった。

「此処は何処なんだろう？」

なのはが居る場所はなのはが知ってる場所ではなかった。

《データ照合……どうやらミットチルダの郊外ようです。》

「ミットチルダか………そう言えば、私が天界に行ってからどれくらい経ってるの？」

天界と現界は時間の流れが違うのである。

《大体2ヶ月ぐらいです。》

2ヶ月も！

《それでどうするんですか、なのは？》

「レイジングハートも修理しなきゃいけないし……」
しかし、思考はある物で中断させられた。

《助けて……》

「リネイヤ！」

《念話の逆探知開始。……発見。下の施設です。》

見下ろすと何かの施設があつた。

「転移魔法、“渡り鳥”発動！」

なのはの右手にあつた聖騎士の書が捲れて、あるページで止まる。

《座標の算出……完了。》

「転移！」

なのはは光に包まれ、その場から消え失せた。

く????

光が開けるとそこは何もない個室だった。部屋にいたのは、一人の女の子が居た。

「誰？」

「貴方が私を呼んだの？」

少女はゆっくり頷く。

「誰だ?!」

魔導師が部屋に入ってくる。

「えーと……ごめんなさい!!」

エクスカリバーで気絶させる。魔導師は呆気なく気絶した。

《なのは!!》

ほっとした瞬間、リネイヤに声を掛けられる。

「どうしたの？」

《さっきこの施設のメインコンピューターにアクセスしてみたのですが、とんでもない情報を見つけました!!》

いい忘れたが、リネイヤは一定範囲内の電子機器に干渉する能力を持っている。

私の目の前に空間モニターが表示される。

「えっ！」

私は表示された情報を見て絶句した。此処は幻想種の研究所であり、さっきの女の子は竜の遺伝子と適合した唯一の子供だった。被験体は全部で20人。あの子以外は拒絶反応で死んでしまったらしい。

これを見た私は怒りを覚えた。さらに私は驚愕する情報を目にした。

「スポンサー……時空管理局っ！！」

研究には大量の資金が必要となる。この非人道的な研究を時空管理局は黙認し、更には推進していたのである。

《何処の組織にも闇はあるんですね。》

「リネイヤ……。」

《何ですか？》

なのはは瞳に怒りの炎を灯しながら静かに言った。

「この研究所……跡形もなく消し去るよ！！」

なのはは基本的争いを好まない。そのなのはが人を殺すのとはほぼ同義の言葉を言ったのだ。なのはは怒りと失望を抱いていた。

《了解。》

リネイヤも止めない。なぜなら、リネイヤも激しい怒りを抱いてい

たからだ。

「転移魔法発動。」

なのはと少女は光に包まれ、転移した。

くミットチルダ上空く

「黒騎士モード……起動。」

眠らした少女を抱き抱えたなのはの騎士甲冑が黒く染まり、翼も黒く染まる。

左手に黒騎士の書が出現する。黒騎士の書のページが捲られ、あるページで止まる。

上空に左手を掲げて、呪文を唱える。

「我、求むは神の審判。」

研究所の真上に巨大な漆黒の魔法陣が展開される。

「咎人に裁きの鉄槌を下せ……」

魔法陣が強い輝きを放つ。

「ジャツチメント!!」

裁きの鉄槌が降り下ろされた。

光の柱は研究所を呑み込み、研究所は跡形もなく消滅した。

絶対破壊魔法ジャツチメント。術者が対象とした物を完全に消滅させる黒騎士専用の魔法である。この時、なのはが対象としたのは、施設と人の記憶のため、死人はいない。

閑話休題

「うつうーん……此処は？」

少女の目が覚める。

「気がついた？」

「はい。助けてくれてありがとうございます。」

ユニゾンを解除する。

「私は高町　なのは。此方はリネイヤ。」

リネイヤが軽くお辞儀をする。

「君はこれからどうする？」

「貴方たちに着いて行きます。」

予想通りの答えが返ってきたな。

「いいよ。君の名前、教えてくれる？」

「名前……ない。」

「「えっ！」」

少女の言葉に2人は驚く。

少女が言うには、シリアルナンバーで呼ばれていたため、名前がな
いらしい。

リネイヤと話し合った結果、私が名付けることになった。悩んだ結
果、少女の名前はリリス。リリス・グレイセスとなった。

リネイヤ視点

私たちは川辺でキャンプをしている。月が上り、リリスは眠りにつ
いた。

「なのは、これからどうしますか？」

私はそう切り出した。

「管理局の闇を潰す。」

主から予想通りの回答が返ってくる。

「そのために、三提督と協力関係を築く。幸い、知り合いに提督が
いるから、何とかかなると思うの。」

「リリスはどうしますか？」

「連れていくよ。」

「そうですか。」

「明日の朝には出発するから。」

そう言つと主も眠りについた。私も眠ろつ。

第2話 発覚（後書き）

オリキャラを登場させました。リリスの設定は他のオリキャラと一緒に纏めて載せます。最後に宝具の設定を載せておきます。

エクスカリバー

種族：聖剣

能力：魔力の収束

（形状）両手持ちの西洋剣。刀身は銀色。金色の紋章が刻まれている。

第3話 協力（前書き）

内容が薄いです。

第3話 協力

（簡単なあらすじ）

研究所から被験者の少女を助け出したなのはとリネイヤ。助け出した少女にはリリスという名前を授けた。なのはは管理局と敵対することを決めた。そのため、伝説の三提督と協力関係を結ぶことにした。

魔法少女リリカルなのは ㄱ 聖騎士と黒騎士

第3話 協力

なのは視点

私たちは管理局の良心である伝説の三提督と協力関係を結ぶため、知り合いのリンディ提督と面会するために本局に来ていた。

アースラに居るかもしれないが、リネイヤの能力でアースラは停泊中であるとわかった。

「なのはさん。何で聖騎士モードなんですか？」

今のなのはの姿は白い翼を生やした聖騎士モードである。

「私のレアスキル“空間遮断”はこの状態でないと使えないの。」

現在なのは達は堂々と本局の通路を歩いている。しかし、局員は誰一人として気付かない。その理由は“空間遮断”を使い、周りの人間に認識できないようにしているからだ。

「便利な能力ですね。」

「リリース。また、敬語になってるよ。」

「あ……………」

リネイヤの注意され、気付く。

「にやはは……。まあ、徐々に慣れていこう」

リリースはなのはに長い付き合いなるから敬語で話す必要はないと言われているのだ。

「……………此処みたいだね。」

扉をノックする。

コンッ！コンッ！

「どうぞ。」

扉の奥から声が聞こえる。

「お久しぶりです。リンディ提督。」

リンディ視点

なのはさんが任務中、行方不明になって2ヶ月が経った。フェイトはなんとか持ち直して執務官試験の勉強に熱を注いでいる。なのはさんの家族はまだなのはさんが生きていると信じている。

コンッ！コンッ！

物思いに耽っていると扉がノックされた。

「どうぞ。」

拒む理由もないので、入室の許可を出す。

「お久しぶりです。リンディ提督。」

「！！なのはさん！？」

思わず立ち上がる。

2ヶ月の間、遺体も見付からず行方知れずになった娘の親友が帰ってきたのである。

「貴方、今まで何を！？」

「ちゃんと説明します。」

なのはあの時の事を話し、天界の事、2つの魔導書の事を話した。

「聖騎士の書に黒騎士の書か……聞いた事はあるけど……」

一端、言葉を区切る。

「それだけでは……ないでしょ？」

なのはは苦笑いしながら、

「流石はリンディ提督ですね。」

と言った。

なのは視点

「まず、これを見てください。」

空間モニターを操作して、研究所でリネイヤが入手した情報を送る。

「これは…… 大体の要件はわかったわ。だけど、いいの？」

送ったデータには、私のお願いが書かれている。

「はい。もう決めましたから。」

「そう…… わかったわ。三提督には私から話しておくわ。」

「ありがとうございます、リンディ提督。」

「それはそうと、住居はどうするの？」

「住居に関しては当てがあるから大丈夫です。」

最後に私の我が儘なお願いを話す。

「フェイトちゃん達には、私の事を黙ってもらえますか？」

フェイトちゃん達がこの事を知ったら、十中八九反対するはずだから。

「……………わかったわ。」

「連絡はここにください。」

連絡先を書いた紙を手渡す。

「では、また。」

お辞儀をする。

リリスとリネイヤもお辞儀をする。

「“渡り鳥”発動。」

リンディ提督の目の前で私たちは転移した。

リネイヤ視点

私たちが転移したのは、“次元航行戦闘艦エクシア”。この船には、デバイスの整備室や居住区が設置されている。

今いるのは、デバイスの整備室である。リリスと主はすでに眠ってしまった。

《リネイヤ。貴方に頼みがあります。》

整備（修理）中のレイジングハートが話しかけてくる。

「なんだ？」

《私を強化してください》

「……お前は今のままでも十分強力なデバイスだと思うが？」

整備（修理）していてわかったが、レイジングハートはかなり優秀なデバイスだ。一般的なインテリジェントデバイスより格段に性能がいい。

《ですが…マスターをまた守れませんでした。》

主思いな奴だ。あれは主の無理が原因だと言うのに。だが……気に入った。

「気に入った。私がお前を最強のデバイスに強化してやる。」

《ありがとございます。リネイヤ》

さあ、今日は徹夜だ♪

第3話 協力（後書き）

リリスとリネイヤが空気。

エクシアの形状は読者のご想像にお任せします。

第4話 復活！不屈の心（前書き）

またまた、内容が薄いです。そして、短め。

第4話 復活！不屈の心

魔法少女リリカルなのは 　　↓ 聖騎士と黒騎士 ↓

第4話 復活！不屈の心

なのは視点

私は今、エクシアに設置されている訓練室に来ていた。何故、訓練室にいるかは数分前にさかのぼる。

↓ 数分前 ↓

私はリネイヤにレイジングハートの修理が完了したという知らせを聞いて、整備室にやってきた。

「久しぶり、レイジングハート。また、一緒に戦ってくれる？」

《もちろんです。マイ マスター》

「なのは。レイジングハートの頼みでレイジングハートを強化しました。」

リネイヤが強化したレイジングハートの説明を受けた。

宝具を使えばいいのだが、宝具には下のような注意点がある。

- ・召喚する際、大きな隙ができる。
- ・宝具を開放する時、莫大な魔力を消費する。
- ・能力が強力なほど大きな魔力を消費する。

閑話休題

レイジングハートには、新システム、マテリアルシステムが搭載された。

マテリアルシステムとは、“マテリアル”という膨大な魔力を溜め込んだ宝石をデバイスに組み込み、開放することで脅威的な身体能力を発揮するシステムである。

「調子をみたいから、模擬戦をやってください。」

そして、冒頭に戻る。

「いくよ、レイジングハートー!!」

《All right・my master》

「レイジングハート・イクスペリオン、セットアップー!!」

《スタンバイ レディ》

バリアジャケットを纏っていく。

バリアジャケットは聖騎士モードの騎士甲冑と同じだが、両肩に縦長のシールドのようなもの（イメージはOOライザーの両肩の装備）が追加されて、本体にはライフルのような取っ手と所々青と白の装甲が追加されている。（イメージは映画版のレイジングハート）

「リネイヤ、仮想敵を召喚して。」

訓練室に出現したのは、私を襲った機械兵だった

「いくよ、デイベインバスター！！」

百体はいった機械兵の内、約三十体がパワーアップしたデイベインバスターに呑み込まれる。

威力がSLBぐらいになってるの。

残りの機械兵が襲いかかってくるが……

「ドラグーン！！」

両肩にある盾から4つずつ、合計8個のピットが射出される。

ピットはそれぞれ違う動きで機械兵を破壊していく。

「マテリアル ロード！！アクセルモード、発動！！」

《ロード マテリアル》

なのはが赤い光を纏い、その場から一瞬で消え去る。

群がっている機械兵の中心に現れたなのは赤い光が混じった桜色の魔力を収束させる。魔力球を放ち……

「デイベインコレダーー!!」

魔力球が破裂し、機械兵をなぎはらう。

「はい、終了です。」

残った機械兵が消滅し、リネイヤに声をかけられる。

「問題ありません。」

「うん。ありがとうね。」

「さて、リリスを起こしに行こうか？」

今だ寝ている寝坊助のリリスを起こしに行こうとした時、リネイヤが何かを感知した。

「天界に……侵入者!!」

「えっ!!」

天界は本来、幻想種か幻想種の血を持つ者しか入る事ができないらしい。私はリネイヤが召喚したため、入る事ができた。

私たちはエクシアで天界へと向かった。

第4話 復活！不屈の心（後書き）

レイジングハート、復活！しかもかなりパワーアップして。

諸設定2

諸設定

リリス・グレイセス

年齢：五歳ぐらい？

魔力量：SSS以上

魔力光：銀色

魔法：古代ベルカ式

デバイス：ファフニール

（容姿）肩まである銀髪のストレート。右目が青、左目が赤のオツドアイ。

竜の遺伝子に適合した少女。人見知りが激しい。BJは白と青の法衣。背中に銀色の翼を出すための穴がある。普段は髪に隠れて見えない。ポジションは前衛アタッカー。竜化すると銀色の竜（イメージはMHのリオレウス希少種）になれる。魔力はなのはより少ない。寿命が人間より遥かに長い。

ファフニール

種類：アームドデバイス

術式：古代ベルカ式

リリスのデバイス。天界にあったデバイスでリネイヤが修理・改良した。

（待機状態）竜の翼をモチーフにしたペンダント。

（ファーストフォーム）長めの西洋剣。柄にカートリッジシステムを搭載。両手持ち。

（セカンドフォーム）片刃の大剣。柄にカートリッジシステムを搭載。

（サードフォーム）スナイプライフル。取っ手の部分がマガジンになっている。色は銀色。

レイジングハート・イクスペリオン

種類：インテリジェントデバイス

術式：ミットチルダ式

リネイヤによって強化されたなのはデバイス。

（通常モード）映画版のレイジングハート。

（バスターモード）上に同じ。

（エクシードモード）原作と同じだが、マガジンがライフルの白と青の取っ手になった。

（プラスターモード）原作と同じ。幻想種になったため、反動なし。

（アクセルモード）マテリアルを開放し、魔法の威力や身体能力を極限まで高める。プラスターモードと併用して使用可能。

マテリアルシステム

莫大な魔力を溜め込んだ宝石を搭載し、開放することで脅威的な身体能力を得る。しかし、アクセルモードが終了すると再充填が完了するまで使えない。

サブパーツ

ツインブースターシールド（TBS）

なのはの両肩の装備（イメージはOOライザーの両肩の装備）。魔力を放射することで機動力を上げる。盾として使う事ができる。

ツインライフル

TBSの裏側に装備された青と白の装甲がついたライフル。
盾として使う事ができる。

ツインライフル

TBSの裏側に装備された青と白の装甲がついたライフル。
(イメージはストライクフリーダムofライフル) デイバインシュー
ター並みの威力を連射できる。

ツインセイバー

TBSの裏側に装備された天使の翼をモチーフとした鍔の剣。刀身
は魔力で構成され、長さは自由自在。

ドラグーン

TBSに搭載されている青色のピット。半自立行動型のパーツで形
状はストライクフリーダムのドラグーンを小型化して羽根を付けた
もの。特殊なバイパスを使って魔力を供給している。魔力刃を展開
できる。

魔法説明

ジャッチメント

黒騎士モードの時のみ使用可能。術者が対象とした物のみ破壊する。

デイバインコレダー

魔力を圧縮した魔力球を打ち出し、破裂させて攻撃する魔法。

諸設定2（後書き）

書いてて思ったが、レイジングハート、なんというチート能力だ！最強だろ！

なのはは膨大な魔力を持ってるし……

無茶苦茶な設定ですが、この設定で突っ走ります。

次回は原作では脇役に近かった2人が魔法少女になります。

第5話 侵入者（前書き）

オリキャラが多すぎて台詞がないキャラが出てきてしまう。誰でも良いから私に文才をください……。。

第5話 侵入者

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士

第5話 侵入者

リネイヤ視点

天界に侵入者が侵入した。これはかなり危険である。天界にはいくつものロストログヤが安置されている。正しい使い方をすれば、安全だが、力に溺れ、改編を行う者がいるかも知れない。夜天の書のように……

「エクシア、天界への転送ポートを開け!!」

《了解しました。お気をつけて、マスター、リネイヤ。》

エクシアはこの艦の管制人格である。そのおかげでこの艦は自動航行が可能になっている。

因みにリリスはまだ夢の中だ。それにリリスの専用デバイス“ファフニール”は整備・強化中なので戦えない。

「先に行くよ、リネイヤ。」

主が一足先に転送ポートに入り、天界に向かう。

私も急ごう。

く天界く

私が天界に到着した瞬間、ある物の発動を感知した。

「これって……“炎牙の剣”と“氷牙の剣”が起動した……」

主も感じたのか……

「急ぎましょうー!!」

数分後、安置室に着いた私たちが見たのは……

なのは視点

安置室にいたのは、フェイトとは違う金髪の少女と紫ばい髪の少女だった。

「アリサちゃん、すずかちゃん………」

私は思わず、2人の名前を呼んだ。

「なのはちゃん………」

「なのは……あんだ、何で此处に!？」

「え」と………」

なのは、事情を説明中……………

「ふ〜ん。そんな事があつたんだ……。」「

「でも、2人はどうして此処に?」「

「「呼ばれたから。」「」

2人の声が見事にハモった。

アリサちゃんとすずかちゃんは、一緒に遊んでいた時に声を聞いて、
此処に来たらしい。

「じゃあ、そのまま…契約したの?」「

「ちゃんと説明したわ!」「

アリサが持つてる“炎牙の剣”から赤毛の少女が出現する。(全長
30cm)

「久しぶりだね、イフリート。」「

「おう。それと“炎牙の剣”の事はちゃんと説明した上で契約した。
」

「そっか。なら良いけど。」「

「そう言えば、なのはちゃんは何になったの?私とアリサちゃんは
精霊だけだ。」「

「真祖の吸血鬼」

「…………私の血を吸ったら怒るわよ。」

「吸わないよ!!」

アリサちゃんがかかなり真面目に言ったけど、かなり失礼だと思うの。

「ねえ、なのはちゃん。管理局は危ないって本当?」

真剣な顔をしたさすがなのはに質問する。

「…………誰から聞いたの?」

静かに返す。

「セルシウスから。……………本当なんだね。」

なのははさすがの言葉に静かに頷いた。

「イフリートも言ってたけどどういうこと?」

アリサが言う。

「私が説明します。」

リネイヤ、事情を説明中……………

「組織は一枚岩じゃないって事ね。」

事情を理解したアリサが言う。

「私も協力するわ。“炎帝”アリサ・バニングスがね。」

「私も手伝うよ。」

アリサとすずかが自主的に協力を申し出たが、なのはは渋った。なにせいつ大怪我をするか、わからないからだ。しかし、アリサとすずかの熱意に結局はなのはが折れ、アリサとすずかが協力することとなった。

リネイヤがアリサとすずかを鍛える（リネイヤ自身、かなり強い。）ため、訓練室に向かった時だった。

通信が入ってくる。

「リンディさんから？」

空間モニターを操作して、通信を繋ぐ。

画面に現れたのは、緑の髪をした女性、リンディだった。

『なのはさん。三提督も協力を申し出ました。』

「そうですか。わかりました。」

『早速だけど、三提督からの依頼よ。』

ミットチルダの地図が表示される。地図には赤い点が一つ表示されている。

『この研究所の調査が最初の依頼よ。違法研究所の可能性があるわ。』

「わかりました。直ぐに向かいます。」

そう答えるとなのはは通信を切った。

違法研究所の可能性がある研究所の調査か……どうして、人は人を道具として扱うのかな……

なのははリリスの事を思い出していた。道具として酷い扱いを受けた少女。

考えても仕方ない。これ以上悲しい思いを……悲しい子供を作らないために私は戦う。

再び決意を固めたなのははリネイヤに念話を繋いだ。

『リネイヤ。そっちはどう?』

アリスとすずかの訓練の事である。

『びつくりしました。魔法に触れて僅かなのにきちんと使えてました。実戦に出しても大丈夫です。』

『ちょうど良かった。リンディさん……というよりは三提督からの依頼がきたの。直ぐに向かうから、2人に着いてくるなら転送ポートにくるように言うておいて。』

此方の要件を伝えると念話を切り、転送ポートに向かう。

転送ポートはエクシアと天界に設置されている。アリサとすずかが訓練しているのは天界の訓練室である。

「転送ポート前」

「遅いわよ、なのは!!」

かなりご立腹のアリサちゃんがいました。すずかちゃんも苦笑いしながら立っていました。

よく見ると、2人共バリアジャケットを纏って、戦闘準備万端だった。因みにイフリートとセルシウスは2人の隣に浮いている。

アリサは白く肩辺りに火の粉の刺繍が入ったチャイナ服に黒い腰巻きと黒いマント羽織った姿。そして、腰には“炎牙の剣”フランベルジュ。

すずかは青いワンピースに白いコートを羽織った姿。腰には“氷牙の剣”アイスコフィン。

「アリサちゃん。落ち着いて。話が進まないから。」

ご立腹のアリサを宥めるすずか。

すずかちゃん。“氷牙の剣”と契約してから性格が変わってない？

「で！どんな依頼なの？」

まだ若干ご立腹状態のアリサが尋ねる。

「ある研究所の調査が今回の依頼だよ。」

地図を見せる。

「じゃあ、さっさと行きましょう。」

リネイヤが転送ポートを操作して、座標を合わせる。転送ポートが開かれると6人は研究所上空に転移した。

第5話 侵入者（後書き）

アリサとすずかが魔法少女化！（というよりは精霊化）以前からやってみたいと思っていました。

第6話 クローン

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士

第6話 クローン

なのは視点

転送ポートから対象の研究所の上空に転移したなのは達。眼下には何かの研究所。

「どうすんの？」

「まず、情報を入手しないと。リネイヤ。」

リネイヤは頷くと研究所にハッキングを開始した。

数分後、なかなかセキュリティが固かったようだが、リネイヤにとつてはあまり苦ではなかったみたいで、数分たらずでハッキングを完了した。

リネイヤは空間モニターを呼び出し、全員に手に入れた情報を見せる。

「黒だね。」

表示された情報から察するに、この研究所はプロジェクトFで生まれた子供を使用し、実験を行っていた。2つの魔力変換資質を持たず実験を行っていた。子供はプロジェクトFの失敗作らしい。ある家族に依頼で作られたが、性別が異なったため廃棄されらしい。

閑話休題

しかし、私は子供の画像に違和感があった。表示された情報では子供は4歳ぐらいのはず。しかし、写し出されている映像はカプセルに入っている“赤子”だった。赤子の胸元には赤い宝石が付いていた。

「クリシスの……輝石……!!」

画像を見たリネイヤが驚く。

リネイヤが言うには第19管理外世界にある宝石で人に寄生し成長する。そして、寄生が終わると寄生された人間は死んでしまうらしい。

「どうして、リネイヤさんは知っているのですか？」

すずかちゃんがリネイヤに質問する。

「私のかつての主がその次元世界の人間だったんです。」

「まあいいわ。黒なら、突入して占拠すればいいわ。イフリート！」

「おっしやー!!暴れるぜ!!」

「ユニゾン・イン!!」

アリサの髪が炎のような赤色になり、目も灼眼に変化する。アリサは赤く煌めく“炎牙の剣”フランベルジュを抜刀すると流星の如く研究所に突進して行った。

「私たちも行こっか、セルシウス？」

「はい。」

「ユニゾン・イン」

すずかの髪が氷のような青色に変わり、瞳の色も水色に変化する。青く煌めく“氷牙の剣”アイスコフィンを抜刀し、アリサと同じように突入して行った。

私とリネイヤの視線が合う。

「はあ〜」

2人揃って溜め息を吐いた。

研究所に入ると警備していた魔導師が倒れていた。

奥に居たのは炎の壁と氷の壁を張ったアリサとすずかだった。

音からして銃撃戦になってるだろうな……

「リネイヤ。」

「了解。」

「「ユニゾン・イン」」

聖騎士モードになり、翼を広げる。

「デュランダル。」

なのはの手に黒い刀身の大剣が召喚される。なのはは両手でしっかりと握り、振りかぶる。

「すべてを抜う……」

『アリサちゃん、すずかちゃん、退いて!!』

『うん。』『わかったわ』

アリサとすずかが壁を解除する。解除された瞬間、無数の魔法弾が迫ってくる。

「破魔の剣!!」

デュランダルが横に屈み払うと突風が発生し、無数の魔法弾を打ち消す。さらにバリケードとバリケードを張った魔導師ごと吹き飛ばす。

デュランダルの能力は魔法無効化。開放すると剣で発生させた風ですら無効化能力を含む。欠点は自分の魔法も無効してしまう事であ

る。

「先を急ごうか。」

「あんた……反則的な能力ね。」

宝具を開放したから結構な魔力を消費したんだよ？

デュランダルで倒した魔導師で全員だったようで、楽に占拠できた。子供も無事に救助できた。しかし、もう1つ問題がある。子供に埋め込まれて“クリシスの輝石”だ。リネイヤが言うには“要の紋”という物が必要だが、手元にはない。原料となる抑制鉱石は採掘できる場所が限られ、特定の人物でないと加工できないらしい。

「他に方法は無いの？」

「……幻想種となれば、進行は止まるはずです。」

「なら、急いで天界に戻りましょ。」

6人と赤子は天界に戻った。ちなみに時空が安定したため、時間の流れは同じになっている。

リネイヤ視点

“クリシスの輝石”か……懐かしい物を見たな。あれから大体四千

年は経ってるのにな……。ミトスはマーテルが死んでからどうしたのだろうか？

マーテル。私のかつての主……。

物思いに耽っている内に天界に到着した。

「だけど、どのロストロギヤと契約させるの？」

肝心な事を忘れていました。天界にあるロストロギヤは自分で主を選ぶのだ。

6人（イフリートとセルシウスは分離済み。）があれこれ悩んでいた時……

『私の元へ連れて来て。』

高い女性の声が聞こえて来た。

「これは……ヴォルト!!」

“雷牙の双剣”の管制人格ヴォルト。天界に安置されているロストロギヤで“炎牙の剣”や“氷牙の剣”と同時期に作られたとされている。

私たちは“雷牙の双剣”が安置されている部屋へ向かった。

部屋には中心に台座が置いてあるだけ。台座には2つの剣が交差す

るように刺さっていた。

「ヴォルト、連れて来たよ。」

《すまない、リネイヤ。私もそろそろ主が欲しいのでな。》

「“クリシスの輝石”からこの子を開放できそう？」

《精霊に人が作った物は効かん。》

きっぱりと言った。

「じゃあ、お願い。」

リネイヤが頼む。

「アリサちゃん、すずかちゃん、あの子の教育をお願いできる？」

なのはが2人に頼む。

「任せなさい。ちゃんと育てるわよ!」

「うん。」

2人は笑顔で了承した。

「エステルは私たちがきつちりとそだてるよ。」

「「「「「エステル?」」」」」

アリサを除く全員の声がハモる。

「この子の名前。 エステル・グレイセス。 名前がないと可哀想ですよ？」

アリサの意見に反対する者は居なかった。そして、名無しの少女は
エステル・グレイセスとなった。後に“デュアルタイプ多重属性”という二つ名で
呼ばれる事になるとは誰も知らなかった。

第6話 クローン（後書き）

新しいオリキャラが登場。本編に載せて居ませんでした。エステルの魔力変換資質は電気と炎です。

宝具設定

デュランダル

（形状）黒い刀身に黄色のラインが入った大剣。

（能力）魔法無効化

（備考）聖騎士の状態の時、使用可能。魔力の消費がかなり多い。開放時の台詞は「全てを祓う破魔の剣」。

第7話 邪竜降臨

くエクシア デバイス整備室く

カタカタッ

整備室にキーボードを叩く音が響く。

「やっと完成だ。」

蒼髪の女性の前には竜の翼をモチーフにしたペンダントが入ったカプセル。

魔法少女リリカルなのは

く聖騎士と黒騎士く

第7話 邪竜降臨

リネイヤ視点

エステル救出から数日後、エステルは無事に“クルシスの輝石”から解放された。エステルはアリサとすずかが面倒を見ている。エステルは自我が発達している。輝石に寄生されていた間も自我は発達したらしい。少しぐらいの会話なら可能になった。ちなみにアリサとすずかは毎日、学校に行った帰りに此处に来ている。

閑話休題

さて、私は何をしているかというと、リリース専用のデバイス：ファ
フニールの調整だ。リリースが主と一緒に戦いたいと言って聞かなか
ったからだ。本当は助けしてくれた恩返ししたいのだろうな。

「リリース、起きろ。」

整備室のソファで寝ているリリースを起こす。

「うーん……リネイヤさん、おはよう。」

まだ眠たい目を擦りながら、言う。

「おはよう。だが、もう昼前だぞ。」

現在の時刻は11時を過ぎた頃だ。リリースは起きるのが誰よりも遅
い。

「早く顔を洗ってこい。」

「はい。」

（昼食）

エクシアは居住区を設けているので、全員居住区の食堂で食事を摂
る。今回の食事当番は主である。

食事中。しばしお待ちください。（BY作者）

「リリース。ファフニールが完成したから後で整備室まで取りに来てね。」

「はい。」

リリースの返事を聞いた私は整備室に戻った。

なのは視点

「レイジングハート。実現出来そう？」

《聖騎士の書なら可能ですが、黒騎士の書は不可能です。》

私が提案した“魔導書リンクシステム”。魔導書に記されている魔法を魔導書を展開せずに使えるようにするシステム。しかし、黒騎士の書の魔法はかなりの制御能力が必要なため、リンクシステムは使えない。

「まあ、聖騎士の書の魔法がタイムロス無しで使えるだけでよしとしよう。」

《はい。》

「さてと何処も異常無しと。」

機器を停止させた瞬間、扉が開いた。

「なのは、システムの調整か？」

扉から入って来たのはリリースとリネイヤだった。

「うん。問題なし。何時でも使えるよ。そっちはファフニールの受け取りでしょ？」

カプセルからファフニールを取り出し、リリースに渡す。

「詳しい事はリネイヤに聞いて。」

リネイヤに任せて、部屋から出ようとした時、リネイヤに声を掛けられた。

「ファフニールの調子を見たいので、模擬戦をお願いしたいのですが……」

模擬戦か…リンクシステムを試すにはちょうど良いね。依頼も特に無いし。

「良いよ。先に訓練室で待ってるから。」

そう言い残して、私は整備室から退出した。

リリースがどれだけ成長したか、楽しみだね。こっそり訓練してた見たいだし。さてと訓練室に行こうと。

〈訓練室〉

リリス視点

リネイヤさんからファフニールの説明を受けた後、私は直ぐに訓練室へ直行した。

訓練室ではなのはさんがレイジングハート・イクスペリオンを起動させて、聖騎士モードで待機していた。観席にはアリサさんにすずかさん、エステルとリネイヤさんが居た。

「ファフニール!!」

ペンダントを手に握り

「セットアップ!!」

ファフニールを起動させた。

《A n f a n g》

女性の機械的な声が響くとファフニールが起動し、着ていた服が分解され、青と白を基調とした法衣状の騎士甲冑を纏っていく。ペンダントが変形し、銀色の西洋剣になる。柄にはカトリックシステム。刀身には不思議な文字（ルーン文字と言っらしい）が刻まれている。

「準備完了だね。じゃあ…行くよ!!」

なのはさんが纏う気配が変わる。どうやら本気みたいだ。

「ファフニール！！カートリッジ　ロード！！」

《Explosin》

カートリッジがロードされ、魔力が流れ込んでくる。足に魔力を溜めて、爆発させる。

「ッ！」

一瞬でなのはの懐に入るリリース。

「邪竜…一閃！！」

ファフニールを力の限り降り下ろす。

《プロテクション》

しかし、桜色の壁に阻まれる。

「ちっ！」

一旦、後ろに下がり、距離を開ける。

やっぱり一筋縄じゃないか……

「ファフニール！！」

カートリッジを三発ロードする。

剣が銀色の魔力を纏い、纏った魔力が剣の形状を形作る。

「ブレード……」

剣を降り下ろす。なのはは飛行魔法を発動させて避けて後ろに回ろうとするが……

「リアクターー!!」

一撃目を放った体勢で剣を振り上げ、追撃する。

「なっ!!」

多少のタイムラグが発生すると思っていたなのはは避ける事ができずに命中してしまう。

柄が開き、空薬莖が排出される。鍰のダクトが開き、煙が排出される。

「はぁ……少しは……はぁ…届いたかな……?」

爆煙を見て、肩で息をしながら見上げる。

ブレードリアクターはかなりの威力を誇るが、攻撃範囲に比例して消費魔力が上がる。いくら莫大な魔力があるとは言え、無限ではない。

「……びっくりしたよ。まさかタイムラグ無しに追撃してくるなんて。」

「！！！」

煙が晴れると騎士甲冑を所々焦がしたなのはが居た。

「魔導書リンクシステムが完成してなかったら危なかったよ。」

なのはは直撃する直前、聖騎士の魔導書から“聖霊の加護”を発動させたのだ。

「正直、“聖霊の加護”が突破されるとは思わなかったよ。」

「今度はこっちの番だよ！！ドラグーン！！！」

ツインフースターシールド
TBSからドラグーンが射出され、リリスを包囲する。

「まずい！！」

ドラグーンが一斉に攻撃する。

翼を展開して身体を覆い、背後からの攻撃はパンツァシールドでガードする。

「はっ！！」

立ち止まった所でツインセイバーを振るわれる。

「アクセルモード起動。マテリアル…ロード！！！」

《ロード マテリアル》

青い光を纏う。マテリアルをロードし、身体能力が極限まで上がる。一瞬にしてその場から消える。ちなみにアクセルモードの時に纏う光はマテリアルの色によって違う。

次で決める！！

「ストレイヤー……」

ばら時かれた魔力が球体になり、私の周りを旋回する。この球体はガードだ。私が見える最強を放つための時間稼ぎ。剣にも魔力が収束する。

「ヴォイド！！」

姿が消えた瞬間、なのはの後ろに瞬間移動し、魔力を収束させた剣で横に薙ぎ払う。

当たれば無傷ではすまないだろう。だが……

「なっ！幻影！！」

リリスが切り裂いたなのはは陽炎のように消滅した。

「ゲームオーバーだね。」

背後から首筋にツインセイバーが突き付けられる。

「……………参りました。」

善戦した物の負けてしまった。

「びつくりしたよ。あれほど強いとは思わなかったよ。」

なのはさんが素直に誉めてくれる。だけど……なんか悔しい。

「それにしても最初の“アレ”は何なの？」

「“瞬動”です。」

「“瞬動”？」

「足に収束させた魔力を爆発させて常人には見えない速度で移動する方法だよ。」

弱点は直進しかできない事だ。

本来の目的であるファフニールの調子は問題なかった。最後になのはさんからアドバイスを貰って部屋に戻った。

今日は疲れたな。大技を2つも使ったし。

「お休み。ファフニール」

《お休みなさい、マスター。良い夢を。》

私はベッドにダイブした。今日はいい夢を見れそうだ。

自分の主であるリリスが眠りについた事を確認するとファフニール

も机の上でスリープモードになった。

第7話 邪竜降臨（後書き）

戦闘描写が難しいです。リリスの技の元ネタはSO3です（邪竜一閃は違うけど）。思いつかなかったためです。後、“ロストログア”が“ロストログヤ”になっていたらしいです。すみませんでした。

オリジナル魔法

聖霊の加護

使用者：高町なのは

（効果）一定値以下の魔力の攻撃を無効化。一定値以上の場合はダメージ軽減。

（備考）消費魔力が少なく、使いやすい。

ブレードリアクター

使用者：リリス

（備考）魔力を収束させ、タイムラグ無しの連続攻撃を行う。攻撃範囲に比例して消費魔力が増加する。

第8話 古代ベルカの遺産（前書き）

後半がグダグダです。

第8話 古代ベルカの遺産

魔法少女リリカルなのは 〈聖騎士と黒騎士〉

第8話 古代ベルカの遺産

リリス視点

私は今、なのはさん、すずかさんと一緒に森の上空を飛んでいた。三提督からの依頼で遺跡に向かっていた。管理局員が頻繁に出入りしているとの情報があったからだ。最も用があるのは遺跡の近くに設置されている研究所のほうだが。

「古代ベルカの遺産か……聖王教会がしたら激怒しそうだね。」

「最悪は全面戦争だね。」

なのはの独り言にすずかが答える。

『暇なので早く来てください。』

「ごめんね、リネイヤ。」

リネイヤさんは先行して情報を収集している。

「もうすぐ着くよ。……ほら見えた。」

20メートルほど先に上空に浮かんでいる2人の人影があった。リネイヤとセルシウスである。リネイヤは能力を使っている間は無防備になるため護衛としてセルシウスが付いている。

「どうだった？」

「“黒”ですね。」

空間モニターが3人の目の前に表示される。

表示された情報を全員が目を通す。この研究所は融合型^{ユニゾン}デバイスや古代ベルカの遺産の研究が目的。研究所の見取り図も載っていた。

「リネイヤ、この黒い部分は何なの？」

なのはの言う通り見取り図の一番下の部分には何も書かれていない真っ黒な空間があった。

「コンピューターが独立しているせいでわかりません。まともな研究をしている事はないでしょう。」

「まあ、全体を回らないといけないから……」

「さすががおどおどと言っつ。」

「そうだね。いくよ。」

「うん。セルシウス!!」

「はい。」

「さあ、初めての実戦だ。気合い入れて行くよ、ファフニール!!」

《はい。リリース》

「レイジングハート!!リネイヤ!!」

《了解です。マスター。》

「はい!」

「「「セット アップ!!」」」

なのは視点

「デイベインバスター!!」

襲って来る魔導師を桜色の閃光が貫く。

「リネイヤ、最初の目的地は!？」

『この先を真っ直ぐ行った所です!!』

通路の奥には硬く閉ざされた白い扉があった。

「撃ち抜く!!」

レイジングハートを構え、扉を撃ち抜こうとするが、なのはの横を一筋の突風が駆け抜けた。

「ブレードリアクター!!」

ファフニールを握ったリリスが銀色の剣で真つ二つに切り裂く。

「魔力の無駄遣いですよ、なのはさん。」

振り返ったリリスがにっこりと微笑む。

「昔から『全力全開』がモットーだからね。」

「『全力全壊』の間違いじゃあないの?」

「リリス!!」

「ふふつ。」

扉の奥には誰も居らず、手術台のような物と端末があるだけだった。

「誰も居ない……逃げられたかな?」

悔しそうに言うのは。

「いえ、地下の方に生体反応が多数あります。おそらく地下に移動したのかと……」

ユニゾンを解除したりネイヤが言う。

「なのはさん。見てください。」

リリスが手術台を指差す。手術台には30cmぐらいの淡い金髪の少女が縛りつけられていた。

「ユニゾンデバイス…。」

「しかも古代ベルカでも珍しい属性特化型のユニゾンデバイスです。」

近くにあつた端末を操作しながらリネイヤが言う。

“属性特化型ユニゾンデバイス”とはその名の通り1つの属性に特化したユニゾンデバイスの事である。ユニゾンすると属性魔法を大幅に強化することができる。イフリートやセルシウス、ヴォルトも属性特化型ユニゾンデバイス的一种である。

閑話休題

「とにかく助けよう!」

なのはが拘束具を外して行く。

少女はかなり弱っていた。

まずいな。かなり弱ってる。とにかく回復させないと。

「彼の者に聖なる癒しを…、キュアライト。」

少女を優しい光が包み、癒していく。すると少女の呼吸がみるみる落ち着いてきた。

「ひとまず安心だね。」

安心した瞬間、床が氷つき、円形の穴が空く。

「みんな、大丈夫!？」

穴から出てきたのはセルシウスとユニゾンしたずずかだった。

「ずずか（ちゃん）（さん）!!」「」「」

ずずかはなのは達とは別に地下の方に向かっていた。

「無事みたいだね。」

「そんなに急いでどうしたの？」

「地下の部屋を見つけたよ!!」

「!!行ってみよう!!」

なのは達はずずかが空けた穴から地下の部屋を目指した。

↓研究所 地下↓

穴から降りた場所は通路になっており、通路の先には地上よりも硬く閉ざされた白い扉があった。

「この扉が壊せないの。」

「任せて！！ディバインバスター！！」

カートリッジを三発ロードしたディバインバスターを放つ。

すると扉は完全に吹き飛ばされた。扉の奥には白衣に身を包んだ研究者たちがいた。

「貴様は、“白き騎士”！！」

“白き騎士”というのは、なのはの二つ名で翼が白い事からそう言われるようになった。

「此処で何をしていたの？」

「人体実験だよ。」

なのはの質問に何でも無いように答える。

「そんな事をしていいと思ってるの！？」

怒りを洗わにしたさすがが言う。

「管理局の正義に貢献できるんだ！！喜ばしい事ではないか！！」

プチっ！！

周りにいたリネイヤ達はしつかりと聞いた。研究者の言葉になのは完全に切れた。

「……全てを破壊しろ……」

なのはの翼が黒く染まり、左手に黒騎士の書が出現する。

「全て呑み込め……」

リネイヤ達もなのはを止めようとしないう。リネイヤ達も口には出さないがかなり怒っていた。

「歪められし時空の扉よ、開け……デストラクション！！」

研究者たちの足元に漆黒の空間が現れ、研究者たちを呑み込んでいった。全員が呑み込まれると空間はゆっくりと閉じていった。

「……時空の狭間で眠れ。」

「ぐっ！」

なのはが膝をつく。

「……なのは（ちゃん）（さん）！！」「」

“デストラクション”はかなりの魔力を消費する。いくら幻想種になったとは言え、さすがにきつい。

「大丈夫……だよ。」

改めて研究室を見渡して見る。部屋には何かの端末と子供の入ったカプセルが置いてあった。

リネイヤが端末を操作して、カプセルの液体を排出する。カプセルが開き、子供が倒れ掛かって来る。

「おっと。」

なのはが子供を支える。カプセルごしでは上手く見えなかったが、髪はアリサとは違う金髪。年齢はリリスと同じぐらい。

「!!!!!!……リリスと同じか……。」

「? どうしたのなのはさん?」

「この子……リリスと同じみたいだね。リリスは竜だったけど、この子は……」

少女の背中には四枚二対の白と黒の翼が生えていた。

「天使の遺伝子を組み込まれた子だよ。」

??? 視点

私は人間が嫌いだ。自分の欲望のため、私を産み出した。それだけなら良かった。しかし、あいつらは私に幻想種の遺伝子を埋め込んできた!!!それはもう地獄のような痛みだった。

だから、人間は嫌いだ。

私はオリヴィエ。聖王オリヴィエのクローン。

私が生まれて何年経っただろう。正直、どうでもよくなった。突然、建物が揺れ、研究者たちが浮き足立っていた。数分後、カプセルから解放された。

近くで誰か喋っているのが聞こえる。うつすらと目を開けてみると黒い服を着た少女が見えた。

「気が付いた？」

少女は私に微笑んだ。

「はっはい。」

この人は何か優しい感じがした。この人なら信じていいと思った。

「私、高町　なのは。君を助けに来たんだよ。」

私を助けるに？

「君の名前は？」

「……オリヴィエ。正確には聖王オリヴィエのクローン。」

「驚いた。まさか自分の存在を自覚しているとはな。」

「リネイヤ、どうだった？」

「この子は遺跡で発見された“聖王の方舟”で見つけた遺伝子から産み出された聖王のクローンです。」

「そう。…………オリヴィエ。」

「はっはい。」

「君はどうする？」

「えっ？」

「私たちと一緒に来る？」

私は迷った。断れば、自由になれるが、追い掛け回される。了承すれば…………デメリットが無いな。それに私と同じみたいだし。なら迷う事はない！！

「一緒に行く。」

「そっか。」

「そう言えば、さっき助けたユニゾンデバイスは？」

疑問に思ったりリスが質問する。

「さすがが連れていった。治療したと行っても応急措置だからな。」

「ふん。」

「じゃあ、行こうか、オリヴィエ？」

「えっと…何処に？」

なのははにっこりと微笑んで…

「貴方の新しい居場所に。」

と言った。

余談だが、聖王の方舟はオリヴィエの説明で聖王の血筋が居ないと意味が無いので遺跡の入り口を塞がれた。因みに研究所は跡形もなく消滅したらしい。

第8話 古代ベルカの遺産（後書き）

こんにちは、蒼妃です。オリキャラとしてオリヴィエのクローンを登場させました。オリヴィエの翼は上の二枚が白、下の二枚は黒の羽です。

因みに“聖王の方舟”は今は名前だけです。後にちゃんと登場します。

第9話 祝福の風（前書き）

後少しでSTS編に突入する予定です。

第9話 祝福の風

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士く

第9話 祝福の風

なのは視点

オリヴィエ救出から数週間が経過した。最初は警戒心を洗わにしていたが、日に日に警戒心は薄れていき、今は完全に馴染んでいる。今、私はリネイアの呼び出しでエクシアのデバイス整備室に向かっている。

「リネイアさんの用事って何だろう？」

なのはの右隣を歩いているリリスが言う。

「オリヴィエのデバイスの事じゃないのですか？」

なのはの左肩に乗っている“聖なる閃光”セフィリアが声を掛ける。

“聖なる閃光”セフィリア。数週間前、オリヴィエと同じ研究所で助け出した光属性の特化型ユニゾンデバイス。光属性の魔法を使うのがなのはとオリヴィエしか居ないため、2人と一緒に居る事が多

い。

閑話休題

「完成したのかな、母さん？」

なのはの左隣を歩く金髪オッドアイの少女、オリヴィエ。なのはの事を『母さん』と呼び、一番なついている。

「後は最終調整だけだから……完成していてもおかしくないよ。」

「早く見てみたいな。私のデバイス。」

そんな会話をしている内にデバイス整備室に到着。

デバイス整備室の扉を開くとリネイヤと銀髪の女性が座っていた。

「リイン……フォース……さん。」

すると銀髪の女性が振り向き……

「久しぶりだな、小さな勇者よ。」

と言った。

「修復は頼んだけど……こんなに早いとは……。」

「頑張りましたから♪」

ユニゾンデバイスの製造にはかなりのお金と時間が必要なのだが、リネイヤは管制人格の搭載されていない魔導書“闇氷あんひょうの書”の管制人格として登録したため、時間がかなり節約できたらしい。（但し、お金は結構かかっている。）

「まさか二度もお前に助けられるとはな。」

ふつ。と鼻で笑うと真剣な表情になって…

「リネイヤから事情は聞いている。私も協力したいのだが……まだ、主が居ないから戦闘はできない。」

するとなのは何か閃いたようで…

「なら、はやてちゃんを管理局から遠ざけてくれますか？」

管理局を潰すためにははやてやフェイトが障害になってしまつ。なのは2人とは戦いたくないので説得するつもりだったのだ。

「ああ。夜天の書の真実を知れば、協力してくれる筈だ。」

「「「夜天の書の真実？」」」

リネイヤ以外の3人の声がハモる。

「そうか。お前たちは知らないのだな。時は時空管理局が発足する時にさかのぼる。」

リインフォースは静かに語りだした。

時空管理局は設立当初は信用があまり無かった。そこで管理局は自ら造り出した犯罪者を捕まえる事で現在の様な信用を得た。そのうちの1つが“闇の書”もとい“夜天の書”。しかし、予想外にも“闇の書”の転生機能が暴走し、破壊することが出来ず、八神はやてが主となるまで続いた。

「これが夜天の書…闇の書の真実だ。」

「酷い……。」

「権力を得るために罪も無い魔導書を犠牲にするなんて……」

「徹底的に潰さないと駄目みたいだね。」

上からリインフォースの話を聞いたリリース、オリヴィエ、なのはのコメントです。

リインフォースはスクツと立ち上がった。

「私はそろそろ行くでしょう。」

「私の事は内緒でお願いします。」

まだ話すべき時じゃないしね。せめて研究所の破壊が後じゃないと。

「何故かは聞かないでおこう。お前の事だ、何か考えがあつての事なんだろう。」

「まあね。はやてちゃんが協力してくれるようなら、連絡をください。」

「ああ。わかった。」

そう言うところインフォースは転移魔法を発動させて、何処に転移して行った。

オリヴィエ視点

夜天の書の管制人格。オリジナルの記憶では知ってたけど、オリジナルの記憶とは随分性格が違うな。

所詮は死んだ人の記憶か。

「オリヴィエ、此れ。」

母さんから手渡されたのはミニチュアの二つの剣が銀の鎖で留められたブレスレットだった。

オリヴィエは見覚えがあった。母親であるのはに言って作ってもらったデバイスである。開発にはリネイさんも参加したらしい。

「オリヴィエのリクエストを際限なく取り入れたファフニールと同

じくらしい高性能なデバイスだよ。」

「ありがとう、母さん!!」

満悦の笑みを浮かべるオリヴィエ。

（やっぱり王族の遺伝子かな。）

なのはは心の中で呟いた。

「名前はまだ無いから、オリヴィエがつけてあげて。」

そう言われて、あれこれ考えるオリヴィエ。

何か良い名前、無いかな？……そう言えば、私の翼って白と黒なんだから……そうだ！

「この子の名前はルシエル！」

《名称ルシエル、認識。よろしく願いします、マスター　オリヴィエ。》

男性のような電子音が響く。

「うん」

「ルシエルはミット式と古代ベルカ式の両方に対応してるから。模倣戦をしたいならリリスに頼むと良いよ。」

「何で私？」

リリースが不満をもらす。

「私は結構忙しいし、リリースなら接近戦と遠距離戦の両方を行えるから。」

しかし、リリースの不満はなのによって一刀両断された。

「うっ！」

事実なので何も言い返せないリリース。

その時、通信が繋がれた。通信の相手は協力者（または共犯者）であるリンディ提督だった。

「なのはさんっ！」

しかし、何時もと違って何か焦っていた。

「どうしたんですか？そんなに慌て……」

『管理局の端末を弄くつていたら、貴女の遺伝子情報が持ち出されていた事がわかったの！！』

「「「！！」」」

リリースを除く3人は目を見開いた。リリースは『何か問題でもあるの？』と頭に疑問符を浮かべていた。

『貴女だけじゃなく、はやてさん、フェイトの遺伝子情報も流出していたわ。』

高ランクの魔導師の遺伝子情報を盗み出して、する事と言えば、更なる高ランク魔導師の生産である。しかし、所詮は人。幻想種であるのは達には到底敵わない。だが、盗み出されたのはなのはの遺伝子である。なのはは幻想種の遺伝子と適合する事が出来る。それによって幻想種を大量生産される事を恐れているのだ。

「研究所の場所は!？」

『第8管理世界よ!』

「わかりました。直ぐに向かいます。」

『……………此方も援軍を送りたいけど…上層部がほとんど管理しているから、不可能なの。ごめんなさい』

そう言ってリンディは通信を切った。

「エクシア!!聞いてたね!直ぐに第8管理世界に向かって!!」

《了解しました。》

「さて、誰が突入するか、だが……………」

おそらく一番の年長者であるリネイヤが仕切る。

「なのはとリリス、セフィリアの3人と……」

「私も参加するからね！」

突入組に立候補したのはオリヴィエだった。

「オリヴィエ……。わかった。但し、無茶しちやあ駄目だからね？」

「うん」

「決まったな。突入組なのはとリリス、セフィリアにオリヴィエの4人。私はすずかやアリサと共にエクシアに待機しておく。」

リネイは一旦、言葉を切って……

「長引くと管理局が出てくる可能性がある。早急に決着をつけよう。」

「

なのは達は本名は知られていないが、“殲滅集団”“白き騎士”（なのは限定）という二つ名で管理局から危険視されているのだ。

「……うん！」「」「」

エクシアは全速力で目的地第8管理世界に向かった。

第10話 怒り

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士く

第10話 怒り

なのは視点

リンディ提督から凶報を受け、研究所に向かうが……

「見張りが居ない……」

研究所に突入して数分が経過したが、見張りの魔導師が1人も居ないのである。

「セキュリティが解除されてるては言え、おかしい。」

敵が居ない事に油断していたのか、自分の足元が開いた事に気付かなかった。

「しまっ！」

なのはオリヴィエは落とし穴に落ちて行った。

「くっ……此処は？」

周りは頑丈そうな壁に覆われていた。

「落とし穴の最下層みたい……」

「くくくっ……ようこそ。我が研究所へ、白き騎士。」

見上げると壁の上の方にガラスが張っており、白衣を着た研究者が立っていた。

「貴方が此所の責任者？」

「そうだ。まさか、こんなに早く嗅ぎ付けられるとはな……。」

研究者が指パッチンをやる。

壁の一部が開き、その奥から竜や鬼が出てくる。

「まさか……此れって？」

オリヴィエも驚愕している。

「そうだ！こいつらは失敗作品だよ！さあ、殺せ！！」

幻想種の遺伝子に適合できないと“暴星モンスター”となってしまう。暴星モンスターは周りを破壊する事しか出来ない。

研究者の命令で暴星モンスターが襲い掛かってくる。ざっと見て百体はいる。

「さあ、殺せ！！お前達のオリジナルを！」

「！！！！！！」

（そっか、私の遺伝子を使ったんだ。百人の命を犠牲にして……）

「レイジングハート…モードリリース。」

なのはの命令でバリアジャケットを残し、待機状態に戻るレイジングハート。

「ルシエル……セツトアップ。」

オリヴィエはルシエルを起動し、騎士甲冑を纏っていく。背中には黒と白の翼。黒いインナーとタイツのような黒いズボン。さらに白い腰巻き。手には2つの大剣。

なのはの姿が変貌する。背中にはコウモリのような羽。髪は銀色に。目は赤色に。八重歯が異常に伸びる。

「吸血鬼……だと。」

研究者が驚いたような声をあげる。

なのはは普段、吸血鬼としての力を封印しているため、なのはが吸血鬼である事を知ってるのはごく一部の人間だけである。

「ごめんね。苦しい思いをさせて……でも、今楽にさせてあげる。」

爪を伸ばし、鋭い刃物となった爪で切り裂く。

しかし、与えたダメージは直ぐに再生する。

なのはは無言で爪に魔力を通す。すると爪は暗い赤色に輝き、もう一度切り裂くと異形のモンスターはそのまま絶命した。

「何だとー!!」

研究者は驚愕している。

普通、幻想種は傷を負ってもすぐさま再生する不老不死である。しかし、なのはは幻想種をいともかんたんに殺したのだ。

（『幻想種は幻想種しか殺せない。』か……リネイヤが言っていたのはこの事だったんだね。）

なのはは研究所に来る前、リネイヤから幻想種の対処法を教えられた。

幻想種には、幻想種特有の“幻想術”という魔法がある。普段、なのはが使っている魔法とは違い、魔力を別の物質“マナ”に体内で変換し、マナを消費して使う。魔法の威力は数倍高い。種族によって使える術が違うのも特徴である。この場合、なのはは爪にマナを纏わせ、切り裂いたため傷が再生しないのである。

「穿て、“影の牙”……」

なのはの影が伸びて、暴星モンスターの足元に広がり、影の中から剣が出てきて、影の上に居た暴星モンスターを串刺しにする。

「食らい尽くせ、“影狼”……」

影の中から黒い狼が現れ、暴星モンスターを喰らう。

吸血鬼が使える幻想術“変影術”。影を色んな物に変化させて攻撃する術。消費マナが少なく、発動までの時間が短い。短所は影が無いと使えない事である。

なのはが放った影狼は粗方の暴星モンスターを食らい尽くした。なのはの方に残っているのは、後五体だけである。

ガアアアア！！

残りの五体は一斉に襲い掛かって来るが、次の瞬間には爪で細切れにされた。

なのはのバリアジャケットは返り血で赤く染まっていた。

「……………」

なのはは無言で影の中に入り、研究者の前に移動する。

「ば、化け物……………」

「そうだね。私は……………化け物だよ！」

なのはの爪が研究者の心臓を突き刺し、研究者は命を落とした。

「オリヴィエ……………大丈夫かな……………」

オリヴィエ視点

なのはが暴星モンスターと戦ってる間、オリヴィエも暴星モンスターと戦っていた。

「はあっ！」

手に持った大剣で暴星モンスターを切り裂く。

暴星モンスターはそのまま絶命した。良く見るとオリヴィエの大剣がうつすらと白い光を放っていた。

オリヴィエのような天使だけが使える幻想術“光輪術”。天使には色んな種族があり、天使が使える幻想術をまとめて“天使術”という。オリヴィエが使っているのは、白天使と墮天使のハーフが使える“光輪術”である。“光輪術”はマナを消費する事で広範囲殲滅魔法を使用する。しかし、詠唱が長い。消費マナが多い。詠唱中は無防備などの弱点がある。

「切り裂くは光の刃……チャクラム“光輪”」

オリヴィエの手に光の輪っかが形成され、オリヴィエはチャクラムのように輪っかを投げ、暴星モンスターを切り裂いていく。

（便利だけど……マナの消費が激しい…。）

チャクラムを遠隔操作して、次々と暴星モンスターを切り裂いていく。

聖王としての実戦経験があるオリヴィエが暴星モンスターを全滅させるのにあまり時間はかからなかった。

なのはオリヴィエが暴星モンスターを全滅させるのと、ほぼ同時にリリースとセフィリアが合流した。

4人で研究所をくまなく搜索した結果、成功作品であろう三人の少女が見つかった。

搜索を終えた後、研究所はオリヴィエの“破滅の光”によって跡形も無く、消滅した。

くエクシア 会議室く

「孤児院を作ろうと思う。」

「くくくくへっ?」「くくくく」

なのはが突然切り出した。

エクシアの居住区には限りがあり、結構埋まっているのだ。これからも増えていく筈だから、孤児院を作った方が良いというのがなのはの意見だ。

「いいと思うよ。」（すずか）

「まあ、遅かれ早かれ必要になるし、良いんじゃない。」（アリサ）

「いいと思う。」（オリヴィエ）

「賛成です。」（リリース）

ちなみにユニゾンデバイス達は『主が納得なら反対しない』とのこと。

「名前はどつするの？」

とすずか。

「もう決めてあるよ」

となのは。

「どんな名前なのよ？」

とアリサ。

“ラスタリア
星の核”

なのはは静かにそう言った。

第10話 怒り（後書き）

こんにちは、蒼妃です。

ちよつと日にちが空いてしまいましたが、無事に投稿しました。急いで執筆したため、変になっているかもしれません。

次回はSTS編の設定を投稿する予定です。本編は一気に8年後になります。

S T S 編

キャラクター設定（前書き）

所々、矛盾があるかもしれません。

STS編 キャラクター設定

キャラクター設定

高町 なのは

種族：真祖の吸血鬼

年齢：19歳

二つ名：“灰色の福音”等
(レアスキル)

通常状態：無し

聖騎士状態：空間隔離

黒騎士状態：空間消滅

(魔力光)

通常：桜色

聖騎士モード：白銀

黒騎士モード：漆黒

（魔力量）SSS以上

（BJ）闇の書の防衛人格の騎士甲冑に酷似。通常と聖騎士は白で黒騎士は黒。ただし、腰にアーマーが追加され、金色のファンネルが装備されている。

幻想術：変影術

三提督直属の部隊“幻想の騎士団”の隊長。四年前に家族に生存報告をした。原作と同じように空港火災の時にスバルを救出。その後はやてに見つかり、生存がバレる。普段は吸血鬼の力を封印しているため、“変影術”は使えない。吸血鬼状態は銀髪と赤目。公の場では黒いバイザーを着けている。

アリサ・バニングス

種族：炎の精霊

年齢：19歳

二つ名：“炎帝”

レアスキル：炎舞

（魔力光）赤色

（魔力量）SSS相当

幻想術：精霊魔術

（使用デバイス）

炎牙の剣フランベルジュ

属性特化型ユニゾンデバイス イフリート

（ＢＪ）火の粉の刺繍が入った白いチャイナ服に黒いマントと腰巻き。

幻想の騎士団の特攻隊長。 エステルの育ての親。

月村 すずか

種族：氷の精霊

年齢：１９歳

二つ名：氷帝

（魔力光）クリアブルー

（魔力量）ＳＳＳ相当

幻想術：精霊魔術

レアスキル：氷舞

（使用デバイス）

氷牙の剣アイスコヒイン

属性特化型ユニゾンデバイス セルシウス

（ＢＪ）青いワンピースの上に白いロングコート。

幻想の騎士団の技術顧問。スカリエッティと共に超小型の魔力炉を開発した。エステルの育ての親。

八神 はやて

種族：氷狼

年齢：１９歳

二つ名：“夜天の王”等

（魔力光）白銀

（魔力量）ＳＳＳ以上

レアスキル：原作同様

幻想術：幻覚魔術

（使用デバイス）

闇氷の牙ニブルヘイム

闇氷の魔導書

属性特化型ユニゾンデバイス リンフォース・アイン

（ＢＪ）原作と同じ。腰にニブルヘイムをさしている。

幻想の騎士団の副隊長。魔力変換“氷結”と“闇”を持っている。
“闇氷の魔導書”と契約し、幻想種“氷狼”になった。リンフォースから事情を聞いて、幻想の騎士団に所属。スカリエツティとの面識有り。因みにリンフォース・ツヴァイも存在している。半獣化すると黒い獣耳が生える。

オリヴィエ・グレイセス

種族：白天使と墮天使のハーフ

年齢：１３歳（精神年齢は不明）

二つ名：“真祖の左腕”等

（容姿）ヴィヴィオと瓜二つ

（魔力光）虹色

（魔力量）ＳＳＳ以上

レアスキル…聖王の鎧

幻想術…光輪術

（使用デバイス）

天使の牙ルシエル

（ＢＪ）黒いインナーとタイツのようなズボン。腰には白い腰巻き。首に黒色のロングマフラーを巻いている。

古代ベルカの王族、聖王オリヴィエのクローン。幻想の騎士団の隊長補佐。人間が嫌いで他人には冷たい。しかし、心を許した相手には本来の性格を見せる。実は甘えん坊。使用術式は古代ベルカ式。四枚二対の翼で上が白い翼。下が黒い翼。戦闘方法は普段は二本の大剣での近接戦闘。本気状態はジエネシックアーツ。

リリス・グレイセス

種族：銀竜人

年齢：１３歳

二つ名：“真祖の右腕”等

（魔力光）銀色

（魔力量）ＳＳＳ以上

レアスキル…無し

幻想術…風術

（使用デバイス）

邪竜の翼ファフニール

（BJ）白と青の法衣。背中に翼を出す穴が開いている。

幻想の騎士団のFW。

エステル・グレイセス

種族…雷の精霊

年齢…8歳（精神年齢は12歳）

二つ名…雷帝

（魔力光）金色

（魔力量）SSS相当

（容姿）赤色のツンツン頭で後ろ髪を腰と肩の中間まで伸ばしている。目の色は青。

レアスキル…雷舞

幻想術…精霊魔術

（使用デバイス）

雷の双剣ガラドボルグ

属性特化型ユニゾンデバイス ヴォルト

（BJ）エリオのバリアジャケットの色違い。コートの色が黄色。半ズボンが黒の長ズボンになっている。

幻想の騎士団のFW。魔力変換“電気”と“炎熱”を持っている。

ティアナ・L・グレイセス

種族…大天使

年齢…16歳

二つ名…幻の天使

（魔力光）橙色

（魔力量）SSS以上

レアスキル…月詠の魔眼

幻想術：紋章魔法

（使用デバイス）

大天使の銃剣アカツキ

クロスミラージュ

（BJ）原作のバリアジャケットに黒色の腰巻きと白色のロングマフラーが追加された姿。

兄、ディードが死んだ後、幻想の騎士団に拾われた。FWの指揮官を務める。単身でも一騎当千如し力を持っている。背中に六枚三対の白い翼が生えている。しかし、普段は幻想術を使って見えないようにしている。（他のメンバーは翼の出し入れができる。なのはは出来ない。）因みに大天使とは、白天使の上位種。

リグレット・グレイセス

本編10話でなのは達が助けた少女の1人。種族は聖天使。年齢は11歳。顔立ちなのはそっくりでフェイトと同じ金髪のセミロング。目の色は黒。使用デバイスはセラフィム。孤児院“星の核”^{ラスタリア}の守護役。争いを好まないため、幻想術は滅多に使用しない。

シェリア・グレイセス

リグレットと同じく助けられた少女。種族は鳳凰。年齢は11歳。なのはそっくりの顔立ちで髪が茶髪のロング。目の色は赤色。使用デバイスはフェニックス。リグレットと同じく守護役。幻想術は鳳凰魔術。

アスベル・グレイセス

リグレットと同じ金髪のロングヘア。使用デバイスはミスリル。リグレットと瓜二つなのでよく間違えられる。幻想術は陣魔術。

用語説明

《真祖の吸血鬼》吸血鬼の上位種。人並み外れた身体能力を有し、幻想種一の再生能力を持っている。他人の血を飲む事で魔力を回復させる事が出来る。

《氷狼》別名フェンリル。足の速さは幻想種一。中位種。

《大天使》白天使の上位種。六枚三対の白い翼が特徴。防御能力が極めて高い。

《精霊》妖精の中位種。1人が一つの属性を司る。自分の体を司る属性に変える事が出来るが、消費するマナが多い。

《銀竜人》竜人の上位種。攻撃力が極めて高い。同じ竜人の上位種の金竜人が存在する。銀色の力強い翼が特徴的。

《聖天使》白天使の中位種。四枚二対の翼が特徴。

《鳳凰》炎鳥の上位種。治癒魔法が得意。炎の翼が特徴。

《変影術》マナを消費して影を変化させる幻想術。消費マナが少なく、使いやすいが、影が無いと使えない。

《光輪術》莫大な量のマナを消費して広域殲滅魔術を行使する幻想術。しかし、詠唱が長く、詠唱中は無防備になるという弱点がある。

《精霊魔術》マナを消費して使う魔術。攻撃が主。

《幻覚魔術》相手に幻覚を見せる魔術。消費マナが少ない。詠唱時間を確保するのに使われる。

《風術》マナを消費して天候を操作する魔術。消費マナが膨大な上に威力の加減が出来ないため、滅多に使わない。

《鳳凰魔術》治療に特化した魔術。攻撃魔術も存在するが、消費マナが膨大。

《紋章魔法》自分の体に紋章を刻む事で発動させる魔術。また、媒体にも刻む事でより術を安定させる。補助から攻撃までこなす魔術。

《陣魔術》魔術陣を描く事で発動する魔術。マナの消費は少ないが、隙が大きい。

《炎舞》アリサのレアスキル。高熱の炎を生成する能力。“炎熱”より威力が高い。炎を操作する事も可。

《氷舞》すずかのレアスキル。炎舞の氷属性バージョン。

《雷舞》エステルレアスキル。炎舞の雷属性バージョン。

《月詠の魔眼》ティアナのレアスキル。相手に幻術をかけたり、相手の動きを先読みする能力。

《幻想の騎士団》三提督直属の部隊。機動六課と協力関係を築いている。

《星の核》ラストリアミッドチルダにある孤児院。違法実験の被験者が集められている。特殊な結界で守られており、特定の間しか入れない。

《超小型魔力炉》すずかとスカリエッティが協力して開発した魔力炉。次元航行艦に搭載されている物より魔力の生成量はかなり少ない。

《ジェネシックスーツ》オリヴィエが開発した独自の流派。内部破壊を重点に置いて大威力の攻撃を放つ。

原作との違い

- ・スカリエッティが真面目で協力者。
- ・ティアナが凡人ではない。
- ・クイントが生きている。

S T S 編

キャラクター設定（後書き）

ティアナをチートにしてみました♪

デバイス設定（前書き）

原作と同じ物は省略しています。

デバイス設定

デバイス設定

ファンネル

所有者：なのは

腰のアーマーについている半自律行動型のデバイス。（形状は不知火暁のドラグーン）数は六基。リネイヤとセフィリアとツインユニゾンする事でドラグーンと併用して完全制御が出来る。さすがが発明した超小型魔力炉を搭載している。

セフィリア

ロード：なのはとオリヴィエ

属性：光

（容姿）青い目に金髪のロングヘアー。

（B J）白い法衣。

研究所でオリヴィエと一緒に助け出された属性特化型ユニゾンデバイス。天然さん。

イフリート

ロード：アリサ

属性：炎

（容姿）赤髪のツンツン頭。髪はショートヘア。目は灼眼。

（ＢＪ）黒と赤の鎧に赤のスカート。

炎牙の剣に封印されていた属性特化型ユニゾンデバイス。ユニゾンする事で精霊魔術の詠唱を短縮する事が出来る。性格はツンデレ。

セルシウス

ロード：すずか

属性：氷

（容姿）クリアブルーの髪に水色の瞳。髪は肩ぐらいまで伸びている。

（ＢＪ）白と青を基調としたインナーと前開きの水色のスカート。

氷牙の剣に封印されていた属性特化型ユニゾンデバイス。性格は冷静であり喋らない。

ヴォルト

ロード：エステル

属性：雷

（容姿）金髪のセミロングで瞳は満月のような黄色。

（ＢＪ）エステルとお揃い。

雷の双剣に封印されていた属性特化型ユニゾンデバイス。性格は陽気。いかうち

リインフォース・アイン

ロード：はやて

属性：闇と氷

（容姿）原作同様。

（ＢＪ）原作同様の姿に白いロングコートを着ている。

世にも珍しい２つの属性に特化したユニゾンデバイス。ツヴァイになつかれている。

フランベルジュ

所有者：アリサ

（待機状態）赤い宝石の付いたブレスレット。

（通常モード）綺麗な炎の色をした片刃剣。鍰の中心に赤いコアがある。

（ボーゲンフォルム）フランベルジュのフルドライブ。レヴァンテイのフルドライブに酷似。

アイスコフィン

所有者：すずか

（待機状態）白い翼のペンダント。

（通常モード）繋ぎ目が銀色。刀身は氷のようなクリアブルー。鍰は白い翼のようで中心に青いコアがある。

（フルドライブ）アイスコフィンが4つになり、十字手裏剣になる。

ガラドボルグ

所有者：エステル

（待機状態）ミニチュアの剣が2つついたブレスレット。

（通常モード）右手に外側が黄色。内側が黒の刀身に赤色の鍰の剣。左手に外側が赤色。内側が黒の刀身に黄色の鍰の剣。右手の剣にコアがある。

（2ndモード）2つの剣を繋げたモード。

（フルドライブ）2ndモードの状態で刀身が曲がり、弓状になる。矢は魔力で構成。

（追記）アリサ、すずか、エステルの武器にはカートリッジシステムはついていない。強度が低くなるから。代わりにマテリアルシステムが搭載されている。

闇氷の魔導書

所有者：はやて

闇属性と氷属性の魔法が記された魔導書。“夜天の魔導書”と一つにする事で“夜天の魔導書”に記された魔法が使用出来るようになった。

ニブルヘイム

所有者：はやて

（待機状態）青いブレスレット

外側が青く、内側が漆黒の刀身をした剣。刀身が歪んでいる。魔法の発動媒体にもなり、“シュベルトクロイツ”の代わりに使っている。鞘から抜くと刀身が伸びる不思議な剣。カートリッジシステム

は柄にあり、六連式リボルバー。ちなみに柄はかなり伸ばせるため、
槍としても使える。

アカツキ

所有者：ティアナ

（待機状態）六枚の羽が描かれたカード

（通常モード）銀色のガンブレード。剣の部分に紋章が刻まれている。銃の部分には黄金の装甲がついている。グリップの所がカートリッジになっている。

（ツールハンドモード）通常モードのガンブレードが小さくなり、全く同じ物がもう一つ形成される。

（フルドライブ）形状変化無し。

ルシエル

所有者：オリヴィエ

（待機状態）2つの剣が交差した形状のアクセサリ。

（通常モード）二本の大剣。片刃で刀身は銀色に覆われた黒。白いラインが交差するように入っており、交差点に赤いコアがある。カトリッジは“ニブルヘイム”と同じ。

（ツールランスモード）二本の大剣が二本の十字槍に形状変化する。

カートリッジは通常モード同様。コアは刃の中心についている。

（ガントレットモード）両肘まで覆う白銀のガントレットに黒いグローブ。グローブの甲にコアがついている。ジェネシクアーツを使う時は必ずこの状態。

セラフィム

所有者：リグレット

（待機状態）二枚の羽が描かれたカード。

クロスミラージュのカラーリングを白と黒に変えた物。形状変化もクロスミラージュと同じ。

フェニックス

所有者：シェリア

（待機状態）赤い宝石のついたネックレス。

シェリア自身前線に出ない典型的な後方支援のため、形状は菱形にコアがはまり、赤い鳥の羽がついた杖。剣十字に近い。

ミスリル

所有者：アスベル

（待機状態）ミニチュアの剣。

すずかがシグナムの“レヴァンティ”をモデルにしたため、形状変化はレヴァンティと同じ。違うのは鰐が翼の形をしている事だけ。

デバイス設定（後書き）

次回から本編に入ります。

第1話

再開（前書き）

今までで一番グダグダです。才能の無い自分が嫌になります。

第1話 再開

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士

第1話 再開

ミッドチルダの廃工業地区。本来なら人が居ない地区の一角に2人の少女が居た。

「ふっ！」

蒼い髪の少女が拳を打ち出す。

「スバル。あんまりやると試験前にそのおんぼろローラー、壊れるわよ。」

「うゝ、ティア。そんな不吉な事、言わないでよゝ。油も射したし。」

オレンジ髪の少女、ティアナの皮肉（？）に反応する蒼い髪の少女、スバル。

「はゝい。受験者二名揃ってますか？」

空間モニターが開かれる。

「確認しますね。受験者スバル・ナカジマと…」

「はい！」

「ティアナ・ランスタ！」

「はいっ！」

（久しぶりだね。リン。）

元気良く返事をするティアナは心の中で懐かしんでいた。

「習得魔導師ランクはCランク。これから受けるのはBランク昇格試験。間違いないですか？」

「間違いありません。」

「はい。私はこの試験の試験官を務めるリンフォース・ツヴァイ空曹長です。よろしくですよ。」

「よろしくお願いします！！」

「試験会場から少し離れた所」

「よし。コースチェック終了。」

「ご苦労様、母さん。」

奥から金髪オッドアイの少女が出てくる。

「オリヴィエ。そっちはどうだった？」

“母さん”と呼ばれた女性、高町なのはは自分の娘、オリヴィエ・グレイセスに問い掛ける。

「無事に制圧。エステルやリリスが手伝ってくれたからかなり楽だったよ。」

オリヴィエに与えられた仕事は違法研究所の制圧である。

「2人は？」

「エクシアに戻ったよ。」

「そう。なら、レイジングハート。エクシアにいるみんなとクイントさんにこの試験の映像をリアルタイムで送ってあげて。」

《了解しました。》

「誰が受けてるの……って、ええー！……！！」

試験を受ける2人の片割れを見て、オリヴィエは驚愕した。

「ティ、ティアナ……！！」

オリヴィエとティアナは互いに信頼出来るパートナーだった。2人は幻想の騎士団のFWの指揮官を務めていた。しかし、数年前ティアナは忽然と姿を消した。自分の愛機アカツキを残して……

「私も見つけた時は驚いたよ。自分に特殊なリミッターを付けて訓練校に入ってるんだもん。」

「ティアナ、会ったらお仕置き。」

「ほどほどにね。」

数分後

「ティアナ、幻術の腕上げたね。」

モニターにはティアナの得意魔法“オクティブハイド”を使ったコンビネーションでターゲットを撃破する2人の姿が映っていた。

「それにあのスバルっていう子。まだまだ荒削りだけど、流石はクイントさんの娘だけの事はある。」

オリヴィエが素直な感想を述べる。

オリヴィエとなのはが2人の試験の様子を観察してた時、事件が起

こつた。

「あれ？モニターが……」

さつきまで正常に映っていたモニターが急に映らなくなったのだ。

「どうしたんだろう？」

（設置したサーチャーに問題が発生したのかな？）

そう思いなのは端末を操作するが、モニターには変化が無い。

『なのはちゃん。』

通信が開かれる。通信して来たのは、なのはと同じように試験の様子を観察していた八神はやてだった。

「どうしたの、はやてちゃん？」

「うん。サーチャーに流れ弾が当たったみたいだな。ちょっと見えてくれへんか？」

「わかったよ。」

通信が切れる。

《セットアップしますか？》

「うん。でも、バリアジャケットだけでいいよ。」

《了解しました。》

なのはが白いバリアジャケットを纏い、背中に白い翼が生える。

「私も行きます。」

オリヴィエもルシエルを起動させて、バリアジャケットを纏い、背中に白と黒の翼を生やしていた。

く上空く

「見つけた!!」

「どうやら無事に進んでいるみたい。」

空には建物を繋ぐように青い道ができているのがなのは達の位置から見えた。

「“ウイングロード”……。やっぱり使えるんだ。」

“ウイングロード”。スバルの母親であるクイント・ナカジマが持つ先天的固有技能。空に魔力で構成された道を展開して、その上を自在に駆ける事が出来る。

（そう言えば、最近クイントさんと模擬戦してないな。この試験

が終わったら久々に挑みに行こう。」

そう心に決めたオリヴィエ。意外に彼女もバトルジャンキーである。
(それとも聖王の遺伝子の影響か)

その時……

『デイベインバスター!!』

ピルを青い閃光が駆け抜けた。

「今の母さんの魔法……だよな？」

「うん。確かにスバルの前で一度だけ使ったから、それを真似たんだろうね。」

「まあ、クイントさんの娘なら出来てもおかしくないか……」

「さあ、大丈夫そうだから、私たちはゴールに向かおうか？」

「りょーかい。」

2人の安全を確認したなのはオリヴィエはリインフォース・ツヴァイとセフィリアがいるゴール地点に向かった。

書き忘れて居たが、セフィリアはツヴァイの補佐をしている。

一方、ティアナは……

スバルに背負ってもらってゴール地点を目指していた。

「ティア、お願い!!」

「言われなくてもわかってるわよ!」

ゴール手前のターゲットを撃ち抜く。

「はい♪ターゲット、オールクリアです。」

遠くから、リインフォース・ツヴァイの声が聞こえる。

「ティア、時間は!!」

「まだ大丈夫!!」

「よし!!魔力……全開!!」

スバルのかけ声と共にローラーの速度が上がっていく。

そこでティアナは気付いた。スバルが止まる事を考えずに加速している事を。このままでは危険行為で減点される事に。

それに気付いたティアナの行動は早かった。腰に付けているホルダーから特殊な紋章が書かれた札を取り出し、札に“マナ”を流す。

今度は“マナ”を流した札を可能な限り前方に投げる。札に書いた紋章が“マナ”に反応し、“紋章術”を発動する。

凄まじい突風が吹いて来てみるみる速度を落とさせていく。

ティアナとスバルは何もなくゴールした。

「2人共、お疲れ様です♪」

「ツヴァイもちゃんと試験官出来てたし、私は要らなかったんじゃない？」

「ちっさ……」

スバルが咄嗟に洩らした言葉をツヴァイは聞き逃さなかった。

「むっ！今、小さいって言いましたね！！」

「まあまあ、リイン。落ち着いて。」

剥れるリインに対して、宥める声が上空から聞こえる。

ティアナもスバルも驚いた。

スバルにとっては命の恩人。

ティアナにとっては自分を拾い、鍛えてくれた人。そして、たくさんの心配を掛けたであろう人物。

「久しぶりだね、スバル。四年ぶりかな？」

「あつ……なのは…さん……。」

（良かったね。スバル。）

ティアナは2人の様子を優しい眼差しで眺めていたが、背筋に悪寒が走る。

「さて、ティアナ。用件はわかってるよね？」

「そうですよ、ティアナさん。」

恐る恐る後ろを振り向くと明らかに不機嫌さを醸し出しているオリヴィエとセフィリアだった。

「自分のパートナーをほったらかしにして何をしてたのかな？」

「しかも、自分の愛機まで置いていつて。」

「えっと………すいませんでした!!」

ティアナはすぐに土下座した。どこから考えても自分が悪いのだ。

「まあ、今は保留。お仕置きは覚悟してなさいよ?」

「……………はい。」

ティアナに逃げ場は無かった。

この後、はやてとフェイトが降りてきて、場所を移動して試験の結

果発表をする事になった。

第1話

再開（後書き）

ストライカーズ編、開始しました。初っぱなからグダグダになりましたが、頑張って行こうと思います。

STS編

第2話

事情、そして集結（前書き）

今回もグダグダです。

S T S 編

第2話

事情、そして集結

魔法少女リリカルなのは

↓ 聖騎士と黒騎士 ↓

第2話

事情、そして、集結

ティアナ視点

Bランク試験を受けた私は数年間会ってない恩師である高町なのはに再開した。結果を聞くために連れて来られた建物ではやてさんからある話を聞かされた。

『機動六課』

管理局の改革派ばかりを集めた夢の部隊。

「お邪魔だったかな？」

「ええよ。ちょうど話し終えた所やし。」

はやてが話し終えた時、なのは、オリヴィエ、セフィリア、ツヴァイが入ってくる。

「じゃあ、試験の結果だけど2人共、文句無しの合格です！」

「ヤッターー!!」

スバルが思わず立ち上がる。

「ティアー!! やったね!!」

スバルがティアナに抱き付く。

「うつさい、スバル!! そして、抱き付くな!!」

「喜んでる所悪いけど、返事聞かせてくれへんか？」

「私は受けます。」

つか、私に拒否権無いしね。

「ティアが受けるなら、私も受けます!!」

「そか。じゃあ、これから同僚やね」

話が終わったので退出しようとした時、はやてが口を開いた。

「あつ! ティアナ二等陸士は残ってな」

「はい。というわけで先に帰ってて。」

「わかった。」

そう返事をするスバルは退室していった。

「さうで、ティアナ。要件はわかってるな？」

ティアナはいつの間にかなのは達に囲まれていた。（ちなみにフェイトは既に退室している。）

そのままティアナはエクシアに連れていかれた。

（エクシア　会議室）

エクシアに備え付けられている会議室にティアナを含む“幻想の騎士団”の全メンバーが集まっていた。

「じゃあ、話してくれるかな？数年間も姿を消した理由。」

「……はい。」

ティアナは静かに語り出した。

ティアナがミッドチルダに一人で降り立った時、偶々次元犯罪者に遭遇してしまい、交戦。そして、駆け付けた管理局員の行動にティアナが切れ、管理局員を半殺しにしまった。その後は色々あって連絡出来ないまま数年間が経過して、今に至る。

管理局員がしようとしたのは一般人を犠牲にしようとしたのだ。

「……………そう言う事なら、仕方ないね。」

ティアナの話聞いたなのはの感想だった。

（よかった。誤魔化せた。本当は執務官に成りたいから、地上に降りたんだよね）。最初の方は真実だけど……………）

なのはの言葉にティアナはほっとした。

「じゃあ、これで解散！」

これが機動六課始動の数日前の事である。

機動六課始動当日

はやての演説は割愛させてもらいます。（B Y作者）

「お互いに自己紹介といきましょうか。」

ティアナが切り出した。

「はいはい。まずは私！名前はスバル・ナカジマ。ポジションはフロントアタッカーだよ。」

「僕はエリオ・モンディアル。ポジションはガードウイング。相棒はストラーダです。」

エステルと似てるな……

「えっと、私はキャロ・ル・ルシエです。ポジションはフルバックです。」

「最後はティアナだよ。」

「わかってるわよ。」

この際だから、全部話しちゃおうかな……。別に話しちゃいけないって言われて無いしね。

「幻想の騎士団所属、ティアナ・L・グレイセス。二つ名は“幻の天使”。ポジションは一応センターガードよ。」

それを聞いた3人はきよとした後、

「「「ええー！」「」」

通路に3人の絶叫が響き渡った。

「ティ、ティアて幻想種だったの!？」

幻想の騎士団は全員が人を超越した幻想種であるという事は結構知られているのだ。

「そうよ。なんなら証拠、見せてあげよっか？」

ティアナは自分に仕掛けていた封印を解除する。するとティアナの背中に六枚三対の白い翼が生えてくる。

「ほえ、天使みたい…」

本当に天使なんだけどね。

「あつ！皆、此处に居たんだ。自己紹介でもしてたの?」

出てきたのはなのである。

「お互いの名前とポジションの確認はしました。」

「そっか、じゃあ、早速で悪いけど、トレーニングウェアに着替えて、訓練所まで来てくれるかな？」

「「「はい!!」「」「」

「訓練所」

なのは視点

「調整終了。それにしてもすずかちゃん、凄い物作るね。」

「まあ、すずかさんですからね。」

そう言うのはなのはの肩に乗っているセフィリアである。

「ティア、真実を話したみたいだね。」

そう言うのはなのはの娘でティアナの相棒だったオリヴィエ。

遠くから足音が聞こえてくる。

「全員揃ったね。じゃあ、此方も自己紹介しておくね。私の事は知ってるはずだから……じゃあ、オリヴィエから。」

「オリヴィエ・グレイセス。相棒はルシエル。後、気安く喋り掛けるな。」

オリヴィエ……さすがにそれはちよつと……ティアナだって苦笑いしてるよ？

「私はセフィリアです。」

「ユニゾンデバイス!!」

エリオは博識だね。

「じゃあ、早速だけど訓練、始めるよ。」

「えつと……此处ですか？」

キヤロの疑問も最もだ。なのはが指し示した場所は海があるだけだった。

「ふふ。セフィリア。」

「りょうかい」

しかし、何も起きない。

「どうしたの、セフィリア？」

「手が届きません!!」

全員がずっこけた。

「アウトフレームになればいいでしょ!」

「あっ!そうでした。」

思い出したようになるのはと同じ年齢ぐらいになるセフィリア。

セフィリアが手を振りかざすと空間モニターが出現する。

「すずかさん特製、なのはさん監修の特別訓練スペース……展開つと。」

すると……

「ビルが生えて来た!!」

何もなかった所にビルが出現した。

さあ、始めるよ♪

F W陣が訓練スペースに入ったのを確認するとなのははセフィリアに命じて、“ガジェット・ドローン”を八機出現させる。

スカリエティとは協力関係を結んでいるが…時が来るまでは表では敵対関係を演じておく事になっている。

最初は全員がA M F（アンチマギリンクフィールドの略称）に戸惑っていたが、すぐに体勢を立て直し、ガジェットを追撃した。

「元気だな〜。」

「まあね。セフィリア、訓練の様子シャーリーに転送しておいてね。」

「了解しました。」

「あつ、召喚魔法。」

オリヴィエに言われて見てみるとキャロの召喚した鎖がガジェットを捕獲していた。

「この子が“運命の剣”に選ばれた子供？」

オリヴィエの言う『この子』とはキャロの事である。

「うん。そうすると私達の同胞だね。」

「鍛えるの私何だけど？」

ティアナがガジェットを撃墜するのを見逃したなのはオリヴィエは記録された映像を見たらしい。

ちなみにティアナは多重弾殻射撃というスキルでガジェットを撃ち抜いた。

STS編

第2話

事情、そして集結（後書き）

ティアナは幻想の騎士団所属だけど、執務官を目指している設定にしました。

STS編

第3話

ファーストアライト(前書き)

最近、スランプ気味で更新が遅れました。しばらくは駄文過ぎるのが続くと思います。

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士

第3話

ファーストアラート

機動六課の発足から数日後。機動六課FW陣はいつものように訓練に明け暮れていた。

「じゃあ、本日朝の仕上げ。シュートイベーション、やるよ？皆、まだ頑張れる？」

「『はい！』『』『』」

なのはの問いに元気良く答えるFW陣の4人。しかし、彼らはもう限界に近いのだ。ティアナは別だが…

「うん、レイジングハート！！」

なのはの周囲に8つのアクセルシューターが出来上がる。

「私にダメージを入れるか、アクセルシューターを五分間避けきつたら訓練終了。1人でもヒットしたら最初から。」

「さっそくだけど、なのはさんの攻撃を五分間避けきる自信ある？」

スバルが三人に問い掛ける。

「ないです。」

「同じくです。」

「私はある。」

「「ティアナ（さん）は黙ってて！！」」

結局、エリオの一撃がなのはに届き、訓練は終了した。しかし、集合した時、スバルのローラーブーツがショートしている事が発覚し、4人に新型デバイスが与えられる事になった。

「シャワールーム」

「じゃあ、スバルさんとティアナさんは訓練校から一緒何ですか？」

FWの女性陣は昔話に花開かせていた。

「そうだよ。2人共、自作デバイスだったし……」

「そして、私の腐れ縁と苦悩の日々が始まった。」

スバルの話にナレーションを入れるティアナ。スバルとキャラは苦笑い。

「そういえば、ティアナさんが“幻想の騎士団”に所属してた頃のパートナーって誰なんですか？」

「あつ、私も気になる。」

キャラの些細な質問に便乗して来るスバル。ティアナは本能的に言うまでスバルが引かないと感じ取った。

「オリヴィエよ。」

ティアナが長年のパートナーの名前を口にした時、ティアナ以外の世界が凍った。

「「ええー！！！？」」

2人の驚きの絶叫がシャワールームの中に響き渡った。

ティアナ以外のFW陣にとってオリヴィエ・グレイセスはどこでも孤独であるというイメージが強いのだ。そのオリヴィエがパートナーを組んでいるのが信じられないのだ。

（まあ、あの子は人が嫌いだからね。）

ティアナはオリヴィエの自己紹介を思い出して、苦笑いした。

「じゃあ、私は先に上がるから。」

いまだに硬直したままのスバルとキャロをほっというてティアナはさっさと出ていった。ちなみに2人が正気に戻ったのは、ティアナが出ていった数十秒後だった。

一方、エリオは……

「みんな…遅いな。」

フリードと一緒に黄昏ていた。

「デバイス整備室」

デバイス整備室のカプセルに4つのデバイスが浮かんでいた。

「これが……」

全員が自分の新型デバイスを見て、目を光らせている。

「そう。あなた達の新型デバイス。私はもちろん。リインフォース姉妹やシャーリー達が見て、意見をだしあって完成させた最高傑作ですよ。」

そう説明するのはなのはのユニゾンデバイス・リネイヤだった。

スバルには青い六角形のペンダント『マツハキャリバー』が。

ティアナにはカード状の『クロスミラージュ』が。

エリオには腕時計の形状の『ストラダー』が。

キャロにはブレスレット状の『ケリュケイオン』が。

4人にそれぞれの自分の新型デバイスが渡される。

「その四機はほとんどまっさらな状態よ。まあ、ある程度の魔法は入ってるけどね。」

リネイヤがそう付け加える。

「あと、スバルのマツハキャリバーにはリボルバーナックルとのシンクロも出来るようにして置いたわ。」

「あつ、ありがとうございます!!」

「……ストラーダとケリユケイオンは変化なしか…」

「うん。」

確かに、待機状態は支給されてた物とまったく大差ない。

「それは違うな。変わって無いのは外見だけで性能は大幅にアップしている。」

ちびっこ2人の疑問に懇切丁寧に説明するリネイヤ。リネイヤが説明をしている時、整備室の扉が開き、制服姿のなのはが入って来る。

「ごめん、みんな!!」

「ジャストタイミングですよ。今から説明しようとしていたところですから。」

「うん。あと、ティアナ、これ。」

なのははティアナに何かを放り投げる。ティアナはそれを掴み取り、驚いたような表情を浮かべる。

なのはがティアナに放り投げたのは六枚三対の翼の絵が描かれている一枚のカードだった。

「“アカツキ”!!」

『アカツキ』

ティアナが『幻想の騎士団』にいた時に使っていた銃剣型のデバイス。ティアナが地上に降り立った時には置いてきぼりにしてしまった相棒。

《久しぶり、ティアナ。》

カードから機械を通したような女性の声が響く。

「うん。ごめんなさいね。今の今までほったらかしにしちゃって。」

《気にしてません。》

「ありがとう。」

此処に大天使とその銃剣は再び再開した。

「じゃあ、説明を始めるよ。みんなのデバイスにはリミッターが掛かってるから、そんなに出力は上がってないから大丈夫だよ。」

ティアナはリミッターは掛かってるわけが無いからね、っと付け加える。

更に詳しく説明しようとした瞬間、緊急事態を知らせるアラームが鳴り響き、はやてから通信が送られてくる。

FW陣の初めての実戦の幕開けである。

～ヘリ内部～

機動六課のFW陣出現の要請が掛かった。

FW陣に加え、なのはとなのはの側近であるオリヴィエとリリースも万が一に備えて乗り込んでいた。

しかし、敵の方も航空機を出して妨害してきた。

「ヴァイスくん。私とオリヴィエも出るよ!!」

「了解ッス!!お気をつけて。」

ハッチが開き、なのはが飛び出そうとする。しかし、オリヴィエは飛び出そうとしない。

「どうしたのオリヴィエ？」

「ティアナも行くよ!!」

「わっわたしも!?!」

どうやらオリヴィエは久しぶりにティアナと一緒に飛びたいらしい。

「でも、スバルが……」

「私が行きましょう。」

ティアナの代わりを申し出たのはリリスだった。

「幸い私はクイントさんと一緒にコンビを組んだ事がありますから。」

クイントとリリスは個人的に仲が良い。実際にクイントとリリスのコンビで『ナンバーズ』と戦わせた結果、全戦全勝だったのだ。

「……………お願いできる、リリス?」

なのはは許可した。

『ついでにキャラの緊張を解しておいて。』

『私に出来るかどうか解りませんが、善処します。』

キャラが緊張しているのは、なのはは勿論。リリスやオリヴィエも知っている。

リリスの实力はティアナも知っているので、納得した。そして、三

人がハッチの立つと……

「スターズ1、高町　なのは!!」

「スターズ0、オリヴィエ・グレイセス!!」

「スターズ4、ティアナ・L・グレイセス!!」

自分のコールサインを叫び…

「「「行きます!!」」」

大空に飛び出して行った。

「レイジングハート!!」

「ルシエル!!」

「アカツキ!!クロスミラージュ!!」

「「「セーット、アープ」」」

三人がバリアジャケットを纏っていく。

肩にツインブーストシールド、腰には金色のファンネル。手には長年の相棒、『不屈の心』レイジングハートを握った高町　なのは。

背中に白と黒の翼を生やし、手には二本の大剣を握りしめるオリヴィエ・グレイセス。

背中に白い六枚三対の翼を生やし、右手にはハンドガンタイプの銃『クロスミラージュ』。左手には『アカツキ』を握ったティアナ・L・グレイセス。

三人は空を飛んでる航空機型ガジェットに向かって、最大速度で飛んで行った。

そして、桃色の髪 of 龍の巫女が決意する時、『運命の剣』は目覚める。

S T S 編 第4話 覚醒（前書き）

まだスランプ気味。

STS編 第4話 覚醒

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士

第4話 覚醒

ヘリから飛び上がった3人は航空機型ガジェットと戦闘を開始する。

「フェイトちゃん!!」

「なのは。一緒の空は久しぶりだね。」

「うん」

「ティアナ。腕鈍ってたら殺すよ?」

ティアナに対して脅迫じみた言葉を言うオリヴィエ。しかし、顔には優しそうな笑みを浮かべている。

「はいはい。来るわよ!?」

大量の航空機型ガジェットが4人に接近してくる。

「ファンネル!!」

なのはが腰に付けられている黄金のファンネルがガジェットを次々に撃ち落として行く。

「オリヴィエ!!」

「了解!!」

「我が紡ぐのは星の唄!!」

「我が紡ぐのは闇の唄!!」

ティアナとオリヴィエが片手を合わせ、合わせていないもう片手をガジェットに向ける。

「星と闇が交わりし時、新たな混沌が生まれる!!」

ティアナの手に白い球体が。

オリヴィエの手に黒い球体が形成される。

形成された2つの球体が交わり、マーブル色の球体を形成する。

「カオス・ソーサラ!!」

白と黒の閃光が奔流となり、ガジェットを呑み込み、破壊していく。

『カオス・ソーサラ』

本来、幻想術行使に使われる『マナ』を光と闇属性の魔力に変換し、複合させて一斉に敵に放つティアナとオリヴィエの最終奥義。

本来は、貫通能力を司る光属性と破壊能力を司る闇属性は相反する関係である。

しかし、相対する属性を上手く合わせると爆発的な威力を出す事が出来る。カオス・ソーサラはその原理を応用した奥義である。

「ふえ〜。ティア、強……」

一撃で航空機型ガジェットのほとんどを破壊したティアナとオリヴィエの攻撃に驚きを隠せない。

「ティアナとオリヴィエのコンビは“幻想の騎士団”最強と言っても過言ではありません。」

リリスは急に立ち上がり、俯いているキャラに近付く。

「怖い？」

「えっ？」

なのはから頼まれていたため、キャラに話し掛けるリリス。

「自分の力が恐い？」

「自分の持つてる龍召喚の力が。」

キャラはおどおどしながら頷く。

「でもね、私からしたらそんな力はちつぽけな物だよ？」

そう言いながらリリスは自分の象徴である銀色の龍の翼を顕現させる。

「私は龍族の上位種の銀龍。」

「おい、お前ら！！そろそろ降下ポイントに到着するぞ！」

ヘリの操縦士・ヴァイスから報告？が来る。

「時間が無いね。でも、キャラ。これは覚えておいて。」

リリスはキャラの顔をまっすぐ見つめ、言った。

「一番恐いのは、必要な時に自分の力を信じられない事。だから、自分と仲間を信じて？貴方は1人じゃない。」

「はい！」

今まで悲しそうな表情だったキャラの表情が明るくなる。

「じゃあ、行くわよ！？スバル！！」

「はい！」

ヘリのハッチが開き、リリースとスバルがリニアレールに向かって降りて行く。

「ファフニール!!」

「マツハキヤリバー!!」

「「セット・アップ!!」」

2人がバリアジャケットを纏い、列車の甲板に降り立つ。

「あれ？このバリアジャケットって……」

スバルが自分のバリアジャケットを見て、疑問を持つ。
反対側にはキャロとエリオが同じように疑問を持つ。

「バリアジャケットは各分隊の隊長陣を元に行っているから、デジャブがあってもおかしくないよ。」

スバル達の疑問に気付いたのか、理由を説明するリリース。

「おっと。来たみたいだね。」

列車の天井を突き破って、楕円形のガジェットが十機ほどが出てくる。

「ストレイヤー……」

ファフニールがカートリッジを三発ロードして、魔力を高める。

「ヴォイド!!」

一瞬でガジェット達の背後に回り込み、魔力を纏ったファフニールで全て横一文字に切り裂く。

「リリスも凄い………」

「スバル。遅れないでね。」

リリスとスバルは列車の中でガジェットの殲滅戦を開始した。

一方、反対側にいるキャロとエリオは………

新型の大型ガジェットに苦戦していた。

「サンダーランス!!」

エリオが電気を纏い、後ろにいるキャロの強化魔法で強化した『サンダーランス』で大型ガジェットに防がれ、更にAMFでエリオの

魔法だけでなく、かなり離れた位置にいるキャラの魔法すらも無効化される。

「エリオ君!!」

「大丈夫!!」

一瞬の隙にストラーダをアームで掴まれ、身動きがとれない状態である。

しかし、魔法を使おうにも無効化され、フリードの炎でも倒す事が不可能なのだ。

(どうしよう……どうすれば……)

「うわあああ!!」

キャラがおろおろしている間にエリオはガジェットによって崖に放り投げられる。

そして、キャラもその後を追って崖に飛び出す。

それを見た機動六課のロングアーチは全員驚愕した。

「ちよつとあの子!!」

そんな中、前線に出ているのはだけは慌てず、冷静だった。

「いや、大丈夫!! A M Fは遠ざかれた効力は弱くなる。」

「そうか！」

なのはの言葉にロングアーチの全員が納得する。

「使えるよ！フルパフォーマンスの魔法が！」

（私は守りたい……私に笑い掛けてくれる人を……）

「守りたい！！」

気が付くとキャロは真っ白の世界に居た。

「此処は……」

―此処はあなたの精神世界。―

「！！誰ですか！？」

光が集まり、人形を形成していく。

―あんまり時間が無い。単刀直入に聞く。あなたは力が欲しいか？―

「えっ……」

―だが、変わりにお前は人としての体を失う。それでも力が欲しいか？―

「……………」

―さあ、選べ！！力を求めるか？それとも、今のままでいるか？―

「私は……力が欲しい！！」

―そうか……なら、受け取れ！！『運命の剣』の力を―

世界が揺れ始める。

―時間が……。じゃあな、キャロ！！頑張れよ！！―

人形は段々とぼやけて行く。

「待つて！？貴方は一体……」

―俺は初代の主。シン・アスカだ。―

瞬間、世界が音を立てて崩れた。

「っ！今の……………」

キャラが近くにいたエリオを掴んで、自分の本に近付ける。

「来て……………デステイニー！！」

キャラがそう叫んだ瞬間、遠く離れた天界で安置されている『運命の剣』が閃光を放ち、何処に転移した。

キャラの手に片刃の長剣が握られる。

瞬間、キャラとエリオを閃光が包み、閃光は列車の天井に移動する。

閃光の中から出てきたのは、気を失ったエリオとキャラと同じ髪の色をした女性だった。

背中には赤と黒のサキュバスの翼が生え、手には赤い片刃の長剣・ブリューナク。腰には折り畳み式の魔導砲・アロндаイト。

バリアジャケットは全体的に黒。朱のラインが入った黒いレオタードに白いズボンに同色の腰巻き。二の腕まで覆う黒いグローブに蒼い手甲を装着している。

「うつ……………！！誰！？」

気を失っていたエリオが目を覚ます。

女性は何も言わず、立ち上がり、天井を裂いて出てきた大型ガジェットに目を向ける。

「じつとしていて。すぐに終わるから。」

女性は無表情で言うとブリューナクを構える。

ガジェットのアームが迫って来るが、ブリューナクで切り裂かれる。

「はあっ！」

ガジェットとの間合いを一瞬で詰め、そのまま真つ二つに切り裂く。

エリオは驚きを隠せない。自分が倒せなかった大型ガジェットを突然、現れた女性が一撃で破壊したのだ。

列車のスピードが遅くなっていき、航空機型ガジェットを全滅させたのは達が降りてくる。

「覚醒したんだ。」

「はい。すみませんが、説明等はお任せします。少し疲れました…」

…」

女性はなのはに寄り掛かるように倒れ、そのまますやすやと眠ってしまった。

STS編 第4話 覚醒（後書き）

こんにちは、蒼妃です。

相変わらずスランプ気味なのに無理して書いたため、かなりの駄文になりました。

追記設定

キャロ・ル・ルシエ（幻想種状態）

種族：悪魔

（BJ）朱のラインが入った黒いレオタードと白いズボンに同色の腰巻き。二の腕まで覆う黒いグローブに蒼い手甲を装着している。また、翼は表が赤、裏が黒。

ブリューナク

『運命の剣』の片割れ。刀身は黒ずんだ赤。刀身が異常に長い片刃の剣。カートリッジは非搭載。

アロンダイト

『運命の剣』の片割れ。銃身は白と青。折り畳み式の魔導砲で威力は絶大。カートリッジは非搭載。

S T S 編 第5話 依頼（前書き）

更新するのが遅くなったうえにかなり短くてすいません！！

新しい作品にばかり時間が……… o r z

それではかなり短いですが、本編をどうぞ！

STS編 第5話 依頼

魔法少女リリカルなのは ー 聖騎士と黒騎士 ー

STS編 第5話 依頼

ファーストアラートから2日が経過した。

任務の終盤で気を失ったキャラは丸2日間眠っていた。

リネイヤが言うには、幻想種になった直後に幻想技『断空』を使った反動らしい。

幻想技『断空』

悪魔が使う幻想術で自分の武器に付加効果をつけて、戦う技を『幻想技』と言う。

『断空』は空間切断を発動させて、敵を空間ごと切り裂く技。一見最強に思えるが、消費マナが多く、マナの生成量が多くない悪魔にとっては1日に一発が限界。

目覚めたキャラは『幻想の騎士団』本部である『天界』に連れて来られた。

「えっと…はじめまして。“運命の剣”の主、キャロ・ル・ルシエです。」

若干怯えながらも自己紹介するキャロ。

「はじめまして。幻想の騎士団特攻隊長、『炎帝』のアリサ・バニングスよ。」

「幻想の騎士団技術顧問、『氷帝』月村　　すずかです。」

「幻想の騎士団FW、『雷帝』エステル・グレイセスだよ。」

「幻想の騎士団FW、『真祖の右腕』リリス・グレイセスよ。」

「幻想の騎士団総隊長補佐、『真祖の左腕』オリヴィエ・グレイセス。」

「知ってると思うけど、幻想の騎士団FW指揮官、『幻の大天使』ティアナ・L・グレイセス。」

「幻想の騎士団副隊長、『夜天の王』八神　　はやてや。」

「そして、私が幻想の騎士団総隊長、『灰色の福音』高町　　なのはだよ。」

幻想の騎士団全員との紹介が終わった後、キャロは力の制御する訓練のため、オリヴィエに連れて行かれた。

キャロとオリヴィエが退室した会議室ではメンバーが今後の計画について話し合っていた。

「？通信？」

なのはに通信が来た。
しかも、秘匿回線で。

「久しいな。灰色の福音と騎士団諸君。」

通信相手は共犯者であるジェイル・スカリエッティだった。

「どうしたんですか、ジェイルさん？」

「依頼だ。」

「依頼？」

「ああ。内容についてはデータファイルを送る。それを参照してくれ。」

データファイルが送られて、そのデータファイルを開くのは。

『ユニゾンデバイスの保護』

ホテルアグスタで行われるオークション開催日にあるユニゾンデバイスが違法取引に使われる。

ユニゾンデバイスは極めて稀少な『無』属性の属性特化型ユニゾンデバイス。

ファイルに書かれた内容にメンバーは絶句した。

「『無』属性の属性特化型ユニゾンデバイス……。」

「あんな稀少価値の高いユニゾンデバイスを何処で……」

『無属性の属性特化型ユニゾンデバイス』

属性特化型ユニゾンデバイスには火、水、風、氷、光、闇、雷、無の八種が存在するが、『無』は特に珍しく、ほとんど現存しないと言われていている。

また、『無』の属性を扱える騎士、もしくは魔導師も珍しい。現在のメンバーで扱えるのはキャラぐらいである。

リリースも使えるが、リリースの場合は他の属性を混ぜるので、完全な『無』の属性とは言えない。

「此方からも戦力を出すが、立場上不可能だろう。」

「ホテルアグスタなら、ちょうど護衛任務の依頼が来てたわ。」

「私が行くよ。」

ユニゾンデバイス回収依頼を引き受けたのは総隊長なのはだった。

なのは希少技能『空間遮断』^{レアスキル}は隠密任務には最適な能力である。
敵に気付かれる事なく、敵に近付き、任務を遂行する事が可能にする。

大概の隠密任務はなのはが引き受けているのである。

だから、総隊長自ら動く事に誰も反対しなかった。

「私はキャロとオリヴィエの様子を見てくるね。」

「私も行きます。」

なのはとリネイヤは会議室を退室して、キャロがオリヴィエと訓練している訓練室に向かった。

「話さなくて良かったの？」

リネイヤが問い掛ける。

「何が？」

「もう1つの依頼ですよ。」

ジェイルから頼まれた依頼には、ユニゾンデバイス回収ともう1つあった。

『冥府の炎王イクスヴェリアの保護』がジェイルから頼まれたもう1つの依頼だった。

イクスヴェリアには特殊な力がある。とても強力な力とは言えないが、かなり厄介な力である。

しかし、イクスヴェリアが眠っている場所は検討がつかない。

「まあ、気長に探すよ。」

そう言々と再び、2人は歩き出した。

『冥府の炎王』と『灰色の福音』が出会う時は迫っている。

S T S 編 第6話 ホテルアゲスタ（前書き）

久しぶりの更新です。

相変わらずの駄文です。

STS編 第6話 ホテルアグスタ

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士 〱

STS編 第6話 ホテルアグスタ

ファーストアラートからさらに数日が経過した。
機動六課のフォワードメンバーはある依頼を受けて、ヘリでホテルアグスタに向かっていた。

今回の依頼は、ホテルアグスタで開催されるオークションの警護である。

オークションには安全が確認されたロストロギアが出品される。それを“レリック”の反応を誤認したガジェットが来るかもしれない。機動六課に与えられた依頼はそんなガジェットの迎撃である。

そして、任務のために派遣されたメンバーは八神家一同、フォワードメンバー4人、八神部隊長、フェイト隊長である。

その内、シグナムとザフィーラ、ヴィータは先に現地に向かってい

る。

そして、場面はフォワードメンバー4人とシャル、フェイト、はやてが乗っているヘリの中。

「そう言えば、なのはさんは来られないんですか？」

スバルは向かい側に座るシャルに尋ねる。

「なのはちゃんは別件でね。来られないのよ。」

「そうですか……」

「あの……シャルさん。そのお荷物は……」

シャルの足元には大きめのカバンがどんと置かれていた。

「隊長さん達のお仕事着よっ」

舞台は変わって、ホテルアグスタ。

ホテルアグスタの内部には綺麗にドレスアップしたフェイトとはやてが内部警護を担当していた。

「ねえ、はやて。あの人は？」

フェイトの視線の先には黒い衣装に身を包み、黒いバイザーで顔を隠して、壁に凭れ掛かっている女性がいた。

「フリーランスの魔導師らしいわ。確か、名前は……………」

「フィーネ・ラインゴット。」

「おわ！ビックリした！」

フィーネと名乗った女性に突然、声を掛けられたはやては驚く。

「機動六課の隊長か……。私の名前はフィーネ・ラインゴット。フリーランスの魔導師だ。」

感情の無いような声で淡々と喋るフィーネ。

「せいぜい私の邪魔をしないでくれよ。」

そう言って、フィーネは立ち去った。

「いくら何でも冷たいと思うけど、なのは？」

曲がり角でフィーネに声を掛けたのは無限書庫司書長——ユーノ・ス

クライヤである。

「残念だけど、今の私はフィーネ・ラインゴットよ。」

「まあ、仕事熱心なのはいいけどね。だけど、同志に対してその冷たい態度はダメだと思うよ?」

フィーネ・ラインゴットと言うのは『高町　なのは』が表舞台に出る際に使う偽名である。

「今度から気をつけるよ。それよりもそろそろ時間じゃないの?」

フィーネは腕時計を見ながら、ユーノに忠告する。

「おっと。そうだった。じゃあ、僕は行くよ。またね、なのは。」

そう言って、ユーノは去って行った。

「……だから、私はフィーネだってば。」

なのはのため息交じりの呟きは誰にも聞こえなかった。

ユーノとなのはが遭遇した頃、ホテルアグスタの郊外の森に3人の人影があった。

「どこか？」

「そうです、ゼスト隊長。」

武人のような男性「ゼスト・グランガイツが薄い紫色の髪の毛をした女性」メガーヌ・アルビーノに問い掛ける。

「それにしても、フォワードメンバーを鍛えてくれって。ビックリしたわ。」

そう言うのは、スバルと似た髪の毛の女性「クイント・ナカジマ」。

彼らは『幻想の騎士団』総隊長である高町　なのはからフォワードメンバー4人を鍛えてほしいと言う依頼のため、ホテルアグスタに来ていた。

「油断するな。フォワードにはランスターの妹が居るのだぞ。」

「あゝ、オリヴィエのパートナーのティアナちゃんね。今はスバルのパートナーだけど。」

「それに騎士団新入りのキャラotte子。ルーテシアと同じ召喚師みたいね。」

ちなみに彼らには事前資料としてフォワードメンバー4人のプロフィールなどが与えられている。

そして、ポジションの関係から、ゼストはエリオを。

クイントはスバルを。
メガーヌはキャロを。

それぞれ鍛える事になった。

ティアナはそのままです十分強いので、鍛える必要はないとの事。

「では、行くか。」

「はい!!」

ガジェットが動き出したのを確認したゼスト隊の3人はそれぞれの鍛錬相手の元に向かった。

（そろそろね。）

外で警備をしていたティアナは時間を確認してそう思った。

『スバル。そろそろ敵が来るから気をつけてね。』

『へえっ、ティアー!!ちよっと……』

『じゃあね♪』

ティアナはスバルに一方的に告げると強制的に念話を切断した。

『ティアナちゃん!!そっちにガジェットが多数接近してるわ。』

スバルとの念話を切断した直後、周辺を警戒していたシャマルからの念話がかかってきた。

『了解しました。現在位置で迎撃します。』

『えっ、ティアナちゃん!!』

これまたスバルの時と同じように強制切断するティアナ。

（最近、全力を出してないから、久しぶりにうっさんばらしにちよ
うど良いわ。）

ティアナは自分の象徴である六枚三対の翼を広げると青く澄み渡る
大空に飛び上がった。

「ガジェットは………いたいた♪」

木々の間から見えるガジェットの姿を確認したティアナはバリアジ
ヤケットを纏い、クロスミラージュとアカツキを構え、先端に『マ
ナ』を収束していく。

するとアカツキとクロスミラージュに描かれている紋章が輝き始め、白い球体を形成の手助けする。

「光の力をもつて、不浄なものを祓わん。放て、浄化の光……エーテルストライク……!!」

白い球体は地面に当たった瞬間、破裂し、大地ごとガジェットが居る空間を抉り取った。

ティアナが放ったのは、光属性の紋章術最強奥義『エーテルストライク』である。効果は中心地から半径10mの空間を消滅させる『空間消滅』である。もっとも反動が大きく、乱発出来ないが……。

『エーテルストライク』が命中した地点には巨大なクレーターが出来上がった。

「さてと、他の3人はどうしてるのかな？」

《総隊長の手助けに行かなくて良いのですか？》

ティアナが左手に握っている銃剣―アカツキが話し掛ける。

「ん？行っただけで邪魔になるだけでしょ？」

《確かにそうかも知れませんが……》

「それに私はなのはさんほど気配の遮断は上手じゃないしね。」

《マスターの幻術と“アレ”を比べるのはどうかと思いますが……》

「そう言う事。」

《マスター。アカツキが言う“アレ”と言うのは？》

今度はクロスミラージュが問い掛ける。

「なのはさんの希少技能“空間遮断”。魔力を糧に、空間を遮断する能力よ。別名“空間切断”とも言っけどね。」

《聞いた事の無い能力ですね。》

「まあね。それよりもクロスミラージュ!」

《了解しました。サーチャをばら蒔きます。》

ティアナの足元に橙色のミッド式魔法陣が展開され、橙色のサーチャを形成し、フォワードメンバー3人の元に向かわす。

「さあ、見させてもらっわよ。」

ティアナの顔には子供ばい無邪気な表情が浮かんでいた。

S T S 編 第6話 ホテルアグスタ（後書き）

ホテルアグスタ編は長くなりそうなので、二つに分けます。

今度も更新は結構日が空くと思います。

S T S 編 第7話 襲撃という名の訓練（前書き）

久々の更新です！

STS編 第7話 襲撃という名の訓練

魔法少女リリカルなのは 〱 聖騎士と黒騎士

STS編 第7話 襲撃という名の訓練

ティアナがストレス解消にホテルアグスタに来たガジェットを殲滅したのとはほぼ同時刻。
ホテルアグスタ周辺三ヶ所でフォワード三名の戦闘が開始された。

〱 ホテルアグスタの西側〱

「はあああ!!」

黒いフード付き外套を羽織った女性に襲い掛かるスバル。

「!!!トライシールド!!!」

女性の目の前に三角形の盾が展開され、スバルの攻撃を防ぐかと思いきや…

「えっ？」

スバルの攻撃は女性をすり抜けるように通りすぎた。

「ほらほら。体勢を崩したら、すぐに立て直す!!」

体勢を崩したスバルをそのまま上から押さえつけ、スバルは抵抗できずに地面に拘束される。

「呆気ないわね。貴方の母親、クイントならこんなヘマはしなかったわよ？」

「!!母さんを知ってるの?!」

「知ってるわよ。なにせ……私が殺したんだからね」

ぷつんっ!

静寂の中、何かが切れたような音を女性は確かに聞いた。

「…………お前が…………お前が母さんを!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!」

魔力がいきなり上昇し、思わずスバルから離れる女性「クイント・ナカジマ。

「うわあああ！」

瞳を金色に輝かせ、突撃してくるスバル。
相棒であるマツハキヤリバーの声も聞こえないようだ。

「怒りに任せて、突撃するのは愚の骨頂よ。」

スバルの攻撃をヒラリツとかわして、スバルの首に手刀を入れる。
スバルはそのまま意識を失った。

「オリヴィエの足元にも及ばないやね。まあ、あの子と比べたら駄目か。」

「私のパートナーは規格外ですからね。」

空から降りてきたのは、大天使モードのティアナである。

「ティアナちゃん、久しぶりねえ♪」

「はい。数年ぶりでしょうか？」

「そうなるわね。そう言えば、貴方のパートナーは？」

「オリヴィエは隊舎で待機中です。」

「あら、残念。模擬戦しようと思ったのに。」

「止めてください。ここら一帯がクレーターになります。」

「クレーターを作ってるのは、オリヴィエよ?」

「直すのは私です。」

オリヴィエとクイントが模擬戦を行うとオリヴィエが大威力魔法を放つので、必ずクレーターが出来上がるのだ。

そして、出来たクレーターを元に戻すのはパートナーであるティアナの仕事だったりする。

クイントとティアナが雑談している頃、ホテルアグスタの東側ではエリオとこれまたフード付き外套を羽織った男性「ゼスト・グランガイツ」がしのぎを削っていた。

「やるな、少年。」

ゼストは笑みを浮かべて、オーバーSランク騎士に奮闘しているエリオを見た。

バリアジャケットは所々破け、素肌には切り傷が目立っていた。

「いいえ。僕はまだまだですよ。その証拠に貴方に一撃も届いてない。」

「ふつ。その心構え、まるで1人の騎士だな。少年!!名は何と言
う。」

「機動六課ライトニング分隊所属、エリオ・モンディアル!!」

エリオは自分の相棒―ストラーダを構え、高らかに名乗った。

「エリオか……良い名前だ。俺の名はゼスト。ゼスト・グランガイ
ツだ!」

ゼストはそう言うとフードを抜いた。

「エリオ。お前を1人の騎士と認め、全力を出してやろう。この一
撃に耐えきれたなら、俺は素直に退こう。」

そう言つて、ゼストは己の得物の矛先をエリオに向けた。

（使っしかない。反動は大きいけど、そんな事言つてられない!!
!!）

エリオは賭けに出た。

「行くぞ!!」

《フルドライブ スタート》

フルドライブを発動させたゼストが一気に突っ込んで来る。

（今だ!!）

「電の力よ、我に一時の力を与えん！！」

エリオの右手に蒼白い閃光を放つ球体が形成され、エリオはその球体を握り潰した。

「術式兵装……“蒼白の雷”！！」

とたんにエリオの全身が蒼白い閃光を纏い、ストラーダも蒼白い光っている。

『術式兵装』

エリオが握り潰したのは、ただの球体ではなく、雷属性の魔法を収束した球体である。

術式兵装は発動させた魔法をその身に纏い、さまざまな効果をもたらす技法である。

しかし、反動が酷く、使用者とデバイスの両方に危険が及ぶ。ちなみに、エリオが発動した“蒼白の雷”は一時的に己の体を雷と同じ状態にする効果がある。

刹那。

2人の影が交錯した瞬間、眩い閃光が放たれ、閃光が収まった地点には、倒れたエリオと平然としているゼストが居た。

「まさか…この俺に一撃を入れるとはな。お前の全力、しかと見させてもらった。」

ゼストの腹部には横一線の傷が出来ていた。

「また会おう。幼き雷光の騎士よ。」

ゼストはフードを被り直すと森の方へ歩いて行った。
エリオのバリアジャケットは黒く焼け焦げ、ストラードも所々が焼け焦げていた。

「やれやれ。暇潰しに来たら、予想外なものが見れたよ。」

上空に浮かぶのはエリオとそっくりな少女であった。

「まあ、頑張つてね。あと、これは餞別。」

エリオの近くに少女が不思議な鉱石を投げる。

「じゃあね。多分、いつか会える日が来るよ。我が弟。」

少女―エステルは穏やかな表情を浮かべると何処かに転移していった。

ちょうどエリオとゼストがしのぎを削っていた頃、ホテルアグスタ

の北側でも戦闘が行われていた。

「凄い……………」

キャロの訓練のためにやって来たメガーヌ・アルビーノは思わず呟いた。

メガーヌの視線の先には……………

メガーヌが召喚したガジェット50機を軽々と倒していくキャロ・ル・ルシエが居た。

キャロの姿は、何時もの幼女の姿から翼を生やした女性の姿に変貌していた。

近くにいるガジェットは愛刀『ブリューナク』で薙ぎ払い、届かない所にいるガジェットは『アロンドイト』で撃ち抜いて行く。

（勝ち目、無いかも……………）

（オリヴィエさんの訓練に比べたら、かなり楽！！）

オリヴィエの訓練の地獄を思い出して、泣きそうになるキャロ。

ちなみに、オリヴィエが施した訓練はガジェット百機に加え、大型が十機といった構成であった。

そして、此処に居るのは小型のガジェットのみである。

「ラスト！！！！」

最後の二機をブリューナクで真つ二つに切り裂いたキャロ。

「さあ、あとは貴方だけです！……あれ？居ない。」

メガーヌは既に逃亡していた。（笑）

結果、フォワード三名の内白星をおさめたのは、キャロだけだった。ちなみに、スバルとエリオはティアナとキャロが回収した。

ホテルアグスタの襲撃が行われている時、地下では取り引きが行われていた。

「約束の金だ。」

太った男性が細身の男性に大金の入ったアタッシユケースを渡す。

「確かに。ほら、約束の品だ。」

「くくく。これはこれは。」

細身の男性が差し出したのは、白銀の髪の毛の少女だった。
しかし、両手には手枷が付けられ、目には生気が宿って居ない。

「見つけたよ。」

「誰だ！」

暗い通路から出てきたのは、騎士甲冑を身に纏い、白い翼を広げた女性――高町　なのはだった。

「やっぱり……貴方たちだったんですね。」

「ちっ！またお前か。“灰色の福音”！！」

「いつもいつも、私達の邪魔をしょって！」

この2人はなのによって、取り引きを何度も潰されていたのだ。

「今回は逃がさない。」

するとみるみる内になのはの白い翼と騎士甲冑が黒く染まって行く。

そして、なのはは2人のいる方向に向け……

「なっなんだ！」

「消える！！私が消える！！」

2人の体は徐々に圧縮されたように小さくなって行き……

「空間ごと消滅しろ！ “デイメイション・ディストラクション” ！」

「「ぎゃあああ！！」」

断末魔の悲鳴をあげ、世界から消滅した。

『デイメイション・ディストラクション』

直訳すると“空間破壊”。なのはの希少技能“空間消滅”で、対象を空間ごと消滅（破壊）する魔法。

当然、非殺傷なんて生易しものではなく、なのはも滅多に使わない魔法である。

騎士甲冑を解除したなのは少女にゆっくりと近付く。

「ひっ！こっ来ないで…」

さんざん酷い目にあっただろう、瞳には怯えて、体も小刻みに震えている。

「大丈夫。私は君を助けに来たんだよ。」

怯える少女をなのは優しく抱き締める。

「君のロードに会わせてあげる。」

「ほ……んと……う？」

おどおどと尋ねる少女。

「本当だよ。だから、君の名前を覚えてくれる？」

「コーティカルテ……。」

「コーティカルテか……。可愛い名前だね♪」

なのはは少女―コーティカルテを抱き上げ、機動六課に向かった。

STS編 第7話 襲撃という名の訓練（後書き）

なのはのキャラが完全に崩壊している気がしなくてもないが、気にしない♪

最後に出てきたユニゾンデバイスの名前の由来は知る人ぞ知る人です！

今度の更新はまた日が開くと思いますが、更新をお楽しみに！！

S T S 編 第8話 主従（前書き）

後半の模擬戦はおまけです。

STS編 第8話 主従

魔法少女リリカルなのは ～ 聖騎士と黒騎士～

STS編 第8弾 主従

ホテルアグスタでの防衛任務から数日が経過した。

ホテルアグスタでの防衛任務に駆り出されたフォワード4人。

その4人には、『幻想の騎士団』総隊長である高町 なのはによって仕組まれた襲撃と言う名の訓練が与えられた。

結果、ストラーダはエリオの切り札の反動で破損。

記憶媒体は無傷だが、フレームは壱からの作り直しらしい。

キャロ、及びティアナについては問題無し。

クイントの挑発に易々と引つ掛かり、暴走したスバルはティアナの提案から、“恐怖”を植え付ける魔法を行使した。（行使者はティアナ。）

しかし、軽くするつもりがなんらかのミスで深刻な恐怖になってしまい、人を攻撃するのを躊躇うようになってしまった。

「なのはさん。私に会わせたい人って誰なんですか？」

ホテルアグスタでの防衛任務から数日が経過したある日。

キャラとなのはは次元戦闘艦『エクシア』の通路を歩いていた。

「会ってからの楽しみ♪」

キャラはなのはに『会わせたい人が居る。』という理由でこのエクシアに来ている。

「ところで、スバルさんとエリオ君は大丈夫なんですか？」

キャラの質問を聞いた途端、なのはは真剣な表情になる。

「エリオの方はデバイスさえ修理できれば、前線に復帰できる。けど、スバルの方が問題だね。結構深い部分まで“恐怖”が浸透しててね。」

「どうするんですか？」

「より強い恐怖を与えると解除できるから、今度ある模擬戦の時に壮絶な恐怖を与えるつもりだよ。」

ティアナ曰く、スバルに掛けた術は本来殺人狂に使うような魔法で、殺人を思い留まらせる物を改変し、限界以上の力を発揮させる物にした魔法だったが、何故か本来の効力が発揮されたとの事。

術を解除するには、より強い恐怖を与えるのが効果的との事。

「スバルさんが廃人にならない事を祈りますよ。」

それにしても、エステルさんも気になっていたんですね。」

「まあ、弟みたいな存在だしね。やっぱり気になるんでしょう。」

エステルはエリオの姉にあたる存在だが、本人は無視してるらしい。だけど、気になるらしく、エリオの切り札『術式兵装』のためにわざわざストラーダを強化するための『魔法鉱石　オリハルコン』を1人で採掘しに行ったのだ。

「だけど、なんでエリオ君が『術式兵装』を使えるんでしょう?」

『術式兵装』はエステルが使う固有魔法である。

相手、もしくは自分の魔法を掌握し、自分に上乗せするという物である。

「多分だけど……『共鳴』が関係してると思う。」

「『共鳴』……ですか。」

『共鳴』

クローン同士の間には稀に発生する現象。

お互いが持つている知識を共有する事ができる。

しかし、意識的に起こす事はよほど相性が良くないと不可能。

「エリオは“気が付いたら使えるようになってた。”って言うてたから、辻褄は合うよ。」

「『共鳴』なんて机上の空論だと思ってました。」

「私もだよ……着いたよ。」

なのはとキャラの目の前には扉があった。

「コーティカルテ。連れて来たよ。」

扉の先の部屋に居たのは、数日前ホテルアグスタにてなのはが助け出した『無』属性の属性特化型ユニゾンデバイスのコーティカルテだった。（ちなみに、アウトフレーム形態。）

なのはとキャラの存在に気付いたコーティカルテはキャラの下に駆け寄って来る。

「手を出して。」

同じ身長のコートィカルテに言われた通り右手を出すキャラ。

キャラの右手とコーティカルテの左手が触れた瞬間、白銀の閃光が発せられた。

「ようやく見つけた。私のマスター。」

コーティカルテは微笑んだ。

「私は『無』属性の属性特化型ユニゾンデバイスのコーティカルテ。」

マスターの名前は？」

「私はキャロ・ル・ルシエ。
呼び方は普通にキャロで良いよ。」

「わかった、キャロ。」

今度はお互いに微笑み合った。

「良かったね、コーティカルテ。」

その様子を部屋の隅で静かに見守っていたのはは静かに呟いた。

コーティカルテとキャロはお互いの事を話し合っていた。

コーティカルテに施された非人道的な実験の事を聞いてキャロは怒りを覚えたのは言うまでもない。

そして、キャロとコーティカルテはエステルとヴォルトと相対していた。

体慣らしのためにキャロとコーティカルテが模擬戦を申し込んだのだ。

そして、それを受けたのはエステルとヴォルトであった。

「手加減はしません。」

「それはこつちもです。」

訓練室で2人の少女―エステルとキャラ―はお互いに微笑み合った。
2人の傍らにはお互いの相棒であるユニゾンデバイス。

「ヴォルト!!」

「コーティカルテ!!」

「ユニゾン・イン!!」

2人のユニゾンデバイスは閃光となり、2人の体内に吸収される。
キャラは少女の体から女性の体に成長し、背中には悪魔の翼。ピンク色の髪は薄いピンク色になり、瞳は真紅に。

エステルはエリオと同じ赤色一色の髪が金髪混じりの赤毛になり、瞳は青色から満月のような金色に。

「サンダースパーク!!」

エステルが先に動く!!
レアスキル『雷舞』によって形成された雷の槍をキャラに向けて投擲する。

「虚空の彼方へ消え去れ……ゼロ・スラッシュ!!」

キャラはブリューナクで易々と消し去る。

「バスターライフル!!」

砲身をエステルに伸ばしたアロンドイトからお返して言わんばかりに閃光が離れる。

「遅い!!」

エステルは楽々と避けて、キャラに接近を仕掛ける。

そして、ブリューナクとガラドボルクがぶつかり合う。

『ゼロ・ブレイド!!』

キャラの付近にコーティカルテが形成した魔力剣が現れ、エステルに向かっていく。

『やってくれますね。障壁!!』

しかし、ヴォルトが展開した障壁によって全て防がれる。

模擬戦開始からどれくらいが経過しただろうか。

エステルとキャラはお互いに決定打を与えられず、戦局は拮抗していた。

離れれば、幻想術とアロンドイトによる遠距離攻撃の応酬。
近付けば、ブリューナクとガラドボルクによる接近戦。

そして、2人とも魔力、マナをかなり消費している。

そして、エステルは一端下がり、ガラドボルクのフルドライブを解放した。

『次の一撃で決めるみたいだね。』

『どうしますか？キャロ。』

『もちろん、迎え撃つー！』

キャロはブリューナクを両手で握り、魔力とマナを集めていく。

一方、エステルも弓状になったガラドボルクを構え、矢を形成する。

「ボルテックス・アローー！！」

「サテライト・ブレイバーー！！」

2人の最強威力を誇る魔法がぶつかり合う。

拮抗する魔法は、大爆発を巻き起こした。

爆煙が晴れると気を失ったエステルとキャロが壁にもたれ掛かるように倒れていた。

エステルとキャロの模擬戦は結局、引き分けに終わった。

ちなみに、2人は様子を見に来たアリサとすずかによって回収され

た。

STS編 第8話 主従（後書き）

久々の更新です。

といっても5日ほどなんですがね。

スバルに関してですが、かなり無茶な設定にしました。なのはさんと戦わずするために必要不可欠だったので………

では、次回の更新をお楽しみに♪

STS編 第9話 本当の恐怖

魔法少女リリカルなのは

（聖騎士と黒騎士）

STS編 第9話 本当の恐怖

ホテルアグスタでの任務から1週間が経過しようとしていたある日。機動六課の訓練場では、2人の女性が対峙していた。

空に浮かぶ白いバリアジャケットを纏った『幻想の騎士団』総隊長――高町 なのは。

かたや、フォワードメンバーの1人にして現在のティアナ相棒――バル・ナカジマ。

お互いにバリアジャケットを着た状態でにらみ合っていた。

そして、辺りが一望できるビルの上には残りのフォワードメンバーやライトニング分隊の隊長――フェイトと副隊長――シグナム。

さらには、ヴィータとオリヴィエの姿もあった。

「レイジングハート。」

《オーライ アクセルシューター》

なのはの周囲に十個程の桜色の球体が形成される。

「シューターっ!!」

なのはの号令で桜色の球体―アクセルシューターは一斉にスバルに向かって行く。

「くっ!」

スバルは動き回ったり、障壁を展開してすべてのアクセルシューターを防ぐ。

しかし、なのはは第二陣を既に放っていた。

しばらくの間、アクセルシューターで攻め立てられるスバル。反撃すれば、このシューターの雨は止むだろう。

しかし、スバルはひたすら回避と防御を繰り返すだけである。

「ねえ、スバル。どうして反撃してこないの?」

なのはが口を開いた瞬間、ピタリとシューターの雨が止む。

「それは……………」

スバルは答えない。

「自分の力が怖いのは、わかってるよ。でも、それは反撃しない理由にならないよね？」

何時ものような穏やかな口調ではなく、冷たい口調で言い放つのは。

「貴方に……貴方に何がわかるんですか!？」

スバルは声を荒げて言う。

「普通の人間の貴方に何がわかるんですか!？」

プチッ!!

静寂の中、何かが切れる音が聞こえる。

スバルの一言はなのはの逆鱗に触れてしまった。

「私が普通の人間………?」

私はね、人間なんてとつくに止めてるんだよ!!!」

いつもとはまったく違う怒気の含んだ口調で話すのは。

「何処が!?! 姿形はまったく人間じゃあないですか!!!」

「なら、見せてあげるよ!

本当の恐怖を!!」

私の真の姿を！！」

なのはがそう言った瞬間、レイジングハートは待機状態にもどる。そして、なのははあろう事か、オリヴィエに向けて投げた。

オリヴィエは綺麗な孤を描いて飛んで来たレイジングハートを掴む。

「ティア！！」

「わかってる！！」

なのはがやろうとしている事を理解したオリヴィエとティアナは完全隔離型の結界を張る。

完全隔離型の結界とは、魔力の反応を外部に漏れないようにして外部から入ったりできないようにする結界である。

「リミットリリース。擬態解除。」

なのはが閃光に包まれ、閃光が晴れると11歳ぐらいのなのはが立っていた。

『リミットリリース』で完全に抑制していた魔力が戻り、『擬態解除』で自身に掛けている変身魔法を解除する。
ゆえに、訓練場には膨大な魔力が渦巻いている。

なのははゆつくりと目を閉じて最後の封印を解除する。

―世界が闇に包まれし時、闇の福音は鳴り響く。―

それは封印を外す呪文。

なのはが呪文を紡いだ瞬間、黒い闇がなのはを覆う。

黒い闇から出てきたなのははまるでなのはではなかった。

背中には一対のコウモリの羽を広げ、髪は銀色に染まり、口元からはあり得ない程伸びた犬歯が見えている。

さらには、爪までも伸びている。

なのははゆつくりと目を開き、赤く染まった瞳でスバルを見詰める。とたんに、結界内をドス黒い殺気を満たす。

（な、何……………あれ……………？

本当に人間なの？

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
こ、殺される！！）

スバルはガクガクと小刻みに震え始めた。

それはビルの上から見詰めるメンバー（ティアナとオリヴィエ以外）も同じだった。

「あ、あれが本当になのはなのかよ？」

「この私が……恐怖するだと……。」

「怖い……。」

「怖いよ……エリオ君……。」

「ぼ、僕もだよ……。」

ヴィータ、シグナム、フェイト、キャロ、エリオが順番に感想を述べる。

「やっちゃった……。」

「母さん……いくらなんでもやり過ぎだよ。」

ティアナとオリヴィエは頭を抱えた。

「ティアナさんは大丈夫なんですか？」

震え上がりながらティアナに尋ねる。

「此れくらい馴れてるわよ。

最初に味わったからね。

それよりも良く見ておきなさい。『幻想の騎士団』総隊長の本気を。

」

「ほら、どうしたの?」

ゆっくりと近づいていくのは。

「あ……あ……デインバスター!!!!!!」

咄嗟に自慢の一撃を叩きこむ。

普通なら『非殺傷設定』なので、人体に傷を負わないはずが魔法が当たった瞬間、鮮血が飛び散った。

スバルは恐怖のあまり非殺傷設定を解除してしまった。

直撃だから生きていない。

そう思ったスバルだったが……

「酷いな。殺傷設定で攻撃するなんて。

私じゃなかったら、死んでたよ?」

爆煙の中から出てきたのは、何もなかったかのように歩み寄ってくるのである。

「穿て、影の牙。」

なのはの影がスバルの四肢に突き刺さる。

「ぐっ！！ぐああゝ！！！」

痛さのあまりに叫び声をあげるスバル。

「痛い？でもね、私はもつと痛かったんだよ？」

スバルは地面に倒れたままで顔だけを動かす。

地面はスバルの四肢から流れ出る鮮血で紅く染まっている。

「なんのつもり？」

歩みと止めるなのは。

スバルの前に立ち、なのはの前に立ちはだかる3人の人間。

スバルは見知った3人であることを確認すると安心するように倒れた。

「なのは…いくらなんでもやり過ぎだ！」

「グイータの言う通りだ。高町。お前は自分の教え子を手に掛けて良いと思ってるのか！？」

珍しく怒りを露にするシグナム。

「なのは……どうしちゃったの？」

悲しくそんな表情で見詰めるフェイト。

「邪魔しないでください。」

しかし、3人は返答せず、デバイスを構える。

「邪魔すると言うなら、手加減はしません。」

なのははより濃厚な殺気を放出して、3人に飛び掛かった。

3人は知らなかった。

『幻想の騎士団』のメンバーが恐れている事を。

『灰色の福音』の異名を持つなのはの『真祖の吸血鬼』としての実力を。

彼女たちは何一つ知らなかった。

STS編 第9話 本当の恐怖（後書き）

数日ぶりの投稿です。思ったより早く投稿できました。

乗りでなのはを暴走させて見ました。なんか、すいません。

では、また次回♪

STS編 第10話 吸血衝動

魔法少女リリカルなのは　　聖騎士と黒騎士

STS編 第10話 吸血衝動

機動六課の訓練場。

本来なら穏やかな訓練が行われる筈が、スバルの一言によって其処は殺し合いの戦場へと変貌した。

廃棄ビルが立ち並ぶ中、異質の空間が広がっていた。

本来の力を完全解放した『真祖の吸血鬼』の高町　なのは。

そのなののはに對峙するシグナムとヴィータ、フェイト。彼女らは騎士甲冑（もしくは、バリアジャケット）を纏い、己の相棒を構えている。そして、後ろには血まみれ？のスバル。

「なのは！！お願い、落ち着いて！！」

フェイトがなのはを説得しようとするが、なのはは何も喋らない。

「無駄だ、テストロッサ。今の高町に言葉は通用しない。」

「そうだぞ。」

冷たく言い放つシグナムとヴィータ。

「来るぞ!!」

「!!」

なのはは跳躍した状態からシグナムに向けて、パンチを繰り出すが、回避され、なのはが殴った地点にはクレーターができあがる。

「なんつつ馬鹿力だよ!!」

「なのはってあんなに力が強かったけ?!」

フェイトの疑問は本来の姿を知らない者なら、誰だって抱く同じ疑問である。

吸血鬼は元来、脅威的な身体能力を誇る。その上位種である真祖なら、更に上の身体能力を誇る。

「レヴァンティン!!」

《エクスプローズィオン!!》

「紫電一閃!!」

レヴァンティンが炎を纏い、なのはに斬りかかる。

「なにつ！」

シグナムの十八番である『紫電一閃』を受け止めたのは、障壁ではなく、なのはの異様に伸びた爪である。
これにはシグナムも驚いた。

しかし、動きを止めたのが仇になってしまった。

「がはっ！」

なのはの強靱な脚力を力一杯、叩き込まれ、後ろに蹴り飛ばされる。

「よくもシグナムをー！」

上空からグラーファイゼンを振り上げたヴィータが飛来するが……

「隙が多すぎ。」

「ぐっ！！！」

ヴィータもシグナムと同じように殴り飛ばされる。

（まずいな……あまり持たないかも……）

なのはは何かに耐えるように心の中で呟いた。

そして、若干だが警戒を緩めてしまった。

なのははバインドによって四肢を拘束される。

「しまっ！」

「トライデントスマッシュー！！」

「ギガントシュラークー！！」

「駆けよ、隼！！」

バインドで拘束され、障壁も張れないのはに三方向からの攻撃が直撃する。

土煙が舞い上がり、なのはの姿は確認できない。

「よくやったな、テストロッサ。」

「ええ。何故か、簡単にバインドに拘束されたから。」

バインドで拘束したのは、ビルの影に隠れていたフェイトであった。

「あゝ、痛かった。」

吹っ飛ばされた2人はたいした傷を負わず、その場に戻ってきた。

3人は安心しきっていた。

故に、気付かなかった。なのはの殺気が完全に消えていない事に。

―クスクス―

「「「!!!!!!」」」

なのはが居た場所を見詰める3人。

突風が土煙を掻き消す。

なのはは無傷である。

そして、瞳孔は獣のように縦に開いていた。

「美味しそうな血の匂いがするよ」

顔に笑みを浮かべるなのは。

しかし、その笑みは3人を震え上がらせた。

「貴方たちの血、貰うよ」

それを見たティアナとオリヴィエは慌て出した。

「ティアー!!どうする!?!」

「どうするって言われても……」

「あの……どうかしたんですか?」

慌てる2人に声を掛けるエリオ。

「私たちが恐れてた最悪の事態になったわ。」

「「えっ？」」

ティアナの言葉に2人は固まる。

最強と言っても過言ではない『幻想の騎士団』のメンバーが恐怖する事が信じられないのだ。

「ぐっ……………」

空中に拘束されるフェイト。

脱出しようにも彼女を拘束しているのは、なのはの影である。

（一体……………何が……………）

なのはが動いたと思ったら、一瞬でシグナムとヴィータの2人は倒され、フェイトは拘束された。

「ねえ、フエイトちゃん。私ね、今凄く喉が渴いてるんだ……。」

なのはがフェイトと視線を合わせるように浮かび上がってくる。

「だから……貴方の血、貰うよ。」

首筋に伸びた犬歯を当てて、血を飲むのは。

「ぐっ……な、なのは……」

しかし、**なのは吸血を止めない。**

その時……

—フリジツトダガー—

氷の刃がなのはに当たり、なのはは首筋から牙を離す。

—シャイニングフレイム—

太陽のように眩い光がフェイトの背後から放たれ、光のせいで影は消滅し、フェイトは拘束から開放される。

「こら、なのは！！吸血衝動に吞まれてるんじゃないわよ！」

「アリサちゃん、それは仕方ないと思うよ？」

「アリサ!!! すすか!!!」

フェイトを助けたのは、親友のアリサとすずかだった。

「助けに来るのが遅れてごめんね、フェイトちゃん。」

いつもと変わらない口調で話し掛けるすずか。

「フェイト、あんたは下がってなさい。危ないから。」

「でも、アリサとすずかが……………」

「すんなり下がるとき。」

「はやて!!」

次に現れたのは、八神 はやてである。

「……………吸血衝動に吞まれたか……………何年ぶりや？」

「四年…いや、五年ぶり。」

「そか……………まあ、それだけ時が開いたらしゃーないか……………」

吸血鬼と違って血を必要としない真祖だが、一年間に何度か血を欲するようになる期間がある。

なのはは真祖の力を封印する事で『吸血衝動』を抑えているが、その衝動は時を重ねる程強くなり、逃れなくなる。

なのはが吸血衝動に襲われたのは今から五年前。

普通の真祖なら、一瞬で衝動に吞まれるが、なのはは持ち前の不屈

の心で耐えていた。

しかし、さっきの一斉攻撃でその枷が外れてしまったのだ。なら、血を飲ませば良いではないか？、と思うが、暴走状態だと歯止めが利かなくなる。故にかなり危険なのだ。

「しかも、フエイトの血を飲んでたわ。」

「うわゝ、ホンマかいな。」

アリサの言葉にげんなりするはやて。

「気を付けないとね。」

さすががそのように言う理由は吸血鬼の特性にある。

ただでさえ、幻想種の最強種と言われる『真祖の吸血鬼』が血を吸う事で強化されているのだ。

嘗めてかかると痛い目に会うのは目に見えている。

「話し合いは終わった？

じゃあ、私の獲物を返して欲しいんだけど？」

「わざわざ待つてくれたのは、感謝するわ。

だけど…友達を売るわけには行かないわ！」

「そう……じゃあ、力ずくで返して貰うよ！！」

地面を力一杯、蹴り、アリサたちとの距離を詰めるのは。

「イフリート。」

『おう！！』

アリサが相棒の名を呟くとアリサの金髪が炎のような赤色に変わり、瞳も灼眼に変わる。

「悪いけど、あんたの厄介な爪は封じさせて貰うわ。」

フランベルジュを炎が覆い、なのはの爪を溶かしながら切断する。

「ぐっ！」

なのはは呻き声を上げて、アリサから距離を開ける。
そして、直ぐ様爪を再生させる。

「超高速再生……………やっぱり、強化されてるみたいだね。」

「これでは波状攻撃も意味がありません。」

すずかとセルシウスが意見を述べる。

「オリヴィエ、エリオ、キャロ！！

フェイトちゃんとスバルを回収して！！」

はやては傍観？している3人に声を掛ける。

ちなみに、ティアナは完全遮断型の結界の維持で精一杯である。

「なんで私が……………」

「まあまあ。クイントさんの子供なんだから助けてあげなさいよ。」

人間嫌いのため、救助を渋るオリヴィエとそんなオリヴィエを説得するティアナ。

ちなみに、エリオとキャラロはフェイトを救助した。

「仕方ない。」

それでも渋々、スバルを救助するオリヴィエ。

「さてと私も参加しよか。」

《そうですね。》

はやてが腕に嵌めているブレスレット―ニブルヘイムが答える。

「飛翔せよ、ニブルヘイム!!」

《了解!!》

幼い頃からまったく変わらない騎士甲冑を纏うはやて。

そして、腰には愛刀ニブルヘイム。

「リインフォース!!」

はやてが叫ぶと“闇氷の魔導書”が出現し、リインフォース・アインが出てくる。

「ユニゾンしますか？」

「うん。切り札を使うかもしれん。」

「切り札を……ですか？
穏やかではありませんね。」

「フエイトちゃんの血を吸ってしまったからな。」

“切り札”ははやてにかなりの負担をかけてしまう。
それを使わないといけないかもしれない程、今のなのはは強敵なのだ。

「行くで、リインフォース。」

「はい。」

「「ユニゾン・イン！！！！」」

リインフォースが光の球体となつてはやての中に入るとはやての髪の毛は薄くなり、瞳の色も薄い青色に変わる。

はやては背中のスレイプニールを羽ばたかせ、3人の戦闘地点に向けて羽ばたいた。

S T S 編 第10話 吸血衝動（後書き）

一気に書き上げようとしたらこの様です。

なのはさん、暴走第2段階。あと、一話程この話が続きます。

では、また次回に～

STS編 第11話 黒い聖剣

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士

STS編 第11話 黒き聖剣

訓練するスペースから殺し合いの戦場に変貌した機動六課の訓練スペース。

吸血衝動に吞まれ、狂人^{バーサーカー}と化した最強の幻想種―真祖の吸血鬼、高町なのは。

それをなんとか止めようとする3人の仲間―アリサ、すずか、はやて。

しかし、戦闘を開始して五分後。

3人の顔には絶望の表情が浮かんでいた。

「ほんまに強いな。」

ニブルヘイムを構えながら呟くはやて。

騎士甲冑はぼろぼろで傷から血が流れている。

「切っても切っても直ぐに再生。本当に化け物ね。

此方はぼろぼろなのに向こうは変化無し。」

「はやてちゃんの血を少しでも吸収して更に強化してるからね。」

アリサとすずかの2人は傷は負ってないもののかなり疲労しているようだ。

なのはの攻撃が当たる寸前で体の一部を炎や氷に変えて回避してきたのだ。

しかし、はやてにそんな事はできず、幾度となく爪で切り裂かれた。なのはは爪に着いた血を舐めて吸収している。最初よりも強化されているのだ。

「リインフォース。騎士甲冑、再構成。」

『はい、我が主。』

ぼろぼろだった騎士甲冑が破棄されて、新品の騎士甲冑を構成する。

「もう、しつこいな。」

さっさと…倒れてよ!。」

なのはの影が狼を形作り、3人に襲い掛かる。

なのはの変影術・影狼である。

「またこれか！いい加減、飽きたわ！！」

ぼやきながら影狼を切り裂くはやて。

「私たちの疲労を狙ってんじゃないでしょうね！」

「それは勘弁して欲しいかも！！」

はやてと同じように影狼を切り裂くアリサとすずか。

影狼自身はあまり戦闘能力は高くないので、難なく倒せる。

「むゝ。これはもう効かないの。」

少し本気を出すの！！」

なのはの右手に黒い剣が召喚される。

「！！まずい！！」

アリサが叫んだ。

なのはが召喚した剣は宝具エクスカリバーである。

しかし、神々しいエクスカリバーは黒く染まっている。

エクスカリバーはなのはの宝具の中でも最大の威力を誇る聖剣であ

る。しかも、黒く染まった『ダーク・エクスカリバー』は通常よりも数段階高い威力を出せる。

「闇の染まりし漆黒の聖剣!!」

ダーク・エクスカリバーの真名が解放された。

黒い閃光の奔流は一直線にはやてたちに向かって来る。

はやてたちは目を瞑った。

しかし、いつまでも大威力の攻撃が来ない。

恐る恐る目を開ける3人。

3人の目の前にはなのはの最強の一撃を楽々と防ぐオリヴィエ・グレイセスの姿があつた。

「うそ……私の最強の一撃を防いだ？」

なのはは自分が見える最大で最強の威力を誇る一撃を楽々と防がれた事に驚く。

「オリヴィエ……どうやって今の一撃を……」

アリサが質問する。

「これのおかげです。」

振り返ったオリヴィエは金色の大きな鞘を抱えていた。

「『アヴァロン！』」

『どうして貴女がそれを？』

「母さんが私にくれたの。」

オリヴィエは微笑みながら答える。

『アヴァロン』

なのはが持つ宝具―エクスカリバーの鞘にして、最強の盾。

真名の開放すると半径五メートルの異空間を形成し、外界から攻撃・干渉を受けない。さらに、身体に取り込む事で吸血鬼には及ばないが、高速再生を行う事ができる幻の宝具。

形成された異空間には傷や疲労、魔力を回復される効果もある。

そのため、『全て遠き理想郷』とも呼ばれている。

本来ならなのはが持っている宝具なのだが、なのははオリヴィエとリスに自分の宝具を一つ以上与えているのだ。

オリヴィエには『全て遠き理想郷』^{アヴァロン}を。

リスには強力な盾『熾天覆う七枚の花弁』^{ロー・アイアス}と『全てを防ぐ神の胸甲』^{ジス}を。

なのは2人が傷付かないようにという願いで2人に渡したのだ。

「しばらくは大丈夫でしょう。

此処でゆつくりと魔力を回復させてください。」

「でも、それやとフェイトちゃんらが!!」

「大丈夫です。頼もしい助っ人が来てくれましたから。」

外を見るとなのはがバインドで拘束されていた。

「いくらなんでも、お痛が過ぎると思いませんか、なのはさん？」

空から降りてきたのは、竜の翼を生やし、ファフニールを構えたりリスであった。

「リス。あと五分だけ耐えて。」

「五分ぐらいお安いごようですよ!!」

リスは翼を羽ばたかせてなのはに向かった。

ちょうどなのはもバインドを解除したようだ。

「ブレードリアクター!!」

リスの十八番、ブレードリアクターを放ち、先制するリス。

しかし、なのはは障壁を張りもせず『ブレードリアクター』を握る。

「うそーっ！そんな事できるの！」

「隙だらけなの。」

ドラゴン・スレイブ！！」

ブレードリアクターを左手で掴んだまま、『ダーク・エクスカリバー』を納めた右手から竜を形どった砲撃がリリスに襲い掛かる。

ファフニールを固定されているため、回避する事ができないリリス。しかし、リリスは冷静だった。

「『^{イジス}全てを防ぐ神の胸甲』！！」

迷いなく自分に埋め込まれた宝具の一つの真名を開放する。すると、なのはの攻撃はリリスに直撃する前に雲散する。

『イジス』の効果はダメージの完全無効化。当たる前に砲撃が完全に雲散し、直接攻撃もダメージにならない最強の防具である。

「アルケミックチェーン！！」

なのはの足下から鎖が出現し、なのはを動けないように縛る。

『ナイスアシストだよ、キャロ！！』

『上手く行ってよかったです。』

キャラが召喚したアルケミックチェーンを破壊しようとするが、なかなか壊れない。

ようやくアルケミックチェーンが壊れてリリースに襲いかかるうとした時、

「ダークブリザード!!」

闇の吹雪が真横から襲いかかり、なのはは吹っ飛ばされる。

『ダークブリザード』

闇属性の魔法と氷属性の魔法の合成魔法ではやとリインフォースの最強魔法。

威力はスターライトブレイカー以上で、チャージタイムも短く使いやすい。

「バーンフェニックス!!」

「アイシクルドラゴン!!」

続けるように炎の不死鳥と氷の竜がなのはに襲い掛かった。

『バーンフェニックス』

アリサのレアスキル『炎舞』を使って炎の不死鳥を形成・発射する

魔法。

炎の温度は何千度もあり、普通の人間が受けたら、必ず死に至る。

『アイシクルドラゴン』

すずかのレアスキル『氷舞』使って氷のドラゴンを形成・発射する魔法。

触れたら絶対零度の状態まで温度が下がる危険極まりない魔法である。

「うわゝ、容赦ない。」

アヴァロンを解除したオリヴィエが手加減一切無しの魔法を見て呟いた。

（あの2人は絶対に怒らせないようにしよう。）

オリヴィエは1人、そう心の中で固く決意した。

S T S 編 第12話 終結（前書き）

後半に残酷な描写を含みます。注意してください。

STS編 第12話 終結

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士

STS編 第12話 終結

オリヴィエとリリスの姉妹コンビネーションで危機を脱した。そして、一瞬の隙を突いて3人の最強魔法を叩き込む事ができた。そして、そんな攻撃を叩き込まれたなのはは訓練スペースの廃ビルに叩き付けられた。

そして、なのはは叩き付けられた廃ビルの麓に倒れ伏していた。

「うわゝ…凄い再生能力。もう完治仕掛かっているよ。」

火傷や凍傷はかなり酷い状態だったが、すでに完治仕掛かっている。恐るべき真祖の吸血鬼の生命力と血を飲み事で強化された超高速再生能力である。

「気分はどう?。」

アリサが倒れ伏しているなのはに尋ねる。

「……………最悪なの…………。」

アリサちゃんとすずかちゃんの攻撃のせいで神経までズタズタだよ。

「

「フェイトとはやての血のおかげで再生能力も強化されてるから、すぐに再生するでしょ?。」

「まあね。」

なのははゆつくりと起き上がる。

「さっさと封印を施しなさい!。」

「わかってるよ。」

なのはは目を閉じ、吸血鬼の力を再び封印しようとする。

「……………あれ?うそ…………。」

「どないしたんや?。」

「封印ができない…………。」

『え、え——っ!』

なのはの発言にその場の全員が大声をあげて驚く。

「ちょっとどういう事!？」

「多分……血を吸った事で抑制が効かないぐらい力が巨大化したみたい。」

「確かに結構吸血してたもんね。」

思い出すように呟くすずか。

「大丈夫ですか、なのはさん？」

上空からティアナが降りて来る。

その表情には疲労の色が浮かんでいる。

「ティアナ!!……御免ね。迷惑を掛けて………」

ティアナは今まで管理局からなのはの存在を隠すための結界を張っていたのだ。

「いえ、これくらい大丈夫です。」

あと、はやてさん。シグナム副隊長とヴィータ副隊長、フェイト隊長、スバルはシャル先生の所に連れて行きました。」

「ん。ご苦労様や、ティアナ。
なのはちゃんもしばらく休み。」

「その必要はない。」

後ろから声を掛けられる。

「！！サブリーナ中尉！！」

その正体は機動六課を目の敵にしている時空管理局地上本部に所属しているサブリーナ中尉だった。

「八神 はやて。その化け物は今此処で滅するのだ。」

「！！そんな！！」

「その後は君たちだ。犯罪者の君は所詮は管理局の汚点だ。まったくこんな奴はさっさと始末してしまえばいいものを。」

サブリーナ中尉の言葉になのはは切れた。

「黙って聞いて居れば……勝手な事ばかり言つて。」

再び濃厚な殺気が訓練スペースを包んで行く。

「ふん！化け物が何を言っている！まったくあの出来損ないのクローンといい「黙れ！！」何？」

なのはが声を荒げる。

「私を何て言おうと気にしない。だけど……私の仲間を侮辱する事は絶対に許さない！！」

「私を倒しても何の意味も無い。私が報告すれば、管理局は全戦力

を持つて潰しに来るのだからな！！
さあ、あの化け物を殺せ！！」

すると何十人という魔導師が何処からともなく出現する。

「御免ね、はやてちゃん。約束、破るね。」

「待ってや、なのはちゃん！！」

止めるはやてを無視してなのはは翼を羽ばたかせて魔導師の軍勢に向かって行く。

はやてとの約束。

それは人殺しを絶対にしない事。

つまり、なのはは魔導師全員を皆殺しするつもりなのだ。

ザシュッ！

刹那の瞬間、最前列にいた1人の魔導師はなのはの腕に心臓を貫かれた。

「御免ね。こうするしかないんだ。」

次の瞬間、周囲に居た魔導師は影の刃に貫かれて絶命する。

「ば、化け物……」

「た、助けてくれ！まだ死にたくないんだ！！」

「お、お願いだ！」

魔導師はなのはに命乞いをするが、なのはは感情を削ぎ落としたように魔導師を次々に殺して行く。

魔導師たちは抵抗するが、普通の人間が最強の幻想種に敵う訳がなく殺されて行く。

それはまるで地獄絵図である。

数分もすると何十人も居た魔導師は誰１人として物言わぬ屍となっていた。

「く、来るな！！」

なのはの綺麗な銀髪は血に染まり、全身が魔導師たちの返り血で血塗れになっている。

「貴様は人を殺して何とも思わないのか！」

「そんな感情も…最初はあったよ。だけど、幾度となく命を狙われている内に薄れって行ったよ。」

数年前、吸血鬼状態のなのは何処からか漏れた情報によって指名手配された。

そして、討伐の報酬金目当てになのはは頻繁に命を狙われた。最初は殺してなかったが、段々とエスカレートしていき、そんな事を考えてる余裕もなくなっていた。

「『紅の鮮血姫』が！」

「……どうして貴女がその名前を……！」

『紅の鮮血姫』

それは指名手配された時のあだ名である。指名手配した人物がなのはを地獄のような日々に突き落としたと言ってもいい。

「当たり前だ！私が指名手配したんだからな！」

「何で！？私は普通に生きてただけなのに……！」

「お前のような化け物が生きてて良い筈がな……！」

しかし、サブリーナ中尉は最後まで言葉を言い切る事ができなかった。サブリーナは背後から二本の剣で刺されていた。

「お前に母さんを化け物と呼んでいい資格は無い……！」

「なのはさんは地獄のような研究所から私を助け出してくれた！」

サブリーナ中尉を刺し殺したのは、オリヴィエとリリスだった。

「人の命を簡単に正義のためと言う理由でないがしろにするあな

「たたち管理局の方がずっと化け物だ！！！！」

そう言い放つと2人は同時に剣を引っこ抜いた。支えを失ったサブリーナは地面に堕ちて行った。

「母さん。周りの人が母さんを化け物って言っても母さんは私の母さんだから！」

「そうだよ！あんな奴の言葉なんか気にしないで！！」

2人は必死になのはを励まそうとする。

そんな2人をなのはは優しく抱き締めた。

「ありがとう……オリヴィエ、リリース。」

なのはは静かに涙を流した。

そんな三人を白銀の光が包み込み、次の瞬間には三人の姿は消えていた。

「よろしかったのですか？」

ユニゾンを解除して現界したリインフォースは主に問い掛ける。

「うん。ちょっと心の整理が必要やろうし、最近のなのはちゃんは気を張りすぎやからな。」

オリヴィエ、リリス、なのはを強制的に何処かへ転移させたのははやてだった。

「へえ、はやてにしては良いことするじゃない。」

「一言余計やで、アリサちゃん。」

その場に居た5人は笑い合った。

「ほな、全員で後片付けしよか？」

「はいはい。私は死体进行处理してくるわ。」

「私はちびっこ2人の記憶を操作しておきます。」

「私は三提督とクロノ君に報告しとくわ。」

「じゃあ、私はフェイトちゃんの記憶操作だね。」

「私は騎士たちの様子を見てきます。」

5人は自分をやるべき事を行うため、四方八方に散った。

STS編 第12話 終結（後書き）

一気に書き上げました。

なので、矛盾があるかもしれませんが、無視してくれば幸いです。

さて、なのは暴走編（笑）は今回で終了です。

次回の更新をお楽しみに♪

S T S 編 第14話 その頃の機動六課（前書き）

相変わらずスランプ気味です。

STS編 第14話 その頃の機動六課

魔法少女リリカルなのは

／ 聖騎士と黒騎士

STS編 第14話 その頃の機動六課

オリビエ、リリス、なのはの3人が一時の休息を楽しんでいた時、六課滞在の騎士団員は総隊長であるのはが起こした事故処理に追われていた。

そして、事故処理を行っていたアリサ・すずか・はやて・ティアナの4人は機動六課の隠し部屋でお互いに報告を行っていた。

「死体は全部業火の炎で焼却したわ。」

「ちびっこ2人の記憶操作も無事に完了しました。記憶は“悪夢を見た。”という風に改竄しました。」

「フェイトちゃんは“体調を崩して訓練には参加してない。”っていう風に改竄したよ。」

「此方もクロノ君と三提督に報告したわ〜。
とりあえず、現状維持やて。」

アリサ、ティアナ、すずか、はやてが順番に報告する。

シグナム・ヴィータの2人は打ち所が悪かったらしく、まだ意識が戻っていない。今は、リインフォース姉妹とザフィーラ、シャマルが付いている。

「教導の方は……アリサちゃんとすずかちゃんも手伝ってくれへんか？」

「いいわよ。」

但し、大部分は娘に任せる。私とすずかはあくまで補助。」

「それでええよ。」

「じゃあ、これで解散ね。」

すずかの言葉に3人は頷くと4人はそれぞれ転移していった。

「デバイス整備室」

六課のロングアーチ兼デバイスマスターのシャリオ・フィニーノはモニター画面とにらめっこしていた。

カプセルに入れられているのは、透明なオレンジ色の鉱石――オリハルコンである。

「うーん……何なんだろう、この鉱石……。デバイスのフレームに使えそうんだけど……」

シャリオがあれこれ考えていると整備室の扉が開き、蒼髪の女性――リネイヤが入って来る。

「シャーリー？どうしたんだ？」

「リネイヤさん……。実は、ストラダの修復にこの鉱石を使おうと思ったんですけど、加工法がわからないんです。」

「どれどれ……。オリハルコンじゃないか。どうしてこれが此处に？」

「リネイヤさん、知ってるんですか？！」

この鉱石はエリオの近くに置いてあったんです。」

「（エステルだな。）この鉱石はオリハルコン。強度がとても高く、加工できるのは一部の人間だけだ。」

『オリハルコン』

別名 魔法強化鉱石と呼ばれる不思議な鉱石。

ある次元世界でしか採掘できず、加工も一部の人間しかできないという代物。しかし、強度は折り紙付きで滅多な事で壊れない。さらに魔法の威力を強化する効果もあり、夢のような鉱石である。

しかし、採掘場は幻想の騎士団のメンバーでも危険なため、滅多に採掘に行かないのだ。

「到着♪ あれ、リネイヤさん？」

転移魔法を使って整備室に現れたのは、報告を終えた月村 すすかだった。

「すすか…ちょうど良い所に来た。実は、オリハルコンを加工して欲しいんだ。」

「いいですよ。エステルから頼まれてましたから。」

「すまない。シャーリー、手伝ってくれるか？」

「もちろんです♪」

3人はストラダの修復作業を開始した。

「医務室」

「シャル、リインフォース。」

怪我人2人を寝かしている医務室に転移魔法で侵入する八神 はやて。

「はやてちゃん!？」

「主はやて。会議は終了したのですか？」

「うん。ちゃんと終わらせて来たよ。」

はやてはベッドの上で眠るヴィータとシグナムに目を向けた。
2人はまだ意識が戻っていない。

「……………なのはちゃんの攻撃を受けて脳震盪で済んだのは幸いやな
」。」

「烈火の将は咄嗟に鞘でガードしたようです。
代わりにレヴァンティの鞘に罅が入りましたが……………」

「ヴィータは直撃。」

まあ、無事やってんから幸いや。」

はやてはヴィータにゆつくりと近付き、髪の毛を優しく撫でた。

「ごめんな。私が気付くのが遅かったから……」

「別にはやてのせいじゃねえよ。」

シャマルとリインフォースは返ってくる筈のない返事が返って来た事に驚いた。

「……………やっぱり起きとったんやね。」

「鉄槌の騎士はそんなにやわじゃねえよ。」

ヴィータはしっかりと目を開けた。

「さよか。」

「でも、何ではやてはわかったんだ？」

「女の勘や」

はやてはニコニコと微笑みながら言った。

「まあ、はやてだしな。

それよりも、なのはは？」

「親子共々休暇中や」

はやての回答にヴィータは啞然とした。

「は？ あいつ、子供いたかよ？」

「正確には、親子のように仲がいい仲間とやな。」

「ふうん。そう言えば、ザフィーラとリインは？」

この部屋にはヴィータとシグナムのお見舞いに来ていた筈のザフィーラとリインが居ない。

ちなみに、リインはツヴァイの事を指す。

「リインちゃんが寝ちゃったから部屋に連れて行っただわ。」

ヴィータの疑問に答えたのはシャルだった。

「そっか……なあ、はやて。なのはあの姿って……」

ヴィータの言葉を聞いたはやての表情は何時もの笑顔から険しい物に変わった。

「あれは……なのはちゃんから直接聞き。私の口から言う事はできへん。」

医務室には重苦しい空気が立ち込めた。

場所は変わって、機動六課隊舎の食堂。

その一角にフォワードメンバー4人とキャロのユニゾンデバイスのコーティカルテの姿があった。

そのテーブルを中心とした認識阻害魔法と遮音結界が5人の周囲に展開されていた。

「スバル。恐怖は消えた？」

「うん！ バッチリだよ！」

「そう。」

「あの…ティアナさん。なのはさんの事を……」

エリオは本題を切り出した。エリオ、キャロ、スバルが集まっているのはあの一件のなのはの姿について聞くためである。

コーティカルテはロードであるキャロに付き添っているだけである。

「……………本来なら、私が話しても良いような事柄じゃあないんだけどね。」

あんた達は吸血鬼って聞いた事がある？」

ティアナの言葉に3人は頷いた。

「簡単に言えば、なのはさんはその吸血鬼の上位種、真祖の吸血鬼

よ。」

3人は意味がわからないという感じで頭に疑問符を浮かべていたが、さつきまで無関心だったコーティカルテは反応した。

「真祖の吸血鬼！！まだ存在していたのですか！？」

「コーティ、知ってるの？」

『真祖の吸血鬼』という単語に食いついて来たコーティカルテにキヤロが訊ねる。

ちなみに、コーティとはコーティカルテの愛称。

「知っています。真祖の吸血鬼は太古の昔に絶滅した種族です。」

かつて古代ベルカの時代の裏舞台で名を轟かせた真祖の吸血鬼。呼び名は様々で『幻想の王』、『超越者』、『世界の理から外れし者』、『闇の福音』などが一般的である。しかし、強大すぎる力のせいで一部の人間から疎まれていた真祖の吸血鬼達はその姿を次元世界から消した。

「私が知ってる歴史はこんな感じです。」

「リネイヤさんも同じ事を言ってたわ。兎に角、詳しくは私も知らないし、知っててもなのはさんの許可なく話す事はできないわ。」

ティアナの言葉で話は打ち切られた。

STS編 第13話 一時の休息

魔法少女リリカルなのは

↓ 聖騎士と黒騎士

STS編 第13話 一時の休息

魔法発祥の地である第1世界―ミッドチルダ。

しかし、中心部は魔法技術が著しく発達しているが、郊外に目を向ければ自然が悠々と残っている。

そして、アルトセイム地方の人が近寄らないぐらい深い森の中に大きな湖が広がっていた。

その湖の中に3人の少女がゆったりとくつろいでいた。

「母さん。そろそろ帰らなくて良いの？」

3人の少女の内の1人で金髪オッドアイの少女が母さんと呼ばれる銀髪の少女に声を掛ける。

「もうしばらくは此所に居るよ。」

「オリヴィエはちょっと焦り過ぎだよ。」

「リリスはのんびりし過ぎ!!」

リリスと呼ばれた銀髪の少女に噛み付くオリヴィエ。

まったく血は繋がってないのに、2人まるで本当の姉妹のように仲がいい。もちろん、たまには喧嘩もするが。

「そこまでにしなさい。滅多に取れない休息なんだから。」

にらみ合う2人をなだめる銀髪の少女―高町　なのは。

前回の一件で血の色に染まった銀髪は元の綺麗な銀髪に戻り、血塗れだった身体も湖の水で綺麗に返り血が流れ落ちた。

「母さん。やっぱり封印はできないの?」

「うん。翼は霊体化して見えないようにしたけど、封印はできないみたい。」

親友であるフェイト・T・ハラオウンの血を吸ったなのは封印に耐性ができてしまい、真祖の吸血鬼としての封印を無効化してしまっただ。

吸血鬼の象徴であるコウモリの翼は霊体化させて見えなくなっている。

「いつそう髪の毛を染めたら？」

「別に変身魔法で十分だと思う。」

リリスとオリヴィエの意見が対立して再びにらみ合いを始める2人。2人は地獄のような研究所から救ってくれたなのは心の底から慕っているのがうかがえる。

そんな2人を見詰めてなのは笑みを漏らした。

（やっぱり、オリヴィエやリリスと居る時間が一番楽しいな……♪）

姉妹のように喧嘩するオリヴィエとリリス。

まるで母親のように見守るのは。

その様子はまるで親子である。

物思いに耽っていると通信が繋がる。

『休憩中にすまないね。』

「……変態として訴えますよ？」

『大丈夫。音声のみだ。』

それに君の未発達な身体を見てもうれ「死ね!!」」

スカリエッティとの通信を強制的に切断するのは。
ちなみに、なのはの身体は真祖の吸血鬼になった11歳の身体から
まったく成長していない。普段は変身魔法を使つて精神年齢相應の
姿に変えているのだ。

再び通信が繋がる。

空間モニターに映つたのはスカリエッティではなく、その秘書のウ
ーノだった。

『ごめんなさいね。ドクターが失礼な事を言つて。
今、クアットロがしっかりお仕置きしてるから。』

背後からスカリエッティの叫び声が聞こえるが、なのはは気にしな
い。

「それで、用件は？」

『この前話した聖王の器の事よ。』

“聖王の器”という単語を聞いた瞬間、リリースと戯れていたオリヴ
ィエが反応した。

『今から5日後に聖王の器を乗せたトラックが運び出されるの。貴
女にはその子の回収を頼みたいの。』

「5日後ですか……わかりました。引き受けます。」

『頼むわね。回収したら貴女たちの所で保護してあげてね。』

「はい。あの…クアットロと替わって貰えますか？」

『わかったわ。』

『はい、なのは姉様、お久しぶりです』

ウーノの代わりに茶髪の女性が出てくる。

クアットロはなのはによくなついている戦闘機人の1人である。

「久しぶり、クアットロ。ちょっと頼みたい事があるの。」

『なのは姉様をお願いなら、何でも聞きますよ』

「実はね……………」

なのはのクアットロに“お願い事”を話した。

『それくらいなら、お安いごようです。』

「頼むね。じゃあ、5日後に。」

なのはは通信を切る。

「さてと5日後までゆっくりと過ごしていおっかな？」

「なのはさん。教導の方は良いの？」

「ん？大丈夫だよ。そのためにエステルを呼んだんだから。」

ちなみに、エステルには『なのはが教導をできない時に助っ人として参加する。』という命令が下っているのだ。

「エステルさん。弟を虐めないといいですね。私は別に構わないけど。」

相変わらず、身内以外には関心を持たないオリヴィエであった。ちなみに、エステルの弟とはエリオの事である。

「オリヴィエとリリスは5日後の仕事に参加する？」

「私は参加します。」

「私も。妹の顔も見たいし。」

オリヴィエの妹は依頼の聖王の器の事である。同じ遺伝子を用いているため、オリヴィエの妹にあたる。

「じゃあ、リリスはフォワードたちのサポート。オリヴィエは私と一緒に聖王の器の回収ね。」

「はい。」 「うん。」

2人が頷くのを確認したなのはは特殊回線である場所に通信を繋げる。

『はいはい。こちらは“星の核”^{リスタリア}守護役、リグレットです。』

通信画面から聞こえてきたのは明るい少女の声。

画面に写されるのは、なのはと瓜二つの顔立ちにフェイトと同じ金髪を持つ8年前、研究所から助け出した少女ーリグレット・グレイセスである。

「久しぶり、リグレット。

そっちは何とも無い？」

『何にも。いたって平和な毎日だよ。』

「そっか、実はね、5日後新しい子を救出しに行くから。」

『了解。部屋を用意して待ってるよ。』

リグレットはなのはの端的な言葉だけで連絡してきた理由を直ぐ様理解したようだ。

「ありがとう。シェリアとアスベルにも伝えといて。」

『了解。じゃあ、5日後に。』

通信が切断され、空間モニターも消滅する。

そして、3人は再び湖を泳ぎ始めた。

そして、オリヴィエとリリースは自分が持つ宝具に出会う事になると
は当の本人たちも保護者であるのはも知らなかった。

STS編 第15話 アリサVSキャロ

魔法少女リリカルなのは
～ 聖騎士と黒騎士～

STS編 第15話 アリサVSキャロ

なのは暴走事件（アリサ命名）が終結してからほんの数日後。
機動六課フォワードメンバー4人が戦線に復帰できるようになり、
いつもの訓練が再開された。

機動六課の訓練スペースにいつもの4人とヴィータ副隊長が来ていた。但し、今までと違い、キャロの肩には全長30?程のコーティカルテがちょこんと座っている。

「お前らも知ってると思うが、なのは有給休暇を取ってるから代わりになるのは知り合いが教導に参加する。」

『有給休暇を取って欠席』という情報は先の事件の詳細を知らないメンバーのためにクロノが流した偽りの状態である。

今は管理局に所属して居ないが、管理局在籍の時はワーカーホリック気味だったため、誰も疑問には思っていない。

ちなみに、なのは率いる『幻想の騎士団』は三提督の固有戦力扱いで管理局には所属していない。しかし、事情を知らないほとんどの人はなのは“のみ”が管理局に所属していると思っている。

ザッ、ザッ、ザッ！

遠くの方から草を踏み分ける足音が5人の耳に入ってくる。

「ごめん、遅れた！！」

現れたのは2人の女性と1人の少女の計3人である。

「別に大丈夫だよ。」

「まずは自己紹介ね。私は幻想の騎士団特攻隊長、“炎帝”のアリサ・バニングスよ。キャロとティアナ以外ははじめましてね。」

「同じく幻想の騎士団所属技術顧問、“氷帝”の月村 すすかです。」

「左右に同じく幻想の騎士団所属フォワードの1人、“雷帝”のエ

ステル・グレイセスだよ」

「「「「よろしくお願いします!!!!!!」」」」

4人は元気よく返事する。

「さてと早速、訓練するわよ!! キャロ。」

「は、はい。」

急に呼ばれたので、慌てるキャロ。

「キャロはユニゾン状態で私と一対一で模擬戦よ!!」

「あ、はい。」

ちなみに、キャロはオリヴィエから地獄のような特訓を受けたのだ。
実力は他の幻想の騎士団員と互角に闘えるくらいである。

「コーティカルテ。」

「はい。」

「「ユニゾン……イン!!!!!!」」

コーティカルテが光の球体になり、キャロの中に入っていく。
するとキャロの身体は少女の身体から女性の身体に変わる。背中には悪魔の特徴である翼が生える。

「キャ、キャロが大きくなった!？」

「バカスバル。単なる変身魔法よ。」

突然身体が変貌したキャロに驚くスバルと冷静に突っ込むティアナ。

「ふふ♪ ケリユケイオン、デステイニー!!」

2つのデバイスを起動させて騎士甲冑を纏っていく。

「フリードは此处で待機ね。」

「キュク〜ル」

フリードが了承したのを確認するとキャロは自分の翼をはためかせ、アリサが待つ空に飛び立った。

く訓練スペース上空く

「幻想技 一の太刀“刹那”!!」

先に仕掛けたのはキャロだ。

一瞬でアリサの懐に入り込み、ブリューナクを振るう。

しかし、簡単に当たる筈なく、一瞬で抜刀したフランベルジュで防がれる。

『アロنداイト！！』

コーティカルテがキャロの腰に装備されたアロنداイトを展開し、放とうとする。

「甘い！！」

空中を舞うようにアロنداイトの射線上から身体をずらす。

「魔王炎撃破！！」

回避した体勢から灼熱の炎を乗せた一閃を放つ！！

「！！ 幻想技 無の太刀“虚無”！！」

ブリューナクとフランベルジュが衝突した瞬間、フランベルジュが纏っていた炎が無効化される。

「ちっ！！ 面倒ね、その技。」

『幻想技 無の太刀 虚無』は魔法・幻想術のすべてを完全に無効化する悪魔の得意技。しかし、コーティカルテのような悪魔専用のユニゾンデバイスがないと絶対に使用できない。

説明してなかったが、コーティカルテは悪魔とユニゾンする事で本領を発揮できる特殊なユニゾンデバイスである。

コーティカルテ自身にマナを生成する能力があり、ユニゾンするとコーティカルテが生成したマナも使えるようになるのだ。普通のユニゾンデバイスと同じ機能もあるので、普通の魔導師とのユニゾンもできる。

閑話休題

「アクセルランサー!!」

キャロの周囲に桃色の魔力弾が6つ形成される。

「ファイア!!」

キャロの号令を合図にそれらは一斉にアリサに襲い掛かる。

「おっと!!」

アリサは空中で見事な宙返りを披露してかわすが、魔力弾は進行方向を変え、再びアリサを追う。

『アクセルランサー』

アクセルシューターの操作性とプラズマランサーの弾速を掛け合わせたキャロのオリジナル魔法。

ただし、一度に操作できるのは6つが限界（ユニゾン状態で）で術者はその場から動けないという欠点もある。

「（うそ、誘導弾！！）…なら！！」

6つのアクセルランサーがアリサの間合いに入る。

「受けよ、灼熱の剣！！」ヴォルカニックセイバー！！」

身体を回転させて炎のカーテンを作り出す。

『ヴォルカニックセイバー』はアリサの得意技で応用がきく。今回のように炎のカーテンを形成し、防御する事もできるのだ。

アクセルランサーが破壊された際に発生した煙に紛れてキャロはアリサに接近戦を挑んだ。

ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！

一合、二合、三合と斬り合うたびに火花を散らす二振りの剣。

2人の一步も譲らない熾烈な戦いにティアナ・エステル・すずかの3人以外の観戦者は舌を巻いた。

「キャラ……凄い……」

「あれが……キャラの全力……」

「おいおい……シグナムにも匹敵する強さだぞ。」

スバル、エリオ、ヴィータが順番に感想を述べる。

アリサを剣だけでなく、拳も多用して巧みに攻撃を仕掛ける。対するキャラは剣を使ったり、足技を使ったりして攻撃を仕掛ける。

互いに相手の隙を見つけては容赦なく攻撃を加えている。

「オリヴィエが鍛えただけあってやっぱり強いわね。」

「アリサちゃんもそれなりに苦戦してるね。」

「まあ、アリサ母さんはイフリートを使ってないけどね。」

ティアナ、すずか、エステルは驚く素振りを見せず、口々に喋っていた。

『流石はアリサさん。やっぱり強い……。』

現在、キャロとアリサは一旦、距離を空けて相手の出方を伺っている状況である。

『どうするの？ 魔力もマナもあまり残ってないよ。』

アリサに聞こえないように念話でコーティカルテと会話するキャロ。

『後がないなら、次の一撃で決める！！』

『オッケー！！ 派手に行こうか！？』

ブリューナクを握る力を強める。

（強いわね、キャロ。つい最近、幻想種に成ったとは思えない強さだわ。）

アリサは心の中で呟いた。

（“油断したら、負けるよ”っか……オリヴィエの忠告通りね。気を抜いたらやられたわ。でも……）

アリサは目付きを鋭くしてキャラを睨み付ける。

（騎士団の先輩として後輩に負けるのは、私のプライドが許さないのよー!!）

「フランベルジュ!!」

《OK・マテリアル ドライブ!!》

マテリアルシステムが解放され、アリサの身体を魔力が駆け巡る。

2人は剣を胸を当たりで祈るように両手で握る。

キャラはこの模擬戦で飛び散った魔力をブリューナクに収束させている。

対するアリサもキャラと同じようにフランベルジュに魔力を収束させていく。

そして、収束された魔力が鳥の姿を形作り、2人の剣の刀身に固定される。

「ゼロ・フェニックス!!!!!!」

2人は同じ魔法を発動し、同じタイミングで突進して行った。

『ゼロ・フェニックス』

剣に魔力を収束させて突進する技（魔法）。

アリサが考案し、キャラに教えた魔法でもある。

結界破壊・障壁破壊の追加効果があり、防ぐことは100%不可能とされている。

魔法を放つ時、魔力が巨大な鳥の姿を型どる。分類は収束魔法。

アリサとキャラのゼロ・フェニックスが衝突する。

「ぐぬぬ……」

同じ威力の魔法なのだが、マテリアルシステムを解放したアリサの方が押している。

「くっ。ブリューナク、カートリッジ ロード……」

《エクスプローズイオン》

キャラの命令を受けたブリューナクは三発のカートリッジをロードして圧縮された魔力を上乗せする。

「はああああ、ブラスターシューート……!!」

魔力が上乗せされた事により、キャロのゼロ・フェニックスはアリスのゼロ・フェニックスの威力を上回り、アリスのゼロ・フェニックスを呑み込んだ。

そして、その直後、爆煙が立ち上ぼり2人を覆った。

「うわゝ、やり過ぎでしょ。カートリッジ上乗せのゼロ・フェニックスは。」

「アリサちゃん……生きてるかな？」

「いやいや、幻想種だから死なないって。すずか母さん。」

ほのぼのとした会話を続けるティアナ、すずか、エステルの人。

それに対してヴィータ、エリオ、スバルの3人は驚きのあまり開いた口が閉じない状態である。

目の前で繰り広げられた戦闘が信じられないのだ。

「私の負けですね。」

爆煙から現れたのはキャラとキャラの背後から首筋にフランベルジュを突き付けるアリサだった。

さて、あの時何が起こったのかというと……

直撃すると判断したアリサは身体を炎に変え、ゼロ・フェニックスを回避した後、キャラの背後からフランベルジュを突き付けたのだ。

「私の奥の手を使わしたんだから、誇ってもいいと思うわよ？」

「ははは、オリヴィエさんなら、どんな感想をくれるやら。」

上空で笑い合う2人。

模擬戦の結果はキャラの惜敗に終わった。

この後、キャラに“気高き龍騎士”、
“悪魔の黒姫”という二つ名
が与えられたのは余談である。

STS編 第15話 アリサVSキャラ（後書き）

活躍の少ないキャラをアリサと闘わせました。

キャラの強さはアリサやずか達に匹敵するが、幻想の騎士団では最弱の扱いです。

ちなみに、キャラの二つ名はアリサが付けたという設定。

S T S 編 第16話 ラスタリア（前書き）

今回は短め＋グダグダです。

STS編 第16話 ラスタリア

魔法少女リリカルなのは

（聖騎士と黒騎士）

STS編 第16話

機動六課でアリサ達による厳しい教導が行われている頃、あの3人も動き始めようとしていた。
人気のないアルトセイム地方の深い深い森の中にある湖。
その湖で休息を取っていた3人の少女たちは旅立ちの準備をしていた。

「さてと、準備完了。レイジングハート、変身魔法行使。」

《オーライ》

なのはの姿が銀髪の少女から栗色髪の少女に変貌する。背丈は変わっていないが。

「此方も準備、終わったよ。」

なのはの後ろから現れたのは旅立ち（正確には帰還）の準備を終えたリリスとオリヴィエだった。

「ご苦労様、リリスにオリヴィエ。
じゃあ、行こうか？」

「「うん」」

2人は頷いて転移魔法を発動させた。

場所は変わってミッドチルダの首都クラナガン郊外。
2人の少女がバイクに乗って道路を疾走していた。

「ティア、一体何処に行くの？」

「黙ってなさい。もうすぐ到着するから。」

2人の少女はスバルとティアナだった。

何故、2人が教導に参加していないのかというとフォワード4人に半日の休暇が言い渡されたからである。

入隊以降、ほとんど休暇を取っていない事を健気に思ったさすがが半日だけの休暇を与えたのだ。

ライティング分隊のちびっこ2人の方も休暇を楽しんでいるだろう。

そんな休暇の中、スバルとティアナはヴァイス陸曹からバイクを借りて何処に向かっていた。

「着いたわよ、スバル。」

「此処は？」

「入ってからのお楽しみ。」

たどり着いたのは単なる森にしか見えない場所だった。

ティアナはバイクを止めてヘルメットを外すと森の奥へと進んで行った。

それに慌ててついて行くスバル。

森の奥に入って行くと木々が乱立する風景から美しい花があしらわれたトンネルに変わった。

「えっ、さっきまで森の中だったのに!!」

「兎に角、付いて来なさい。」

ティアナに一喝されて困惑しながらもティアナに付いていくスバル。

シュッ!!

「うわっ!」

スバルは首筋に剣を突き付けられた事に驚く。

「剣を納めなさい、アスベル。」

「……………わかった。」

トンネルから忍者のように現れたのはなのはを顔立ちがそっくりな少女―アスベル・グレイセスだった。

アスベルはティアナに言われて渋々ミスリルを納める。

「スバル。惚けてないでさっさと来なさい。」

「ま、待つてよーティア!!」

そして、トンネルの先にあったのは、立派な教会のような建物だった。

ティアナは後ろから付いてくるスバルに対して…

「ようこそ。星^{ラスタリア}の核へ。」

と言った。

「ラス……タリア……？」

「そつ。幻想の騎士団が管理する孤児院よ。」

「ティアナさん。あまり部外者を入れるのは感心しませんよ。」

奥からアスベルと同じ顔立ちで茶髪のロングヘアーの少女が出てくる。

「私の相棒なの。それぐらい勘弁してよね、シェリア。」

「はあ。相変わらずですね。貴女は。」

ちなみに、ティアナは幻想の騎士団員の中で最も自由奔放な人物であると全員が認識している。

「気にしないの。シェリア、ちょっと頼みがあるの。
スバル、ちよつとマツハキャリバーを貸して。」

「？いいけど……………」

スバルはティアナの頼みに疑問を浮かべながらもティアナにマツハキャリバーを渡す。

「シェリア、この子のリミッターマツハキャリバーを外してあげて。」

「えっ、ティア。勝手に解除して良いの!？」

「ちゃんと許可は取つてあるわよ。」

今回の休暇はタダで与えられたわけではない。

ティアナとキャロにはすずかから相棒のデバイスのリミッターを一段階解除するように言われているのだ。

ちなみに、ティアナとキャロのデバイス―クロスミラージュとケリユケイオン―にはリミッターが掛かっていない。
キャロに関しては幻想種になった時、全リミッターを解除されているのだ。

「わかりました。ただ、少し時間を頂けますか？」

「構わないわよ。今日中に終わらせてくれればね。」

「そんなに掛かりませんよ。では、しばらくお待ちを。」

そう言い残すとシェリアは孤児院の中に入って行った。

「あつ、ティアナお姉ちゃんだっ」

シェリアと入れ替わるようにして金髪の少女とその少女より幼い黒髪の少女が出てくる。

「リグレットにリズじゃない！！久しぶり！！」

「本当に久しぶり。元気そうね。」

「ティアナお姉ちゃんっ」

リズと呼ばれた少女はティアナの足に抱き付く。

「ごめんね、リズ。しばらく会いに来られなくて。」

「じゃあ、代わりにいっぱい遊んで！！」

「ええ、良いわよ。スバルも行くわよ。」

「えっ、うん。」

リズに引つ張られるようにして歩いて行くティアナとそんなティアナの後を追うリグレットとスバルだった。

「ねえ、ティア。此処ってどんな所なの？」

「幻想の騎士団がいろんな次元世界から集めて来た子供を保護する場所よ。」

「へえ。」

ティアナの簡潔な説明を聞いて感嘆の声をあげるスバル。

『ティアナさん。あまり機密に関する事は話さないように。』

『わかってるわよ。』

リグレットは念話でティアナに忠告する。

ティアナはしっかり者に見えるが、それは外面だけである。実際は肝心な所でヘマを仕出かすうっかり屋なのだ。

しかし、その実体は幻想の騎士団員しか知らないのだ。

星の核は^{リスタリア}今日も平和である。

STS編 第17話 エリオとキャラ

魔法少女リリカルなのは

↓ 聖騎士と黒騎士 ↓

STS編 第17話 エリオとキャラ

ティアナとスバルが孤児院ラストリアがデバイスのリミッター解除を行って子供たちと遊んでいる時、ちびっこ2人はリニアールに乗っていた。

「ねえ、キャラ。そのカバンには何が入ってるの？」

エリオはキャラの首から掛かっている黒く直方体の形をしたカバンを指さしながら、訊ねた。

「ん？ ああ、この中にはね……………」

キャロがバッグの蓋？を開けると銀髪の小人―コーティカルテがすやすやと寝息を立てて眠っていた。

「コーティカルテ？ 何でカバンの中に？」

「簡単に言えば、リイン曹長と同じ理由……かな？」

「いや、僕に聞かれても……」

「まあ、ユニゾンデバイスは目立つし、アウトフレームも結構な魔力を消費するから……」

キャロはそう言うが、他にも理由はある。

コーティカルテは管理局には登録されていないユニゾンデバイスである。ゆえに管理局に知られると色々面倒な事になるという理由もあるのだ。

「起こしちゃうのも悪いから、締めつて……と。」

コーティカルテを起こさないように蓋？を閉めるキャロ。

ちなみに、コーティカルテは寝起きが悪いため、キャロは滅多に自分から起こさない。

「エリオ君。ストラダ、貸して。」

「いいけど……どうし「すずかさんからのお仕事。」…あゝ、そういえば頼まれてたね。」

エリオの質問を途中で遮る。キャラの一言でエリオも納得したような声をあげる。

「良いよ……はい。」

「ありがとう。」

ストラダを腕から外してキャラに手渡す。

（さっきエリオ君の顔が赤かったけど何でだろう？）

お礼を言った時のエリオの顔を見て、頭の片隅にそんな疑問を抱くキャラだった。

「キャラ、そのカードは？」

キャラがポーチから取り出したのは黒いカードのような物だった。しかし、カードにしては厚く、頑丈な物である。

「これは“簡易デバイス整備ツール”だよ。」

「単なるカードみたいに見えるけど？」

キャラの告げた単語と目の前にある物体が結びつかないエリオ。

キャラは「ふふ」と笑みを浮かべるとカードみたいな物体の中心を軽くタッチする。

その瞬間、物体が左右にスライドしてツールが起動する。キャラはストラダを中心にセットするとキーボードを叩き始める。

「此処をこうして……パスワードは………よし。
ついでに整備してつと………」

ストラダの機構と異常を確認していたキャラは表示したモニターを見て、目を丸くした。

（ストラダのフレームに使われてるのは……オリハルコン？ 何であんな国宝級の魔法金属が？）

キャラは真横に居るエリオを見詰める。当の本人は意味がわからず疑問符を浮かべている。

（エステルさんかな？ エリオ君を気に掛けてたし………）

思案している途中でキャラは自分を見詰めている視線に気がついた。

「どうしたの、エリオ君？」

視線の主はキャラの真横に居るエリオだった。

「いや、何かキャラが大人びているように見えたから………」

「あゝ、幻想種になると精神年齢が強制的に引き上げられるらしいの。」

「通りで。」

エリオはキャラの簡潔な説明で納得したようだ。

「整備とリミッター解除完了。はい、返すよ。」

「ありがとう。」

整備とリミッター解除が完了したストラダを腕に装着する。

「そう言えば、キャラって“デバイスマイスター”の資格持ってたっけ？」

『デバイスマイスター』というのはデバイスを整備したり、デバイスの改造や製作をしたりする職業の人の事である。

デバイスマイスターには当然資格がいる。また、デバイスマイスターの資格は非魔導師が修得する事が多い。

「ううん。持っていないけどオリヴィエさんに仕込まれたの。」

「オリヴィエさんが？ あの人、他人が嫌いなんじゃあ……………」

「人間が嫌いなだけで幻想種はそうでもないみたい。」

幻想の騎士団に所属しているキャラでもオリヴィエが人間を嫌っている理由は知らない。

その理由を知っているのはティアナと幻想の騎士団初期メンバーである。つまり、知らないのはキャラやリグレット等だけである。

「へえ、そうなんだ。」

「ちなみにデバイスの整備ぐらいなら全員出来るらしいよ。」

「うそ!？」

キャロの言っている事は真実であり、騎士団全員がデバイスの簡易整備ぐらいなら行えるのだ。

だが、デバイスの開発を行えるのはずかとりネイアの2人だけである。

戦闘中にデバイスが不調がきたした際に備えての事らしい。

「あつ、着いたみたいだよ。」

リニアレールはキャロとエリオが楽しく話している間に目的地であるクラナガンに到着した。

「キャロ」

「うわっ!」

駅を出たとたんにキャラに何者かが抱き着いた。

抱き着いて来たのは空色の髪の毛に黒い瞳の人間だった。顔つきは女の子ぽいが、声の高さからして男の子だろう。

「も、フリード。あんまり驚かせないでよ!!」

「ごめんごめん、つい嬉しくて」

「もう!! エリオ君、どうしたの？」

エリオはフリードを指差しながら、酸欠状態の魚のように口をパクパクさせながら固まっていた。

「キャラ……その人は? (聞き間違いだ。そうに違いない!!)」

表面上は平静を装っているが、内心はかなり動揺している。

「?フリードだよ。」

「フリードは竜だった筈……だね?」

「キャラ。私が人間形態に成れる事、話した?」

「あっ!!」

フリードに指摘されて気付いたキャラ。

「エリオ君、実は……」

アリサとキャロの真剣勝負が行われた日、フリードはあの後すずかの計らいで『幻想郷』にある竜の里に連れて行って貰ったのだ。そして、竜の里での地獄のような特訓のおかげでフリードは人語を交わせるだけでなく、人間形態になれたり、魔法を行使できるようになったのだ。

……というわけなの。」

「そ、そうなんだ……。じゃあ、“幻想郷”って？」

「“幻想郷”の事を話すのは掟で禁止されてるの。」

幻想の騎士団の絶対の掟の1つが『人間に幻想郷の事を口外してはならない』という事である。

この掟はティアナですら破った事がない。

「わかった。じゃあ、聞かないでおくよ。」

「そんなシリアスな会話してないで観光しようよ!!」

「そうだね。行こうか、エリオ君。」

「うん!!!!!!」

フリードの言葉で4人（約1名は未だに熟睡中。）はミッドチルダの首都クラナガンの街中を散策し始めた。

この休暇で思いもよらない邂逅が待っているとも知らずに。

場所は変わってクラナガン郊外のある地点。
そこでは1つの事故が発生していた。

「……………遅かったか。」

「対象は地下水道に逃げ込んだようです。」

「引き継がれた王の遺伝子……………か。」

事故が発生した位置の近くに現れたのは休息を終えたなのは、リリス、オリヴィエの3人だった。

3人はこの事故の原因について確信があった。

回収（保護）対象：聖王の器

一緒に運ばれていた2つのレリックの反応を感知したガジェットが襲撃。

そのガジェットを聖王の器が迎撃したのだ。

「母さん。私は少し単独行動を取るよ。」

「良いよ。行つて来なさい。」

「うん！！！！」

オリヴィエは顔をパアツと輝かせ、翼をはためかせて青い大空の下、搜索を開始した。

「良かったの？」

「うん。オリヴィエも自分の妹が心配だろうし。」

「そうですね。あの子も意外と心配性だしね。」

「身内限定だけどね。」

リリスの言葉に一言付け足すなのは。

「それは貴女も同じでしょ？」

「ふふ」

リリスの言葉にYESともNOとも言わず、ただ微笑むのはだっ
た。

S T S 編 第18話 地下水道の戦闘（前編）（前書き）

1 日書き上げたせいかなりグダグダです。

STS編 第18話 地下水道の戦闘（前編）

魔法少女リリカルなのは
　　＼幻想の交響曲＼

STS編 第18話 地下水道の戦闘（前編）

月村すずかの計らいで半日間の休暇を手に入れたフォワード4人。
最初は別れて行動したが、ある地点に4人全員が集結しようとしていた。

「キャロ、エリオー！」

通信を繋げて直ぐに駆け付けたのは孤児院ラストリアで暇を潰していたスターズチームだ。

「スバルさん！ティアナさん！」

「この子が？」

「はい。地下水道を通って来たみたいで……」

「ルーテシア。どう？」

ティアナは後ろから着いて来た薄い紫色の髪の少女―ルーテシア・アルビーノに問い掛ける。

ファミリーネームからわかるように彼女は幻想の騎士団の協力者、メガーヌ・アルビーノの1人娘である。ルーテシアは普段ラストリアに居てリグレット達の手伝いをしているのだ。

「間違いない。身体特徴が一致してる。」

「じゃあ、この子がオリヴィエの妹、ヴィヴィオってわけか……」

ルーテシアが此処に居る理由。それはエリオの通信を聞いて件の少女ではないか？と判断したからだ。

「「オリヴィエさんに妹が居たんですか!？」」

キャロとエリオの声が見事に八モった。

ティアナの『オリヴィエの妹』という単語に反応した。

「……………それに関しては私から説明できないわ。オリヴィエの秘密にも関わるから。」

「そついうことだ。」

細い路地の入り口から少女特有の高い声が響く。

「あら、オリヴィエ。もう帰ってたの？」

現れた少女はなのはの娘にしてなのはの補佐役、オリヴィエ・グレイセスだった。

「ついさっき帰って来たただけだ。母さんとリリスも帰って来てる。」

「で、妹が心配で駆け付けた……と。」

「悪いか？（ギロリッ）」

ティアナを睨み付けるオリヴィエ。

「冗談。貴女が心配性なのは周知の事実でしょ？」

「否定はしないよ。ルーテシア、すまないがヴィヴィオをラストリアに運んでくれるか？」

「勿論♪ そのために此処に居るんだから。」

ルーテシアは意識を失ったままのヴィヴィオを抱きあげ、転移魔法でラストリアに帰還した。

「さて、私たちはレリックを探しましょうか？」

「はい!!」「おう!!」

ガタッ！

ヴィヴィオが出てきたらしいマンホールの蓋が開く。
音に反応した4人が戦闘姿勢をとる。

「キャロ。戻ったよ。」

ほんわかした声が細い路地にこだます。

マンホールの蓋を開け、地下水道から出てきたのはキャロの相棒フリードリヒ（人間形態）だった。

「フリード。どうだった？」

「ガジェットがうじゃうじゃ居たよ。流石にレリックは見つけられなかったよ。」

「そう。ありがとうね、フリード。戻って良いよ。」

フリードは頷くと少年の姿から見慣れた白竜に変わる。

「コーティ、起きて。」

「うーん……何？」

キャロが首から掛けていたカバンからコーティカルテが出てくる。

「仕事だよ。」

「あんたも起きなさい、アギト。」

「あゝ、よく寝た。」

ティアナのポケットから赤髪のユニゾンデバイスが出てくる。

「仕事よ、アギト。」

アギトは数年前、ティアナが助けた古代ベルカ純正のユニゾンデバイスである。

助け出したティアナとのユニゾン適正が高かったので、そのままティアナがロードになったのだ。

「ルーテシアがヴィヴィオを保護したらしいよ。」

上空を飛んでいるのはティアナから送られて来た報告書に目を通していた。

「ひとまず安心だね。」

ラストリアの敷地内に入ってしまったえば、誰も追う事はできない。

ピピピッ、ピピピッ

着信を知らせる音が鳴り響く。

『なのは姉様、クアットロです。』

「どうしたの？」

『言われた通り、地下水道に大量のガジェットを向かわせました。』

「ありがとうね。」

『いえいえ。あと、メガーヌとクイントが向かいましたが、どうしますか？』

「フォワード達にはちょうど良いからそのままです。」

『わかりましたわ。』

なのはが数日前にクアットロにお願いした事はフォワード4人にガジェットをぶつける事である。

ちなみに、ティアナとオリヴィエはあくまでも保険である。

「じゃあ、隊長の足止めをお願い。」

『お任せを。』

通信が切断される。

「私たちはどうしますか？」

「予想外の事態が起こらない限りは傍観。」

「了解。」

フォワード4人とオリヴィエはマンホールから地下水道に降りて来た。

当然、全員がデバイスを起動させている。

そして、フォワード4人とオリヴィエの目の前には大量が蠢いていた。

「うわゝ、嫌になるわね。こんだけ居ると。」

「ですね。」

「私は基本的に手伝わないから。」

そう言つてオリヴィエは一步下がる。

「アギト。」

「はいよ、ユニゾン・イン!!」

アギトが光の玉となつてティアナの体に入ると髪の毛はオレンジ色から薄い赤色になり、白かつたロングマフラーは焰のようなオレンジ色になる。

「コーティ。私たちも。」

「はい。ユニゾン・イン!!」

キャロとコーティカルテがユニゾンすると桃色の髪の毛は薄くなり、子供の体型から大人の体型に変貌する。

「さあ、行くわよ!!」

4人は蠢くガジェットの群れに飛び込んだ。

無数のガジェットが集まってもフォワード4人にとっては所詮烏合の衆。

然したる障害にも為らず、順調に突き進んでいた。

「有りました!!」

5人は目標物であるもう1つのレリックを発見した。

「残念だけど、そのレリックは頂いて行くわ。」

「「「「!!!!」」」」

地下水道の奥からフード付きの外套を纏った2人の人間。おそろく声と体型からして女性だろう。

さらに、その後ろには見たことのないタイプのガジェットが五機。そのガジェットは巨大な機械鳥のような形状をしている。

「スバル。私はあの新型ガジェットを相手するわ。」

「うん。気をつけてね。」

地下水道にはフォワード4人はアンノウンとの戦闘を開始した。

ちなみに、同時刻。フェイト隊長やヴィータ副隊長はクアットロの策略にはまり、足止めを食らっていた。

STS編 第18話 地下水道の戦闘（前編）（後書き）

かなり久々の更新なくせにグダグダな文章。また、スランプかな？
ティアナとアギトと言う世にも珍しい組み合わせに挑戦してみました。

アギトは原作とは違い、髪はストレートのままで普通の服を着ている。

戦闘服はティアナとお揃い。

ちなみに、名付け親は変わらずルーテシア。

ティアナとアギトのユニゾン適正ですが、100%は越えています。

外伝 第1話 無限の欲望との接触（前書き）

『冥府の炎王』と同時に投稿しました。スランプ気味で、グダグダです。

外伝 第1話 無限の欲望との接触

魔法少女リリカルなのは

↓ 聖騎士と黒騎士 ↓

外伝 第1話 無限の欲望との接触

遺失物管理部 機動六課発足からさかのぼる事8年前。

孤児院『星の核』^{ラスタリア}を建設した伝説の三提督直属独立行動部隊『幻想の騎士団』。

騎士団員は次元世界に散らばり、違法研究所を壊滅させて行った。

そして、ある研究所で幻想の王と無限の欲望は出会った。

「おかしい……敵が居ない。」

「いくつもの違法研究所を潰してきたけど、こんな事って無かったよ。」

なのはとすずかは管理局の三提督が発見した違法研究所に来ていた。

「世界が闇に包まれる時、闇の福音は鳴り響いく。」

なのはは聖騎士モードから人等の気配に敏感な吸血鬼に姿を変える。そして、人を超越したなのはの敏感な五感が何かを察知した。

「ブラッディ・ナイフ。」

なのはは自分の右手に魔力で構成された真つ赤なナイフを顕現させて虚空に投擲する。

ガキンッ！

なのはが投擲した三本のナイフは虚空で弾かれる。

「幻術で姿を隠して盗み聞きなんてあまり誉められた物じゃないよ。」

「さすがは幻想の騎士団の総隊長殿だな。」

虚空から現れたのはなのはと同じくらいの背丈で銀髪のストレート、青いボディースーツを身に纏い、黒ばいコートを羽織った少女だった。

「君がこの研究所の護衛？」

「いや、私はさしずめ案内係だ。」

少女はなのはの言葉を否定した。

「着いてきてくれ。ドクターが貴女たちに会いたいそうだ。」

少女はそう言っていると振り返り、薄暗い研究所の奥に進み出した。

すずかとなのはは警戒しながらも少女の後に続いた。

なのはとすずかが少女に案内されて着いたのは、一際明るい部屋であつた。

「はじめまして。幻想の騎士団技術顧問、月村 すずか。そして…
…幻想の王、高町 なのは。」

連れて来られた部屋には三人の女性と一人の男性が居た。

「はじめまして。潔く殺されたいの？『無限の欲望』 ジェイル・ス

カリエッティ。」

その言葉を聞いた案内係の少女を含む4人の女性は臨戦姿勢をとった。

それに反応したすすかもアイスコフィンを抜刀する。

「武器を納めなさい。彼女の挑発だ。」

「すすかちゃんも。」

実質隊長に当たるなのはとスカリエッティの言葉に全員が臨戦姿勢を解除する。

「やはり私の事を知っていたか……管理局に裏切られし哀れな“エース・オブ・エース”。」

「その名前はもう捨てたよ。」

2人はふふつとお互いに笑い合った。

「さて、本題に入ろう。」

私達と手を組まないか？」

「貴方の同盟で何のメリットがあるのでしょうか？」

「私の頭脳と此処に居る私の娘たちを戦力として提供する。」

「……………わかりました。同盟を結びましょう。」

「ありがとう。それからひとつ頼みがある。」

「頼みですか？」

「ああ。此处に居るトーレと戦って欲しい。」

「好きにすれば良いと思うよ。他のメンバーには私から伝えておくから。」

すずかは何時ものの微笑みを浮かべた。

「ありがとうね」

「トーレ、彼女を訓練室まで案内してあげなさい。」

〈訓練室〉

トーレに連れられてやって来たのは研究所内に備え付けられた広い広い訓練室である。

「勝利条件は？」

「私を満足させる事だ。」

「わかりました。但し……手加減できませんよ？」

そう言った瞬間、優しい彼女が発しているとは思えない濃厚な殺気が放たれる。

「お前を見た時から一度戦って見たかったのだ。やはり私の目に狂いはなかった！！」

トーレはなのはに飛び掛かった。

「はっ！」 「……………」

2人の拳がぶつかり合う。

トーレは戦闘機人で体を強化されてるとはいえ、素体は普通の人間である。

そんなトーレが人間の超越したなのはに力比べで勝てるのか？

答えはNOである。

「くっ！」

トーレの拳から血が流れて出した。

「じうけんれっぱ剛拳烈破……………」

『剛拳烈破』

拳を叩きつけて内部から破壊する危険極まりない技。

当たり所が悪いと一撃で死に至る。というよりは人間に使う事を考えていない。

「今度は此方！！ブラッディ・ランス！！」

『ブラッディナイフ』と同じ要領で血のように真っ赤な槍を形成する。

「ナイフの次は槍か……お前はいろんな武器が扱えるんだな。」

トーレが感心したように呟く。

「私はクロスレンジの時は基本的に肉弾戦しかないよ。」

「？どういう事だ？」

トーレは理解できない。

「この一撃で終了だよ。」

「私が得意なのは、高速戦闘だぞ？当たるわけがない。」

「動けばね。」

トーレは動かこうとするがまったく動かない。

「その場に留まったのが仇になったね。」

トーレがなのはとの会話で動きを止めていた時、なのははトーレに気付かれないように不可視のバインドで拘束したのだ。

「これで幕引きだよ。貫け、鮮血の槍！！“ ロンギヌス” ！！」

なのはは力の限り、槍を投擲した。

『ロンギヌス』

魔力で構成された槍に加速魔法を掛けて投擲する魔法。

目標物に向かう時に周囲の魔力（もしくは、魔力素）を収束するか
ら分類は『スターライトブレイカー』と同じ収束魔法。

距離が長ければ長い程医療が上がるが、直進しかしないため、容易
く避けられる。その欠点を克服するためにバインドで拘束してから
放つ。

なのはの放った『ロンギヌス』は身動きの取れないトーレに直撃し、
爆発した。

煙が晴れるとその場に居たのは気を失ったトーレであった。

「模擬戦しゅうりょう。」

なのははどことなくすつきりしたような顔で訓練室から出ていった。

余談だが、この様子を偶々目撃したクアットロはなのはを『なのは姉様』と呼ぶようになったらしい。

外伝 第1話 無限の欲望との接触（後書き）

STS編の前の時間の話を読みたいという意見があったので、外伝として投稿しました。

最後のトールとの戦闘はおまけです。

外伝 第2話 大天使との邂逅

魔法少女リリカルなのは

く 聖騎士と黒騎士

外伝 第2話 大天使の邂逅

(注) これは機動六課発足から2日後です。

機動六課の食堂。

機動六課に所属するフォワードメンバーからロングアーチまですべての人間が利用する食堂の一角にフォワードメンバー4人が全員揃って食事していた。

「ねえ、ティア。ティアは何処でなのはさんと出会ったの？」

大量のパスタを平らげているスバルがちょうど向かい側に座るティアナに口を開く。

「なによ。藪から棒に。」

「いや、なんとなく気になってさ。」

「僕も気になります!」

「私も……。」

スバルに便乗するエリオとキャロのちびっこ二名。

「まあ、いいわ。話してあげる。確か……あれは私が十歳の時……。」

ティアナは静かにゆっくりと語り始めた。

――回想――

ミッドチルダの首都、クラナガン。

その日は冷たい雨がしとしと降り続いていた。

そんな雨の中を1人の少女――ティアナ・ランスターが傘も差さずに歩いていた。ティアナの瞳には生気が宿っておらず、ただ空虚を映している。

理由は簡単。唯一の肉親であった兄――ディード・ランスターが殉職したのだ。ディードは首都航空隊に所属するエリートだった。

しかし、犯罪者の追跡中に犯罪者に手傷を負わせたものの死亡。

― 役立たず。 ―

― 首都航空隊の恥晒し ―

葬式的最中に言われた二つの言葉がティアナの心の中で渦巻き、幼い少女の心をズタズタに切り裂いていた。

ティアナは無気力・無関心の状態で街中をただ歩いていた。

）
）
♪ ）
）
♪ ）
）
♪ ）
）

「歌？」

そんなティアナの耳に入っただのは美しい声で紡がれる綺麗な歌だった。

（綺麗な声……誰が歌ってるんだろ？）

ティアナは歌声に誘われるように歌声の聞こえる方向に歩み出した。

美しい歌声に誘われるままに歩いてきたティアナは気付かない内に人気の無い森の中にたどり着いていた。

（あっち……あっちの方から声が聞こえる……）

しかし、ティアナは臆する事なく森の奥に進んで行った。

少し歩いた所で森が空け、広い広い湖がティアナの視界に入ってきた。

そして、湖の岸にある一際大きな岩にティアナと同じ年頃の少女が裸で腰掛け、歌を紡いでいた。

その様子は彼のローレライのようであった。

さらさらとした銀髪に鮮血のように紅い瞳。そして、大きなコウモリのような翼が生えていた。
しかし、ティアナは少女の歌声と姿に心を奪われた。

どれくらいの時間が過ぎただろうか……少女は歌を止め、ティアナに目を向けた。

「どうしたの？こんな所に来るなんて。」

不意に少女は口を開いた。

「え、えつと……その……歌声に誘われて……」

「ふふ」正直な子だね。君の名前は？」

「ティアナ。ティアナ・ランスターです。」

「私は高町なのは。よろしくね、ティアナ。」

これが大天使と真祖の吸血鬼の最初の邂逅だった。

（結界を越えて来るから、どんな人かと思ったら普通の女の子だね。）

なのはティアナの姿を見詰めながら心の中でそう呟いた。

違法研究所の殲滅の際に返り血を浴びてしまったなのははこの湖で結界を展開して水浴びしていたのだ。

そして、その結界は幻想種しか越えられないかなり特殊な結界なのだ。

しかし、なのはの目の前に居る少女―ティアナは何の抵抗もなく侵入してきたのだ。

（ん？ この力の波動は……………気のせいかな？
それにしてもこの子…………）

「ねえ、ティアナちゃんは何でそんな悲しそうな瞳をしているの？」

なのはがそう問い掛けるとティアナは涙を流しながら事情を話し始めた。

「ふうん、なるほどね。」

やっぱり管理局は腐ってる。（ボソッ）

「？」

「いや、何でも無いよ。」

…で、ティアナちゃんはその人達を見返したいんだね？」

「……………（コクンッ）」

「じゃあ、真実を知る覚悟はある？」

「？うん。」

なのははティアナに自分が見てきたものを語り始めた。

「私は改革派のトップ、幻想の騎士団を率いる者なの。」

「あの……どうやったら、幻想の騎士団に入れますか？」

なのはの説明を聞いたティアナは幻想の騎士団に入れば、自分の望みを叶えられると判断したのだ。

「条件は2つ。幻想種である事と私達と同じ志を持っている事の2つだよ。」

なのはが条件を聞いた瞬間、ガツクリと俯いた。

後者に関しては問題ない。兄が信じていた管理局を改革したいという志はある。

問題は前者の条件である。幻想種は資質と一定の道具がないと成れないのだ。ティアナは普通の人間。先祖に幻想種なら可能性はあるが、先祖も普通の人間である。

ちなみに、幻想種の遺伝子は継承されて行くのだ。つまり、幻想種の子供はほとんどが幻想種であるという事だ。

「ティアナちゃんはかなり特殊な体質だね。
大天使の転生者か……」

なのはは独り言のように呟いた。

（覚醒までは至ってないけど……すぐにでも覚醒させる事はできそうだね。）

「あの……私も幻想種に成れるんですか？」

「成れるよ。ただし、人間には戻れないけど、どうする？」

なのははいたずらっ子のような笑みを浮かべながらティアナに訊ねた。

「私は………幻想の騎士団に入りたいです！！！！！」

「ふふ♪ 待つてたよ、その言葉を！！！！！」

なのはの身体を魔力が覆っていき、騎士甲冑を形成する。

なのはの髪は銀髪から栗色に戻り、瞳も黒色に変わり、背中にはコウモリの翼から白い天使の羽に変わる。

そして、なのはの右手には『聖騎士の魔導書』が出現する。

「我が声に応えよ、聖騎士の書。

我求む、彼の者の真なる姿を覚醒させよ。

対象、ティアナ・ランスター。その身に眠る力を覚醒させよ！！！！！！」

聖騎士の書があるページを開き、眩い光の閃光を発する。

閃光はティアナを包み込み光の球体を形成する。

次になのはは端末を使用して幻想の騎士団の本部に該当する次元戦闘艦“エクシア”に通信を繋いだ。

『お久しぶりです、マスター。』

「久しぶり、エクシア。オリビエとリリスは居る？」

『はい。2人ともいらっしゃいます。今、変わります。』

画面が変わり、2人の少女が映し出される。

「オリビエ、リリス。ちょっと凄い者を見つけたよ。」

『凄い者？誰ですか？』

『もったいぶらず教えてよ。』

「大天使の転生者を見付けたんだ。」

『なっ！！！！！！』

なのはの報告に2人は絶句した。

幻想種が転生するのは珍しくないが、上位種の転生者となれば、話は別。

唯でさえ、死ぬ事がほとんどない上位種は転生しても器である人の身体が耐えきれない事が多いのだ。

「まだ子供だから、誰かに鍛えてもらいたいんだけど……2人とも、頼める？」

『別にいいよ。』

『私も』

「ありがとうね。もうすぐしたら帰るよ。」

そう言うとなのはは通信を切った。

「さて、あつちの方は……………」

光の球体の方に視線を戻すと球体には所々ひび割れている。

まるで産まれる前の卵のような状態である。

なのはが術を行使してから数分が経過した。

罅はだいぶ大きくなり、今にも割れそうである。

バリントッ！！

勢い良く殻が弾け飛び、中から白い三対六枚の天使の翼を生やした大天使となったティアナが現れた。

「じゃあ、行こうか。」

ティアナは頷き、なのはの後を追って行った。

時間は戻って現実世界。

「まあ、こんな感じね。」

「へえ、凄い出会い方だね。」

「懐かしい話をしてるみたいだけど、もうすぐ訓練が始まっちゃうよ？」

突然現れたのは、いつもと変わらない笑みを浮かべた高町 なのはだった。

「やばっ！早く食べなきゃ！！」

なのは指摘され、食べる速度を上げるスバル。

「ごちそうさま。先に行くわよ、スバル。」

一足先に食べ終わったティアナは食器を片付け始めた。

そこにはいつもと変わらない日常風景があった。

——願わくはこの平穏がいつまでも続くように……——

STS編 第18話 地下水道の戦闘（中編）

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第18話 地下水道の戦闘（後編）

クラナガンの廃棄都市区画の地下水道にてフォワード4人とアンノウンが戦闘を開始していた。

ティアナ・アギトは五機の新型ガジェットと1人の外套を纏った女性と。

フォワード3人+コーティカルテは突然現れたアンノウンの片割れと忍者のような姿をした蟲と。

それぞれ戦闘を開始した。

「はああああ、炎王斬!!」

アカツキの刃は炎の大太刀となり、ティアナはそれを振り回した。
しかし、新型ガジェットは素早く動いて避ける。

『クソッ！ 速い過ぎて当たらねえ!』

「鳥を模してるだけはあるわね。でも……………」

《ミラージュスフィア》

幻影魔法で隠されていたスフィアから光線のような砲撃が放たれる。

「不意打ちまでは避けられないでしょ!!」

所詮は知能を持たない機械鳥。不意打ちを避けれる筈が無い。ティアナとアギトはそう思った。

しかし……………

ひよい

「『なっ!』」

完全な不意打ちを完全に避けられてしまったのだ。

ガジェット達は口を広げ、砲撃を一斉に放つ。

「マズイ!!」

『逃げろ、姉貴!!』

バーンッ!! ゴウンッ!!

「やったの?」

ティアナの姿は砲撃で撒き上がった土煙で確認することができない。

「烈火旋風斬!!」

土煙の中から無数の炎の斬撃が360。全方向に放たれる。

「くっ!」

障壁を張って斬撃を防ぐ女性。

「やってくれましたね、メガーヌさん。」

「ッ!!」

女性の体がビクッ、と震える。

「……………よくわかったわね。」

フードの下から現れたのは先程別れたばかりのルーテシアによく似た女性「メガーヌ・アルビーノ、正真正銘ルーテシアの母親であった。

「無機物操作オクジェクトコントロール。あれだけ精密な制御ができるのは貴女だけですよ。」

『此処に居るのはなのはさんからの依頼ですか？』

「お褒めにあずかり光栄だわ。」

『クイントの独断行動に付き合わされているだけよ。』

普通の会話をしながら、器用に念話で話すティアナとメガーヌ。ティアナとメガーヌ、オリヴィエの3人は仲が良く、このメンバーで組む事も少なくはない。

「貴女も大変ですね。」

「わかってくれるのはオリヴィエと貴女だけよ。」

互いに独断行動をするパートナーを持つ者同士仲が良いようだ。

「メガーヌさん相手では本気を出すしかありませんね。」

『アギト、“あれ”を使うわよ。』

『了解だ！』

―“月読の魔眼”、発動！―

ティアナの右目に六芒星の紋章が浮かび上がる。

『ヴォルカニック！！』

「クロスファイア、シュート！！」

無数の炎弾がガジェットに襲い掛かる！！

メガーヌはガジェットをコントロールして回避するが、回避した地点に炎弾が襲い掛かる。

『ヴォルカニッククロスファイア』

アギトの能力『炎熱変換』をティアナのクロスファイアと組み合わせた魔法。

ユニゾン状態で2つのデバイスをフル活用すると数十個のスフィアを完璧に操る事ができる。

そして、『月読の魔眼』の能力―先読み―を使う事で相手を予知し、その地点に炎弾を放ったのだ。

「ほんの数秒で撃破されたら、気が滅入るわね。

でも、負けてばかりってというのは……嫌なのよ！―」

メガーヌの足元にミッド式でもベルカ式でもない、しかし見覚えの

ある紫色の召喚魔法陣が展開される。

「母なる大地を駆け巡る銀色の閃光、契約者の名の下にその姿を…
…顕出せよ！！
来なさい、セスナ・オルティガ！！」

—アオー—ンツ！！！！—

狭い地下水道に獐猛な肉食獣の咆哮が響き渡った。
召喚魔法陣から現れたのは体長3メートル程の狼だった。毛並みは美しい銀色で神々しささえ感じさせる。蒼い瞳は気高き獣の意思を感じさせる。

その姿はとても幻想的で目を奪われるようだった。

『おい、姉貴！！ あれって……………』

「ええ。“神獣セスナ・オルティガ”よ。」

『神獣セスナ・オルティガ』
古代ベルカの時代よりもさらに古い時代に存在したと言われている幻の存在。
多くの神獣達が「幻想郷」に移住する中、唯一その土地に残った狼の神獣の雌。

鋭い爪と牙はどんな敵も切り裂き、噛み砕き、蹂躪したと言われている。

しかし、個体数は極めて少なく、現在は手で数える程しか居ない。

ちなみに、雄の場合は“ゼクト・オルティガ”と呼ばれている。

『まさか本物に会えるとはな。文献でしか見たことねえぞ。』

「奇遇ね、アギト。私も実物に会うのは初めてだよ。」

「凄いでしょ？ ある神殿を搜索してた時に見つけたのよ。」

えへんっ、と胸を張るメガーヌ。

「さあ、戦闘再開よ！！セスナ！！」

――アオーンツ！！――

セスナ・オルティガは一鳴きするとその場が姿を消した。

「グッ！」

呻き声を漏らしたのはティアナだった。脇腹には爪で引っ掛かれた傷痕があった。

セスナ・オルティガは既にティアナの遙か後方に居た。

『アギト。見えた？』

『まったく見えねえ。文献に書いてあった通りだな。』

―その獣、いと疾きゆえ姿を見る事あたわず。

その獣、疾きこと限りなし。古人、その獣をセスナ・オルティガと呼びけり。―

それがアギトとティアナの読んだ文献に書かれていたセスナ・オルティガの一節である。

『私の魔眼でも追えないなんてね。規格外の速さよ。』

ザシュツッ!!

「グッ! ……今度は腕か。」

『姉貴、両目を開眼させれば良いんじゃないか?』

アギトはこの状況を打開する唯一であろう方法を提案する。

『……………そうね。あとはオリヴィエに任せるとしましょう。』

ティアナの左目にも右目と同じ紋章が浮かび上がる。
月読の魔眼を完全開放した証である。

ガキンッ!

気が付けば、目と鼻の先にいたセスナ・オルティガの爪をアカツキの刃で受け止める。

「残念だったわね!!」

「ガアッ――」

がら空きになったセスナ・オルティガの腹を力の限り蹴り上げる。

「セスナのスピードに反応した……」

メガーヌは驚きを隠せなかった。歴戦の勇士であるゼストすら目で追う事ができなかったスピードに目の前の少女が反応したのだ。

「大人しくしなさい!!!!!!」

《チェーンバインド》

地面から橙色の鎖が出てきてセスナ・オルティガを押さえ付ける。

「アギト!! 合わせなさい!!」

『おうよ!!!!』

ティアナがアカツキの銃身に魔力が集束されて行き、アギトが集束された魔力を片っ端から炎に変えて行く。

「食らいなさい、ティアナと!!」

『アギトの!!』

「『コンビネーション魔法!!』」

炎に変換された魔力はアカツキの銃身から生えるような剣を構成する。

「『はてしめいぶつ覇道滅封!!!!』」

アカツキから灼熱の炎の波動が放たれ、動けないセスナ・オルティガを呑み込んだ。

「やった……かな……」

ティアナの身体がふらつき、地面に前向きに倒れ込む。

「おっと。」

ユニゾンを解除し、アウトフレイムになったアギトがティアナを支える。

「……確認できねえな。」

アギトの視線の先は灼熱の炎が壁のように燃えていた。

「わりいな、姉貴。ちょっと……寝るわ。」

アギトの意識が暗転し、ティアナと一緒に倒れる。

「ぐるる〜。」

「帰るわよ。別に敵じゃないんだし。」

炎の中から出てきたのは、無傷のメガーヌとセスナ・オルティガだった。

セスナ・オルティガは吸血鬼には及ばないが、強靱な回復・再生能力を持っている。直撃を受けたが、その傷はもう治っている。

「行きましょ。クイントが心配だわ。」

「ガウツ。」

メガーヌとセスナ・オルティガはその場を去って行った。

ティアナとアギトは眠ってしまった。

ティアナとアギトが光に包まれるとアギトは通常のサイズに戻り、ティアナの身体は大天使となった十歳の身体まで退化してしまった。普段は隠している翼もその姿を露にしている。

「まったく……無茶しちゃって。」

「ティアナはがんばり屋だからね。」

ティアナとアギト付近の空間が歪み、なのはとリリスが出てくる。

なのはとリリスはティアナとメガーヌの戦闘をこっそり観戦していたのだ。

「それにしても……セスナ・オルティガが……初めて見たよ。」

「私も。神獣を従えるメガーヌさんも凄いですけどね。」

「だね。」

なのはとリリスの話し声だけが静寂な地下水道内に響いていた。

余談だが、クイントとフォワード三名は他の空間で戦闘しているため、互いに介入できなかった。

STS編 第18話 地下水道の戦闘（中編）（後書き）

メガー又さんを強くしてみました。

ティアナが敗北してしまいました。

あと、折角なのでタイトルを変更しました。

STS編 第18話 地下水道の戦い（後編）

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第18話 地下水道の戦闘（後編）

ティアナ・アギトチームがメガーン・ガジェットチームと戦闘を行っている頃、別空間（正確には、隔離空間）ではクイント・ガリユールチームがフォワードチームと戦闘を行っていた。

「うおおおおッ！」

「はああああッ！」

リボルバーナックル同士がぶつかり合い火花を散らす。
スバルは前回のように怒りに吞まれる事なく、冷静に戦っていた。

いや、なのはの恐怖が強すぎて忘れてしまったのかもしれないが
……

2人は一旦、距離を開けて、互いににらみ合う。

「リボルバー……シュートー!!」

リボルバーナックルから衝撃波が放たれる。

クイントは何も言わず、トライシールドを使ってスバルの魔法を防ぐ。

そして、魔法が爆発?してクイントの視界を奪う。

「おりゃあああッ!」

「!?!?!」

土煙の中からスバルがもうスピードで突進してくる。

「動きが単調過ぎるわよ。」

スバルのチャージ（突進）には驚いたもののすぐに冷静さを取り戻す。動きが直線的なので横に跳べば、簡単に避けられる。

クイントはそう思った。だが……

「うおおおッ!」

「!?!」

驚いた事に前向きだった身体を無理矢理、方向転換させてクイント

の頭に回し蹴りを放つ。

完全に不意を突かれた攻撃にクイントは為す術なく、スバルに吹っ飛ばされた。

「やった……かな？」

《油断大敵です、相棒。敵の魔力反応は消えていません。》

「その通りよ。」

「……！」

スバルに吹っ飛ばされ、壁に激突したクイントは何事も無かったかのように戻って来る。しかし、スバルがそれ以上に驚いていた。

「お……かあ……さん？」

スバルの回し蹴りによって破れてしまったフードから露になった顔はスバルの母―クイント・ナカジマそのものだった。

対するクイントはきょとん、とした表情を浮かべた。

「今頃気付いたの？リボルバーナックルを付けてたからすぐに気付くと思っただけど？」

「あつ、そう言えばそうだ……！！！」

クイントに指摘されてようやく気付いたスバル。

クイントは前回と違い変声機を付けない。今回は最初からスバルに姿を現すつもりだったからだ。

「何でお母さんがレリックを集めてるの？」

「うーん……言っても良いんだけど……まだ時期じゃないからね。だから……」

クイントは構える。

「私を倒せたら教えてあげるわ。」

その言葉を皮切りにスバルとクイントは再び戦闘を開始した。

クイントとスバルが一对一で戦っている時、キャロとエリオ（+フリード）のライトニング分隊フォワードチームはメガーヌの召喚獣ガリユーの相手をしていた。

「フリード……」

「ベビーフレイム!!」

ブラストフレアより威力の高いベビーフレイムがガリューに放たれる。

ちなみに、フリードは竜形態でも話せるようになっている。

しかし、スピードの速いガリューには中々当たらない。

「メッサーアングリフ!!」

刀身に電気を纏わせたストラダで切りかかるエリオ。

「……………!!」

しかし、ガリューの頑丈な爪によって防がれてしまう。

だが、そのおかげで素早いスピードが一時的にだが、発揮できなくなってしまった。キャロにとってはその一瞬の隙で充分だった。

「この一撃に……………」

『すべてを掛ける!!』

ガリューとキャロの距離を一瞬にして詰める。

「着いて来れる?」

刹那の間に無数の魔力剣を生成し、ガリューの身体を切り刻む。

『着いて来れまい!!』

ブリューナクが雷を纏い、ガリューを斬りつける。

「顕現せよ!!」

『悪魔が携えし、悪魔の槍!!』

キャラの片手にキャラの身の丈を超える長い闇色の槍――『デモンズランス』――が顕現する。

デモンズランスでガリューを斬り上げる。
それを追うようにしてキャラも跳躍する。

「これで……」

『終わりです!!』

そして、ブリューナクでガリューを地面に叩きつける。

「『魔神浄破煉獄殺!!!!』」

仕上げにデモンズランスをガリューに投擲してキャラの秘奥義は終了した。

『魔神浄破煉獄殺』

キャラとコーティカルテがユニゾンした時のみ使える秘奥義。
刹那の隙に初撃を叩き込み、怒涛のコンボを繋げる。

そして、闇属性最強魔法『デモンズランス』を投擲して終わる。

威力は一発一発が低いが、ヒット数があり得なく、最後のデモンズ

ランスはなのはの『スターライトブレイカー』以上の威力を発揮する。

当然、欠点があるわけでこの秘奥義を使うと魔力・マナがすっからかんになり、戦闘に参加できなくなる。

まさに、諸刃の剣である。

今回は、ガリユーが『魔神浄破煉獄殺』の一撃で沈んでくれた。意識を失ったガリユーはその場から消滅した。

おそらく、召喚主の所に帰って行ったのだろう。

「あっ……………」

「おっと。」

変身魔法・ユニゾンが解除され、通常の姿に戻ったキャラは疲労のため、倒れそうになるが、人間形態になったフリードに支えられる。

「あり……がとうね。」

「お疲れ様。ゆっくりお休み、キャラ。」

「うん。」

「フリード!!キャラは?」

「眠ってるだけだよ。」

キャロから穏やかな寝息が聞こえて来る。

一方、戦いに参加していないオリヴィエは隔離空間の端に居た。

（早く終わらないかな。私はヴィヴィオの所に行きたいんだけど。）

すでにライトニング分隊フォワードチームの方は戦闘が終了しており、未だに決着がつかないスバルを待っている状況である。

「そうは思わない？ルシエル。」

《見捨てたら、さすがに奥方に怒られますよ？》

オリヴィエは腕に付けている相棒に声を掛ける。

「怒られるのは嫌だな。母さん、結構怖いし。でも……同じくらい優しい。」

《そうですね。》

その時だった。

オリヴィエが展開した隔離空間に誰かが侵入してきたのだ。

「オリヴィエ。」

噂をすれば影とやらはまさにこの事である。侵入して来たのは、ティアナを背負ったのはとアギトを抱えたリスであった。

「お帰り。………？ティアナが小さくなってるけど、どうしたの？」

「月読の魔眼を両目に開眼させたみたい。」

ティアナが言っていた反動とは身体が縮む事である。

片目を開眼させるぐらいなら、何ともないのだが、両目を開眼させると反動が生じるのだ。

「わざわざアヴァロンで隔離空間を作る必要があったの？」

「イレギュラーが入って来たら面倒だもん。それに母さんにはこの隔離空間は意味ないでしょ？」

「まあ…ね。」

なのは達が現在居る空間はオリヴィエの体内に存在する宝具―すべて遠き理想郷―の能力で張られたものだ。

アヴァロンは絶対不可侵領域を展開する事が可能で何人たりとも侵入する事は不可能なのだ。

しかし、唯一の例外が存在する。それはアヴァロンの半身―聖剣エクスカリバーを所有する者である。本来、アヴァロンはエクスカリバーの鞘である。その鞘が主を拒む事があるうか。いや、ある筈がない。

「さてと……戦闘を強制終了させますか。」

「オーバーキルだね！！下手したら塵すら残らないよね！！」

スバルとクイントの戦闘を強制終了させる為になのはが取り出した宝具を見て、慌てるリリス。

なのはが選んだ宝具は……

「大丈夫だよ」

「エクスカリバー 約束された勝利の剣”！！！！！！”」

にこやかな表情のまま、選んだ宝具―聖剣エクスカリバーの真名を開放した。

「ぎゃあああああ！！！！！！！！！！」

2人の叫び声が隔離空間の中に木霊した。

（（これは死んだね。））

その様子を見たオリヴィエとリリスはそう思わずには居られなかった。

結果から言えば……スバルとクイントの2人は生きていた。虫の息だったが。

気絶したクイントはメガーヌが召喚した神獣セスナ・オルティガに寄せられ帰って行った。

同じように気絶したスバルは竜形態になったリリスに寄せられて隊社に戻った。
オリヴィエ以外はスバルと一緒にリリスの背に乗って隊社に戻って行った。

STS編 第18話 地下水道の戦い（後編）（後書き）

キャラに秘奥義を使わしたいという理由で書きました。

正直、反動が無くてもいいような気がしたんですが、ほいほいと使うには強力すぎると思ったので、制限をつけました。

STS編 第19話 説明

魔法少女リリカルなのは

～ 幻想の交響曲～

STS編 第18話 説明

地下水道での戦闘から一夜明けた次の日。

ティアナは戦闘に参加できないものの意識は取り戻し、キャロも本調子ではないが、意識を取り戻した。

そして、休暇を終えたなのは達はいつも通り部屋でゴロゴロしていた。（オリヴィエ・リリス・なのはの3人は同じ部屋。）

「暇だね〜。」

「仕方ないでしょ。なのはさんが“エクスカリバー”をぶっぱなし

「ただから。」

「にははは。」

リリスの言葉に苦笑いするしかないのは。

普段なら行っている教導は今日はお休み。理由はフォワードでまともにも動けるのが、エリオしかない。

なのは最強の攻撃『エクスカリバー』の真名開放の直撃を受けたスバルは意識を取り戻したが、本調子ではない。

本来、全力のエクスカリバー真名開放を受けたら、まず生きている確率は皆無である。

宝具の真名開放には非殺傷設定なんて便利な物は付いていない。なのにスバルが生きてるのは、可能な限り威力を軽減したからである。にも関わらず、ベテランの魔導師を一撃で昏睡させる威力はある。まったくもって恐ろしいものである。

「オリヴィエは大丈夫？」

「うん。アヴァロンを使ったけど、そんなに負担にはなかったし。」

「そっか。」

コンッ、コンッ、コンッ

3人の部屋におしとやかなノック音が響く。

「なのは。居るか？」

「ヴィータちゃん？どうしたの？」

なのは達の部屋に入って来たのは、険しい表情のヴィータだった。

「なのは。……お前の秘密って何だ？」

ヴィータは単刀直入に訊ねた。

ヴィータの言葉に穏やかだったなのはの表情も険しいものになる。なのはだけでなく、リリスとオリヴィエも同じ表情をしている。

「……………10分後、聞きたがっている人を広間に集めて。そこで話すよ。」

「わかった。」

ヴィータは淡泊な返事を返すと退室して行った。

「話す時が……来たみたいだね。」

「母さん。たとえば、世界の人々が母さんを拒絶しても私達は受け入れるよ。」

「私もだよ。」

「……………ありがとう。」

なのは2人の優しさに静かに感謝した。

（10分後）

約束の10分が過ぎた。

広間にはヴォルケンリッター、エリオ、スバル、フェイト、キャロ、
ラインフォース・ツヴァイ、リネイヤが居た。

「オリヴィエ。」

「うん。」

なのはアイコンタクトだけでオリヴィエに遮音結界を張るように
命ずる。

結界が張られた事を確認したのは達はソファーに腰掛ける。

「じゃあ、何から話そうか？」

「お前が行方不明になった頃から。」

「わかったよ。」

なのはは静かに語り出した。

「事の始まりは八年前のあの日だった。

窮地に追い込まれた私は天界と呼ばれる不思議な場所に転移して行った。

そこで私はリネイヤと契約してある魔導書を手に入れた。」

なのはは一旦、言葉を切った。

「古代ベルカの時代に最強と呼ばれた魔導書“聖騎士の書”と“黒騎士の書”に。」

「“聖騎士の書”と“黒騎士の書”！！」

二冊の魔導書の名前を聞いたフェイトは思わず立ち上がった。

「テストロッサ、知ってるのか？」

「知ってる筈だよ。」

なのはの持つ魔導書はS級ロストログニアである。

その力は管理局を滅ぼす事など容易いほどである。

古代ベルカの戦乱期の前期にアルハザードの技術を取り入れた魔導

書で主は宝具を駆使して戦場を駆け抜けた。

「だけど、代償として私はある物を失った。
ねえ、フェイトちゃん。“紅の鮮血姫”って知ってる？」

「うん、知ってるよ。」

『紅の鮮血姫』

管理局を脅かす吸血鬼で性格は冷酷非道。殺した人数は数知れず、
管理局の研究所を殲滅した際に身体が血で染まったからそんな名前
がついたらしい。
容姿は銀髪紅眼らしい。

「管理局が躍起になって探している広域次元犯罪者。それが“紅の
鮮血姫”だよ。」

「いくつもの研究所を殲滅した記憶はあるけど……冷酷非道ってい
うのは酷いな。」

にやははは。と苦笑いするなのは。

「まさか……………」

「フェイトちゃんの思ってる通りだよ。
幻想の騎士団創業者、次元犯罪者“紅の鮮血姫”は……私、高町
なのはだよ。」

広間に居た全員（幻想の騎士団関係者を除く）に雷に打たれたよう

な衝撃が走った。

「なのはが……次元犯罪者……？」

「管理局の違法研究所を壊滅させてたら、いつの間にか指名手配されてたんだよ。」

最初は違法研究所の研究員だけを殺した。
指名手配した後は…管理局の魔導師も殺した。

そんな事をしてる内に殺す事をためらわなくなった。

私の両手は……もう血で汚れているんだ。」

なのはの独白のような語りを聞いた傍聴者は何も言えなくなった。

「吸血鬼の上位種、真祖は吸血衝動が少ない。だけど、たまに襲ってくる吸血衝動に吞まれたのが、この前。」

「なあ、潰した研究所は何をしてたんだ？」

ヴィータは絞り出すように呟いた。

「……………簡単に言えば、人体実験だよ。それもかなり非人道的だね。」

広間を再び静寂が支配した。

「私達はそんな研究所を潰して行った。そして、研究員を皆殺しにした。」

なのはの真実に息を呑むヴィータ達。

「私は……いや、私達は管理局を潰す。徹底的にね。

多分、凄い被害が出ると思う。いや、間違いなく被害が出る。無関係な人にもね。

嫌ってくれて構わないよ。私は冷酷非道な吸血鬼だから。

でも、私は……いや、私達は止まらないから。」

それだけを言い残すとなのはは、オリヴィエ・リリス・リネイヤの3人を連れて何処かに転移して行っただ。

「ずいぶん、湿っぽい雰囲気ね。」

なのはと入れ替わるように広間にアリサが現れる。

「……………あんた達が止めようとしても無駄よ。あの子は止まらない。絶対にね。」

沈み込んだヴォルケンリッター・スバル・エリオ・ツヴァイに冷たく言い放つアリサ。

「なんで……………なんで止めねえんだよ?!」

憤慨したヴィータがアリサに掴み掛かる。

「あんた達に……………あんた達に何がわかるてんのよ!!」(怒)

逆に怒るアリサ。

「なのははね！！たくさんの被験者の成れの果てを見て来たのよ！！
あの子が殺した死体の数よりもずっと多いね！！」

幻想の騎士団は三提督の依頼などで研究所を潰す事が良くある。

しかし、救えたのはほんの一握りの子供たちだけなのだ。

「なのはは力を持っても普通の女の子なのよ！！
みんなの前では強がった姿を見せてるけどね、なのはの心はもうぼろぼろなのよ！！」

アリサは感情を爆発させて怒るように吐き出した。

なのはの心はもうぼろぼろというのは幻想の騎士団の全員が知っている。少しの衝撃で精神崩壊を起こすぐらいに。

そんななのはを支えているのが、オリヴィエやリスといった幻想の騎士団員である。

「……………」

アリサの言葉を聞いてヴィータは手を離れた。

「……………もうすぐ運命の日がやって来る。それまでにどちらに就くか決めなさい。
敵になったとしても私達は手加減しないわ。」

アリサはそう言い残すと早足でその場から立ち去った。

孤児院ラストリアの一室になのは達は転移して来た。

「なのはママ。どうしたの？」

壁にもたれ掛かって俯いているなのはに声を掛けたのは、オリヴィエと瓜二つの少女―ヴィヴィオである。

「ん？ ちょっと言い過ぎちゃったかなって。」

「？」

なのはの言っている事が理解できないヴィヴィオは小動物のように首を傾げた。

「でも、覚悟のないまま来られても此方が困るし。」

「うん。まあそうなんだけどね。」

ナデナデ

「ヴィヴィオ、何してるの？」

「なのはママが悲しそうだったから、ナデナデしたのー!!」

肉体年齢相応の無邪気な笑みを浮かべるヴィヴィオ。

「ナデナデしたら元気が出るから。」

「……ふふ。ありがとう、ヴィヴィオ。おかげで元気が出たよ。」

「うん」

コンッ、コンッ

「なのはさん、居ますか？」

「ルーテシア？入って良いよ。」

木製の扉からルーテシアが入って来る。

「聖王教会から呼び出し。オリヴィエを連れてカリムの執務室まで来て欲しいって。」

「わかった。すぐに行くよ。」

要件を言い終わるとルーテシアは静かに退室して行った。

「私を呼び出すって事は……予言関係かな？」

「多分ね。ヴィヴィオは……どうする？」

「一緒に行く」

「そうだろうと思った。」

なのは達はラストリアからリネイヤが運転する車に乗って聖王教会に向かった。

S T S 編 第19話 説明（後書き）

今回の話はかなり難産でした。なのはの性格が冷酷になっていますが、演技です。そもそものは優しい性格ですから。

もうしばらく此方の小説に集中しようと思います。

『新たな冥府の炎王』の方はもうしばらく更新を止める事になりそうです。

STS編 第20話 予言（前書き）

鬱だ…………。

急いで書いたからってグダグダすぎる。

誰か…………頼むから私に文才をください。

STS編 第20話 予言

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第20編 予言

ルーテシア経由で聖王教会に呼び出されたなのは達はリネイアの運転するオープンカーで聖王教会に向かっていた。

「わっ、速い速いっ」

「ヴィヴィオ、乗り出したら駄目だよ。」

身を乗り出しているヴィヴィオを優しく自分の膝の上に座らせるなのは。

なのはの姿は11歳の姿から19歳の姿に変わっている。
眼は血の色のままだが……

ちなみに、ヴィヴィオは１１歳の姿のなのはも『なのはママ』と呼んでいる。

「そうやってると本当に母親だな、なのは。」

「一応、母親のつもりなんだけど？ リネイヤ。」

「ふっ、そうだったな。」

なのはとリネイヤがたわいない会話をしている間に一行は聖王教会に到着した。

「あつ、やっと来たな。」

入った途端、声を掛けて来たのは一足先に到着した八神はやてだった。

なのは達が案内されたのは、最早見慣れた執務室だった。その執務室の円形のテーブルを囲むように３人が座っていた。

カリムに促され、なのは達も着席する。

リネイヤは最近、滅多に見なくなった小人状態でなのは肩に。
ヴィヴィオはさっきと同じようになのはの膝の上に。

オリヴィエとリリスはなのはを挟むようにそれぞれ着席した。

「はやてちゃん。みんなの様子どうだった？」

「流石に堪えたみたいや。予め事情を知ってた子はそうでもないねんけどな。」

「そう……………」

「ごほん。そろそろ本題に入りたいんだが、構わないか？」

クロノは咳払いして注目を促す。

クロノ・ハラウンも幻想の騎士団の協力者である。

「今回、呼んだのはわかってると思うが……………予言についてだ。」

クロノはそう前置きをすると隣に座るカリムにアイコンタクトを送った。

カリムが差し出したのは、一枚の紙であった。

「新しく表示された予言を写したものです。」

なのは達の言う『予言』とは、カリムの希少能力『プロフェータ・シユリフティ』に表示された物を指す。

「え」と…

『古の結晶、無限の欲望、数多の幻想が集い交わる時、闇に堕ちた法を肅清する者たち現れん。』

彼の者、死せる王の船を呼び覚まさん。
人々に否定されし闇は醜き姿を晒さん。』

って表示されてるけど……」

「計画が成功するのか、失敗するのかわからんな。」

「やね。」

「絶対に成功させるよ。」

誰が邪魔をしようとも倒して成功させる。」

そう言うなのはの表情はすでに決意を固めている証を示すようであった。

「なのはさん……いえ、なのは・Ｔ・グレイセス。」

カリムはなのはをもう１つの名前で呼んだ。

なのはは幻想の騎士団の総隊長であると同時に聖王教会に所属する騎士である。

聖王教会では、『なのは・Ｔ・グレイセス』と名乗っており、騎士たちの憧れの的である。

「計画が成功した時の契約は覚えていますね？」

「もちろんです。」

カリムが幻想の騎士団と協力関係を築く際、ある契約が交わされた。

その契約内容は、要約すると『計画が成功した場合、聖王家再興に尽力する。』という物である。

聖王教会からすれば、なのは達は喉から手がでる程欲しい人物なのだ。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの記憶を受け継いだオリヴィエ・グレイセス

古代ベルカの最強の遺産を受け継いだのは・T・グレイセス。

オリヴィエ・グレイセスの妹に当たるヴィヴィオ・グレイセス。

このメンバーを見て欲しいがらない人が居ようか。いや、きっと居ない。

聖王教会は最高の戦力と権力者を手に入れようとしているのだ。

閑話休題

「なら、構いません。今日はこれで解散です。」

カリムの言葉で本日の会合は終了した。

S T S 編 第21話 姉妹（前書き）

ああ、鬱だ。

STS編 第21話 姉妹

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第21話 姉妹

予言に関する会合の翌日。

あの後も予言の解読をカリムは続けた。カリムの予言は詩文形式で書かれているため、翻訳しても意味を考えないといけないのだ。

最も今回は比較的簡単らしいが……

さて、先日的一件である変化が起こった。

フェイト達がなのはを避けるようになったのだ。

なのはの姿を視認するとそそくさ、と立ち去ってしまうのだ。

そして、機動六課に2人の女性が出向して来た。

「陸士108部隊から来ましたギンガ・ナカジマ陸曹です。」

「本局技術者のマリエル・アテンザです」

はやてが根回ししたギンガとマリエルが六課にやって来た。

自己紹介が終わるとギンガにスバルが話し掛けた。

「ギン姉ギン姉！！実は、お母さんがね！生きてたの！」

「知ってるわよ？」

驚きのニュースを持って来た筈のスバルが逆に驚かせ、固まった。

「えええええっ！！」

「バカスバル、うつさい！！」

ゴンッ！！

正気に戻ったスバルは驚きの声を上げるが、ある程度回復したティアナの拳骨によって強制的に終了させられる。

「うっ、痛いよーティアー。」

「あんたが大きな声を出すからでしょ！」

「まあまあ、2人共落ち着いて。」

「それにしてもギンガさんは何処でクイントさんが生きてる事を？」

「半年ぐらい前に任務で鉢合わせてね。無理矢理問い質したわ。」

「じゃあ、ギン姉はお母さんの事情を知ってるの？」

期待を孕んだ瞳でギンガを見るスバル。

「知ってるけど……教えないよ？ 私に勝てるなら別だけど。」

「今ならギン姉ぐらい倒せるよ……！」

ピシッ……！

明るい雰囲気が一瞬にして絶対零度の極寒の空間に変貌した。

「スバル……ずいぶんと生意気な事を言うようになったわね。」

「えっと………」

ギンガから発せられる黒いオーラに思わず後退るスバル。

妹に甘いといってもギンガにも姉としてのプライドがある。スバ

ルの一言はそのプライドに火を着けてしまった。

「なのはさん〜。ちょっと訓練スペース借りますね。」

「別に良いよ。」

フィールドを森林に設定した訓練スペースの貸し出しを快く了承するなのは。

『ティア〜、助けてー!!!』

ティアナに念話で助けを求めるが……

『自業自得よ。』

『そんな〜』

パートナーにあっさりと見捨てられたスバルだった。

「さあ…逝くわよ!!!!!!」

「字が違つよー、ギンねえー!!!!!!」

スバルはギンガに引き摺られて訓練スペースに連行された。

ギンガに連行されたスバルは開けた森林の中でギンガと対峙していた。

スバルは白を基調としたバリアジャケットを纏い、ギンガの方は対称的に黒を基調としたバリアジャケットを纏っている。

「言つとくけど手加減はしないよ?」

「手加減して欲しいけど……………」

「はっ!」

スバルに対する返答は先制攻撃となって襲って来た。

「うそっ!」

先制攻撃を仕掛けたのは、ギンガだった。

スバルが驚いたのは、結構な距離が開いていた筈なのに一瞬でスバルの懐に入ったからだ。

「ふっ!」

《プロテクション》

反応できないスバルの代わりにマツハキヤリバーがオートプロテク

ションを展開する。

「甘い!!」

「がはっ!!」

しかし、ギンガの攻撃は障壁を通り抜けてスバルの腹部にめり込んだ。

「まだまだ!!」

今度は白いリボルダーナックルで殴ろうとする。

「ぐっ!!」

《プロテクション》

「バリア……ブレイク!!」

スバルの障壁はギンガの障壁破壊魔法『バリアブレイク』によって粉々に碎け散った。

「相棒!!」

《ウイングロード!!》

障壁が破壊された瞬間、ギンガのリボルダーナックルが当たる刹那の隙に空へ逃げた。

「ブリッツキャリバー、ローラーを収納後、ウイングブーツを展開。

「

《イエッサー!!》

ギンガのローラーシューズの代わりにギンガの足には黒いロングブーツが装着された。

ギンガはウイングロードを発動せずに空を“駆けて”行った。

「うそっ!」

「成長してるのは、貴女だけじゃないのよ!!」

ウイングロードを使って逃げるスバルと空を“駆ける”ギンガ。姉妹による空中鬼ごっこが開始された。

「オリヴィエとリリスだね。」

「ですね。使う技がオリヴィエとリリスの2人と同じです。」

ギンガが使っているのは、魔法ではなく、技術。

ギンガが使用した魔法は『バリアブレイク』と『ウイングブーツ』の2つだけ。

高速移動はリリスやオリヴィエが使う『瞬動』と『虚空瞬動』を使用しているのをなのはには見てとれた。

「オリヴィエとリリスは暇な時に何処かに出掛けていましたねえ。」

なのはの肩に座るセフィリアは思い出すように呟いた。

「そう言えば、そうだったね。あっ、ギンガが追い付いた。」

「はあはあ……ようやく追い付いたわ。」

「ぜえ……ぜえ……ギン姉……速すぎ……。」

スバルはとうとうギンガに追い付かれてしまった。

「カートリッジロードー!!」

スバルのリボルダーナックルがカートリッジをロードして魔力を高

める。

「リボルダー……」

「遅い!!」

スバルは攻撃に転じようとした。しかし、それが致命的な隙になってしまった。

シューティングアーツは刹那の隙に必殺の一撃を入れる武術である。スバルの魔法は発動に少しの間だけ隙ができる。つまり、スバルは自分から隙を作ったのだ。

「獅子旋孔!!」

瞬動によって距離を詰めたギンガは獅子を型どった闘気をスバルに叩き込んだ。

「がはっ!!」

肺の中の酸素がすべて吐き出される。

しかし、ギンガの攻撃はそれでは終わらなかった。

「三日月旋!!」

ギンガはスバルの脳天めがけて、三日月を描くように踵落としを喰らわせた。

そして、スバルは地面に叩きつけられた。

数分するとスバルとギンガが戻って来た。

ギンガのバリアジャケットには埃一つ付いていないが、スバルのバリアジャケットは土まみれになっていた。

「さてと……教導はフェイトちゃんとヴィータちゃんに任せてつと。ギンガ、ちょっと……」

「何でしょうか？」

「ギンガってオリヴィエと知り合い？」

「あ、はい。五年前のある日に……」

しかし、ギンガの言葉に違和感を覚えたのはは記憶を漁り始めた。

そして、ある事件に引っ掛かった。それはオリヴィエ・リリスらが関わった事件だ。

「もしかして……ギンガ、暴走状態の私に会った事ある？」

「…………はい。」

（やっぱりか。）

今からちょうど五年前、偶々ミッドチルダに降りて来た時になのは吸血衝動に吞まれてしまい、暴走状態に陥った事があるのだ。

「まさか、オリヴィエとリリスの技を使えるとは思わなかったです。」

「あのお二人に色々鍛えて貰いましたから。」

教導の間ギンガ・なのは・セフィリアは話し込んでいた。

ギンガは『氣』と呼ばれる肉体的エネルギーを利用している。瞬間・虚空瞬動はリリスが発明した技術である。

ギンガはオリヴィエ寄りの戦闘スタイルになっているみたいだ。

オリヴィエが使う『ジエネシクアーツ』は氣を自由に扱えるのが絶対条件なのだ。

ギンガは『ジエネシクアーツ』と『シューティングアーツ』を混ぜた武術を使っているのが現状である。

機動六課に新たな戦力が加わった。

運命の日まで後少し。

STS編 第21話 姉妹（後書き）

1日で書き上げた結果がこれ。

ギンガとスバルを闘わしたかっただけです。はい。

もう少しで完結なので先に完結させてから『冥府の炎王』の更新を再開します。

S T S 編 第21話 戦争開始の合図（前書き）

グダグダです。

いつもに増してグダグダです。

色々、省略しました。

STS編 第21話 戦争開始の合図

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第22話 戦争開始の合図

時空管理局のお偉いさんが一同に集まる公開意見陳述会。それは、幻想の騎士団が戦争を開始する日に行われる。

つまり、公開意見陳述会が開催される日が幻想の騎士団と時空管理局の全面戦争が始まる時なのだ。

そして、公開意見陳述会が開始された日、機動六課も防衛任務に駆り出された。

公開意見陳述会は今すぐ終了する時間になっていた。

「中の方はもうすぐ終わりね。」

「はい。」

「もうすぐ開幕だな。」

「ええ。私達が平穩を手にするために。」

時空管理局の地上本部入り口の前でキャロ・ティアナ・アギトの3人は防衛任務についていた。

キャロは幻想の騎士団に就く事に決めたため、この日に戦争が起くる事を知っている。

地上本部にはなのは（此处ではフィーネ）とフェイト、はやてにカリムが居る。

「！！！！ 遠隔召喚の気配がします！！」

キャロがメガーンの遠隔召喚魔法の反応を感知した。

「アギト!!」「おう!!」

「ユニゾン・イン!!」

ティアナとアギトが融合して、瞳の色と髪の色が変わる。

「さあ、存在の存続を掛けた戦争の開始よ!!」

「始まったようじゃな。」

「はい。」

「すまん。お主にこんな事を頼んで。」

「構いませんよ、キール元帥。」

なのはは三提督の護衛に着いていた。
そして、なのはも戦争開始の合図を感じ取った。

『残念だが、貴様達の思い通りには行かない。』

『我らの僕たちよ！！我々に楯突く愚か者を皆殺しにせよ！！』

―イエス。マイ ロード―

はやて・カリム・シャツハを除く会場に居た全員がデバイスをかまえる。

そして、なのは達は気付いた。

最高評議会の罠に嵌められたのだ……と。

それと同時に地上本部の非常シャッターが閉められた。

「閉じ込められた……」

「なのはちゃん！！」

「はやてちゃん！！」

はやてがカリムとシャツハを連れてなのはの下にやって来る。

「どうする？この状況。」

会場に居た人間はデバイスを構えてはやて達を狙っている。

『残念だったな。そなたらの計画はすべてお見通しだ。』

『さあ、我らの正義のために死にさらすが良い！！』

下僕たちは一斉に襲い掛かって来た。

「言っとくけど……覚悟はできてるだろうね？」

なのはの右手にはいつの間にか血のような西洋剣が握られていた。

「すべてを焼き尽くす裏切りの魔剣――レーヴァテイン――！！！！」

なのはが魔剣レーヴァテインの真名を開放した瞬間、会場は業火の焰に包まれた。

下僕達の断末魔が響くが、なのははまったく気にしない。

「ごめん、はやてちゃん。後は頼んだよ。」

「任しとき。」

なのはは三提督らをはやてに任せると走り出した。
親友を守るために。

「大人しくしてくだされば、すぐに楽にしてあげますよ。」

「誰が!!」

フェイトは命の危機に晒されていた。デバイスはなく、戦術を持たないフェイト。

周りは最高評議会の下僕ばかりの無援状態。

「では、苦しんで死んでください!!」

名前も知らない下僕がフェイトに鋭利な剣を振りかざした。

ザシュッ!

鮮血が辺りに飛び散る。

しかし、フェイトには傷1つ無い。

フェイトの瞳に映ったのは、右手にレーヴァティンを握りしめ、左腕を失った親友、高町 なのはの姿だった。

「すべてを焼き尽くす裏切りの魔剣!!!!!!」
レーヴァティン

「ギャアアアアッ!!」

通路に居た下僕は全員レーヴァティンの煉獄の焰に焼き尽くされた。

「大丈夫? フェイトちゃん。」

「なのは！！左腕が……」

「大丈夫だよ、この程度。」

なのはの能力の1つ『超高速再生』が発動し、左腕をすぐに再生させる。

「レイジングハート。地上本部に生体反応は？」

《味方の生体反応なし。全員脱出したようです。》

「わかった。味方全員に地上本部から離れるように伝達を。」

《オーライ》

「なのは……一体何を？」

座り込んだままのフェイトは怯えるような瞳でなのはを見上げる。

「地上本部を……下僕ごと破壊する。」

レーヴァテインが収納させ、黒騎士の魔導書が顕現する。

黒騎士の魔導書がページを捲っていき、あるページで止まる。

《味方全員の退避を確認しました。いつでも行けます。》

「うん。開け、時空の扉。」

なのはが呪文を紡ぎ出した。

地上本部から退避した関係者は地上本部の本部の上空を見て、啞然とした。

上空の時空が歪み、その歪みから巨大な剣が出現した。

―我が名の下に……降り下ろせ、永劫の剣―

その場に全員に澄み渡るような声で紡がれる呪文が聞こえて来る。

―エターナルソード！―

巨大な剣が地上本部に突き刺さり、地上本部を呑み込む光の柱が立ち上った。

『エターナルソード』

なのはが使える最強広域殲滅魔法。

対象物を完璧に消滅する魔法で使用後は必ず昏睡状態に陥る。

「やつほ。」

地上本部が完全に消滅した瞬間、フェイトとなのはが転移魔法で現れた。

「やり過ぎや。」

「ごめん。」

「呆気なく終わったわね。」

「はい。」

全員が呆気なく終わったと判断したその時だった。

「残念だったな。」

地上本部が存在した地点から巨大な黒い鎧の兵器が現れた。

「まだ生き……て……たんだ……」

――なのは（ちゃん）！！！！――

なのはが急に倒れてしまったのだ。

戦争は始まったばかり。

STS編 集結する同志たち

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

STS編 第23話 集結する同志たち

地上本部を消滅させた後、みんなは天界に一時帰還した。被害は軽微に思えたが、ヴィータは重症を負ってしまった。

リインを庇って下僕の殺傷設定魔法の集中砲火を浴びたらしい。

そして、スカリエッティ一味などの反管理局派も集結して戦争準備を整えていた。スカリエッティがフェイトに邂逅した時、一悶着があったが、はやての説得でなんとかなった。

「さて、最高評議会が持ち出した“アレ”は、一体何だ？」

「無限書庫に該当するデータが有ったわ。」

此処は天界にある大会議室。リンディ・クロノ・ジェイル・はやて・ゲンヤ・クイントの6人が今後の対策を練っていた。

「古代ベルカの時代に何代目かの聖王が滅ぼした古代兵器。名前は“破壊神の鎧”」

「よくそんな物騒なもんが残ってたもんだ。」

かなり早い段階からの協力者であるゲンヤ・ナカジマが呟く。

「じゃあ、此方も“ゆりかご”と“方舟”を使わなあかな？」

「ああ。既に整備は完了した。ゆりかごに関しては既に起動させて軌道上に居るよ。」

『聖王のゆりかご』

かつてオリヴィエ聖王陛下が最後に使ったロストログアでアルハザードからの流出物。

2つの月の魔力が受けられる衛星軌道上に居れば、無敵とされる兵器。

スカリエッティ一味が先の一件に参加しなかったのは、オリヴィエと共に聖王のゆりかごを衛星軌道上に上げていたためである。

「となると……周りに被害が出ないようにするしかないな。」

『それに関して問題ありません。』

「リネイヤ？」

会議に割り込んでくるリネイヤ。

『なのはと月村が見越して“幻想郷”で制作していた兵器があります。』

「まさか……“アレ”が完成したのか!？」

『はい。』

リネイヤやジェイルの言うアレとはすずかやジェイルが考案した結界のシステムを応用した兵器である。

ちなみに、『幻想郷』とは人間界より遥かに高い技術力を有する世界で幻想種たちが集う世界でもある。

なのは達からすれば、幻想郷は第二の故郷である。

「市街地での戦闘は問題なさそうだ。あと、彼女が目覚めるまで待つだけだ。」

ジェイルの言葉に会議室に居る全員が頷いた。

天界のなのはの自室では、セフィリア・リリス・リネイヤが見守られながら、なのはが眠っていた。

『エターナルソード』の反動と宝具の真名開放の反動の影響らしい。

「まったく……また無茶しちゃって。」

「この戦争が終わったら、しばらくは無茶する事もなくなる筈だ。」

「ですね。」

扉が開き、誰かが入って来た。

「リネイヤさん、ちょっと頼みがあります。」

扉から入って来たのは、通常サイズのリインフォース・ツヴァイだった。

「なんだ？」

「私に……魔眼をください!!!!!!」

ガシッ!!

「さて、リイン。お前、何処でそれを知った？」

リネイヤはリインの頭をわしづかんでギシギシと締め付ける。

人工的に『魔眼』を持たせる技術は幻想の騎士団の機密に値する情報なのだ。

「痛い!! 痛い!! 痛い!! 頭が割れるです!!」

「なら、とつと吐け!!」

「ティ、ティアナに教えて貰いましたです!!」

正直に話したので、鷲掴みにしていた頭を離す。そして、リネイヤは、はあゝと溜め息を吐いた。

「また、あいつか……」

「変わらないね。」

「まあ、ティアナだからね。」

「？」

3人の言っている意味がわからないリインは首を傾げる。

「まあ、良いだろう。着いてこい。」

「ありがとうございます!!」

リネイヤはリインを連れて部屋から出て行った。

「リイン……魔眼を刻むのがかなり痛いって知ってるのかな?」

「多分、知らないと思う。」

天界の広間では他のメンバーが揃っていた。ナンバーズの内、ウェンディ・ノーヴェ・チンク・ディエチも居た。

他のナンバーズはゆりかごで最終調整を行っている。

「ティアナ、久しぶりッス!!」

「久しぶりね、ウェンディ。」

「中々、会えなかったからね。」

ティアナ・ウエンディ・ディエチは仲良く喋っている。

この3人は砲撃関係で仲良くなったのだ。

「つかさ……ティアナ。バツテンチビに魔眼の事教えて良かったのかよ？」

「大丈夫よ。本気にするわけが無いし……」

「あれ？さっき、リネイヤがユニゾンデバイスを連れて行くのを見たツスよ？」

「え？」

違う場所では、ギンガ・チンク・ノーヴェが仲良く喋っていた。

「スバルと戦ったらしいな。」

「情報が早いわね、チンク。まあ、ぼこぼこにしたけどね。」

「私が勝てないのに、姉貴に勝てる筈がねえよ。」

ギンガはクイントの事情を知った時、クイントに連れられ、スカリエッティのラボに行った頃から仲良しなのだ。

ノーヴェがギンガを『姉貴』と呼ぶのは、クイントが戦争終了後にディエチ・チンク・ウエンディ・ノーヴェの4人を養子しようと考えているからだ。

「ノーヴェは負けてばかりだからな。」

「チンク姉！！ それは言わないでくれよ！！」

ノーヴェとギンガはよく模擬戦を行うが、ノーヴェは一度も勝った事がないのだ。

「ノーヴェも『氣』が扱えるようになれば、太刀打ちできるわよ。」

「簡単に言っけどな、『氣』を使うのってかなり体力使っただぞ！」

「姉は疲れんぞ？」

「ノーヴェは力が入り過ぎなのよ。」

「うるせえ！！」

場所は変わって天界の一室にある実験室に連れて来られたリイン。

「リネイヤさん。どうやって魔眼を刻むんですか？」

「リインは何もなくて良い。ほら、その上に寝転んで。」

リネイヤに言われた通りソファーに寝転ぶリイン。

「かなり痛いが我慢しろよ。」

「へっ？」

リネイヤの不穏なセリフに反応したリインだが、時は既に遅し。

リネイヤが持ち出したフラスコから透明な滴が零れ落ちて、リインの目に当たった。

「あ…あああああああ！！！」

滴が当たった瞬間、リインに激しい激痛が襲い掛かり、のたうちまわる。

「あああああああ！！！」

激痛は納まる処か、逆に激しくなっていく。

5分後、ようやく激痛が収まったリインは鏡で自分の目を確認していた。

右目は変わらないが、左目はハイライトが消えた碧色の瞳になっていた。

「これが……魔眼ですか？」

「そうだ。名前は“蒼天の魔眼”だ。」

『蒼天の魔眼』

かなりレアな魔眼で事象具現化の効果がある。

例えば、頭の中で『氷れ』と願えばその事象が具現化される。

しかし、脳に掛かる負担が大きいため、そんなに頻繁には使えない。

「何ですか、そのチート能力は。」

「制限はあるが、確かにチートだな。」

リインがチート仲間に仲間入りました！！

S T S 編 集結する同志たち（後書き）

改めて思うが、出番が無いキャラが多すぎる。

仕方ないよね？セリフがまったく無いキャラが居ますが、気にしないでください。

最終話 幻想の交響曲

『破壊神の鎧』

かつて古代ベルカの民を恐怖のドン底に陥れた最恐最悪の兵器。暴虐無尽の王が所有し、破壊の限りを尽くしたと呼ばれている。

『聖王の方舟』

『破壊神の鎧』に対抗するため、古代ベルカの技術の推移を集めて作られた兵器。

破壊神の鎧を破壊した後は聖王の棺として活用された。

そして、現代。

古代ベルカの国を震撼させた闘いが今、再び始まろうとしている。

魔法少女リリカルなのは

～ 幻想の交響曲 ～

最終話 幻想の交響曲

地上本部消滅から三日後。

なのは・ヴィータの2人が目を覚ました。

「全システムオールグリーン。接続開始。」

「うっ！」

聖王の方舟の玉座に座るヴィヴィオから呻き声が漏れる。

「大丈夫、ヴィヴィオ？」

「うん……大丈夫だよ、なのはママ。」

「ヴィヴィオは強いね。流石なのはママの娘だ。」

『聖王の方舟』には様々な武器が搭載されており、コアとなる聖王の思考によって攻撃・防御・回避をこなす。

「クアットロ、此处は頼むわね。」

「はい。」

「セイン、オットー、デイドも頼むわね。」

クアットロは方舟でヴィヴィオの補助。

セイン、デイド、オットーは万が一に備えてヴィヴィオの護衛。

「じゃあ、私も行くよ。」

なのはは転移魔法で決戦場まで一気に転移して行った。

（地上本部 跡地）

幻想の騎士団全メンバーが『破壊神の鎧』と睨み合ってた。騎士団員はユニゾンして戦闘準備万端。

『来たか。神に逆らう愚か者たちよ。』

「貴女たちは神なんかじゃない。この世に神様は居ない!!」

『話すだけ無駄だ。死ね!!』

破壊神の鎧（以降は鎧と表記）から無数のミサイルが発射される。

「ヴォルカニックレイジ！！」

「アイシクルレイジ！！」

「サンダーフレイム！！」

アリサ・すずか・エステルの3人がミサイルを破壊していく。

『これならどうだ！！』

鎧の腹部が開口し、集束レーザー砲を放つ。

幻想の騎士団なら回避するのは簡単だろう。しかし、なのは達の後ろには市街地がある。

「デイベインバスター！！！！」

「フレイムバスター！！」

「イセリアルブラスト！！」

“避ける”という選択肢が無いので砲撃で相殺するなのは、ティアナ、リリス。

『市街地を守りながら我らと戦うのは不可能だ。敗けを認めろ。』

しかし、騎士団員は全員不敵な笑みを浮かべていた。

「それはどうかな？オリヴィエ！！」

「オツケー！！デイベインディング・ドライバー、射出！！！！」

オリヴィエが命じた瞬間、天を切り裂くようになのはの切り札が飛来した。

デイベインディング・ドライバーが地面に衝突した瞬間、地面に巨大な穴が空き、全員が其処に落ちて行った。

『な、なんだと！！』

「これで心置きなく闘えるね。」

『デイベインディング・ドライバー』

なのはの切り札の1つで空間を湾曲させて特殊な戦闘フィールドを作り出す。

周りに被害は行かないというミラクルツールだ！！

「私たちも参加するぜ！！」

それと同時にクラウドと聖王の方舟、それらに乗る援軍が現れた。

「みんな！！遠慮する事はないよ！！」

「全力全開で目の前の敵を破壊しろ！！」

——おう！！——

「ゆりかご、主砲発射用意。ルシエル、起きて!!」

《了解!!》

ルシエルが起動して現れるのはいつもの大剣ではなく、肘まで覆うガントレット。

『前線メンバー全員に通達。“破壊神の鎧”には強力なバリアシステムがある。』

まずはそれを破壊しないと我々の勝利はない!!」

前の会談でクロノたちは『破壊神の鎧』に強力なバリアシステムがある事を知った。

そして、クロノ達が考案した作戦はバリアシステムを破壊した後、ゆりかご、方舟、クラウドディアの主砲で消滅させるというシンプルな作戦である。

「私たちから行くわよ!!」

スバル、ギンガ、ノーヴェ、合わせて!!」

「「「おう!!」」」

4つの空の道に沿ってナカジマ親子が鎧に向かって行く。

「リボルバー……シュート（スパイク）！！！！」

4人の攻撃によってバリアに罅が入る。

「続けて行くわよ！！」

シューティング・フレイムスター！！」

ティアナの砲撃魔法がバリアに入った罅を広げる。

「約束された勝利の剣！！」
エクスカリバー

パリンッ！

エクスカリバーの真名開放によって鎧のバリアシステムが音を立てて破壊される。

「今だ！！」

鎧に向けて主砲を放つ艦船三機。

なのはわけがわからなかった。艦船三機の主砲が命中した時、ピカッ！！と目映い閃光が視界を覆い、収まるとなのは以外は全員倒れていた。

方舟とゆりかごは無事みたいだが、クラウディアは墜落していた。

そして、破壊された筈の鎧は“無傷”で悠然と鎮座していた。

『流石は吸血鬼。受けた先から再生するとわな。』

『だが、方舟はどうだろうな？』

「！！！！！！」

鎧がヴィヴィオの乗る方舟に照準を向けていると判断したなのはの行動は速かった。

「がはっ！！」

『なのはママ！！』

なのはの腹部を鋭利な剣が貫き、なのはの騎士甲冑を鮮血に染めていた。

「大丈夫……だよ。」

なのは剣を引っ抜いた。血が流れるが、傷はすぐに塞がる。

『残ってるのは、貴様と方舟だけだ。』

ゆりかごには誰も乗っていない。オリヴィエによる遠隔操作で動いているのだ。

「まだだよ。みんなは立ち上がる。」

『ふん。まだそんな戯言を吐けるか。』

『なら、より深い絶望を味わわせてやろう！！！！！』

「ガジェット……」

おそらく最高評議会が極秘で制作したであろうガジェットが倒れて動かない仲間に向かっていく。

しかし、なのは動かず、ただただ鎧を睨みつけている。

「あなた達は決定的な間違いを犯しています。」

私たちの武器は強靱な体でも巨大な魔力でもありません。」

ドウンッ！バーンッ！

大量のガジェットが一斉に破壊され、すべて爆散した。

「私たちの真の武器は……………」

絶対に屈しない不屈の闘志と途切れる事のない不屈の絆。」

『な、何故だ！？何故、動けるのだ！？』

さっきまでまったく動かなかった仲間が立ち上がったのだ。
さらに、傷と魔力も完全回復している。

「ご苦労様、リイン。」

「はあ…………はあ…………かなりキツイです。」

リインの左目からは血が流れていた。

リインは『蒼天の魔眼』を発動させて全員の魔力と傷を回復させたのだ。

『だが、我らは倒せん。バリアシステムはすぐに再生するからな。』

「一番末っ子のリインが頑張ったんだから、私たちも頑張らないとね……！」

—おう！—

なのはの言葉に息を吹き返した全員が同意した。

『だが、アルカンシエルを失ったお前達に勝ち目は「うるさい！」
…なんだと！—！』

「例え、アルカンシエルが無くとも私たちが生きている限り、あなた達の絶対不敗は成り立たない！！
私たちは……………絶対に」

—勝ってみせる！！！！—

全員が叫んだ瞬間、なのはの二冊の魔導書が光輝いた。

それはある宝具の使用条件コンプリートを示していた。

「我らの意志を紡ぎ、今こそ光輝け、永劫の剣！！ “エターナルソード”！！—」

なのはの右手に一振りの大剣が顕現した。

紫色の光を放ち、刀身はなのはの身の丈以上ある神々しい大剣。
それこそが最強の宝具『エターナルソード』である。

最終話 幻想の交響曲

魔法少女リリカルなのは

～幻想の交響曲～

最終話 幻想の交響曲

『エターナルソード』

『源』を司る精霊オリジンによって創られたすべてを超越した剣。なのはが唯一、自由に召喚する事ができなかった最強の宝具。

「みんな、一瞬で良い。あいつのバリアに穴を開けて!!」

「それは私たちの仕事よ!!」

クイントが再びウイングロードを使って風穴を開ける地点を定める。

「ヘル・アンド・ヘブン!!」

右手に魔力。左手に氣。

相反するエネルギーが組み合わせられ、爆発的な破壊力を生み出す。

「ゲム・ギル・ガン・ゴウ・グフオ……はああ！！

ウィーターッ！！」

バリアと『ヘル・アンド・ヘブン』がぶつかり合い、火花を散らす。

「はああああっ！！！！！！」

クイントに助太刀するようにリボルバーナックルで殴りつけるスバルとギンガ。

「私を忘れんじゃねえぞ！！」

さらに、ノーヴェが加わり……

「IS発動。ヘビィバレル！！」

ディエチも加わった。

クイントが行動開始した瞬間、なのはもエターナルソードを握り締め、駆け出していた。

しかし、なのはの進路をガジェットが塞ぐ。なのははガジェットを

切り捨てようとする。

『止まるな、高町!!』

『!!シグナムさん!』

「駆けよ、隼!!」

シグナムのフルドライブ、シュトルムファルケンが群がっていたガジェットの間を道を作り出す。
なのははそのまま駆け抜けた。

一方、クイントの方はバリアを破壊できずに居た。

鎧のバリアを一ヶ所に集中させているのだ。

（くっ、このままじゃ破壊できない。）

珍しく弱音を吐くクイント。だが、段々とバリアが弱くなっているのを感じた。

鎧の左右を見ると仲間たちが鎧を左右から攻撃しているのだった。

さらに、衛星軌道上からのゆりかごの砲撃によってバリアを一ヶ所に集中させる事ができなくなったのだ。

「うわああああっ!!」

『この虫けらどもめ!!』

バリアが弱くなったので、バリアを力の限り引き裂いた。

その瞬間、灰色の閃光がクイントの横を通り抜け、バリアシステムの内側に侵入した。

『高町　なのは!!』

『これで終わりだ。理想を抱いて溺死しろ!!』 ↑リネイヤ

「これはあなた達がないがしろにした憐れな子供たちからの報いの一撃だ！」

『すべてを超越せし永劫の剣!!!!!!』
↑
エターナルソード

『『『ぐわああああああ!!!!!!』』』

最強の宝具―エターナルソードの真名開放を受けた鎧は跡形もなく消滅した。

数ヶ月後、『時空管理局革命』と名付けられた一連の事件は時空管理局の不正行為と共に世間に公表された。

機動六課のメンバーはそれぞれ別れた所に行ってしまった。

ヴァイス陸曹とアルトは変わらずヘリパイロット。

グリフィスは母親であるレティ提督の下で本局の再編の手伝い。

リンディやクロノが調査した結果、本局の上層部も真っ黒だったため、部隊の再編が急務となっているのだ。

シャーリーは相変わらずフェイトの副官に戻り、フェイトも本局の再編に努めている。

ティアナはアギトと一緒に次元世界を巡り回ってる。

スバルは湾岸警備隊にスカウトされた。

エリオとコーティカルテはキャロと3人一緒にキャロの古巣―自然保護隊に。

アリスとすずかはエステルと地球に戻り、学生生活を楽しんでいる。

スカリエッティはクアットロ、セツテ、ウーノ、トーレ、ドゥーエの5人のナンバーズを連れて『聖王のゆりかご』で次元世界放浪の旅に出た。

ミッドチルダに残った7人のナンバーズは2つのグループに分けられた。

ノーヴェ・チンク・ウェンディ・ディエチの4人はクイントの計らいでナカジマ家の養子に。

ちなみに、一番上がギンガで順番にチンク↓ウェンディ↓ディエチ↓スバル↓ノーヴェとなっている。

オットー・ディード・セインの3人は聖王協会でカリムの執事や秘書をしながら、ヴィヴィオの護衛という二足のわらじを履いている。ヴォルケンリッターとはやては幻想の騎士団として地上の治安に当たっている。

一番意外だったのが、メガーヌとゼストが婚約したのだ。2人とルーテシアはグラナガン郊外に住居を構えている。

最初はルーテシアも戸惑ったが、今では親子水入らずで楽しい生活をしているらしい。（ヴィヴィオの伝聞より）

そして、なのは達はどうと……

「うっ、書類が終わらない」。

書類仕事と格闘していた。

カリムとの契約で聖王家が再興されたが、オリヴィエは記憶を受け

継いでいるが、精神がまだ幼い。

ヴィヴィオは記憶を受け継いでいない上に精神・肉体共に幼い。

よって、ヴィヴィオ・オリヴィエ・リリスの母親である高町 なのはが抜擢されたのだ。

『幻想の騎士団』は地上の治安を守るための組織として認知されている。

最強とされる名が世間に轟き、犯罪の抑止に繋がっているそうだ。

聖王家にはリネイヤ、セフィリア、オリヴィエ、リリス、ヴィヴィオ、なのはの6人が住んでいる。

また、孤児院ラストリアは聖王家屋敷の近くに移転した。

そして、移転した際に結界は解除され、今でも孤児の受け入れを行っている。

「ただいま」

執務室の扉が開き、サント・ヒルデ魔法学校の制服を着た『高町 ヴィヴィオ』が入ってくる。

ヴィヴィオが『グレイセス』の姓を名乗らず、『高町』の姓を名乗っているのは、ヴィヴィオが色眼鏡で見られる事を嫌がったからだ。よって、ヴィヴィオが聖王家の人間と知るのは僅かな人だけである。

「おかえりなさい、ヴィヴィオ」

「うん……なのはママ、まだ仕事終わってないの？」

「うん……もうすぐで終わると思うから、オリヴィエと遊んで来たら？」

「うん、お姉ちゃん、行こう」

「はいはい。」

ヴィヴィオとオリヴィエは仲良く手を繋いで遊びに行った。

ぴぴっ、ぴぴっ、ぴぴっ。

『なのはさん！ ■■■ 地点で犯罪が起こったわ！すぐに向かって貰える？』

幻想の騎士団出撃要請は基本的にカリムから来る。

聖王家当主代理と総隊長の肩書きを持つなのはは多忙の身なのだ。それでも、時間を遣り繰りして親子の時間を作ろうという母親としての気持ちの方が強いらしい。

「書類仕事は私にお任せを。」

「ごめん、リネイヤ。すぐに終わらして来るよ。」

「お気になさらず。主のサポートをするのが、私の役目ですから。」

「ありがとう。リリス、セフィリア!!」

「うん!!」

魔法少女リリカルなのは
　　く幻想の交響曲く

終わり

最終話 幻想の交響曲（後書き）

最後の最後でグダグダになりましたが、無事完結しました！！

まあ、無理矢理終らしたような感じがするが……………

数人はまったく出番がありませんでした。

反省点は出演するオリキャラが多すぎた事かな？

自分の文才では上手くキャラクターを立ち回らせる事ができませんでした。

近々、この反省点を生かして新しい小説を書こうと思っています。

最後に……………こんな駄作の小説を最後まで読んでくださってありがとうございます！
うございました！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348j/>

魔法少女リリカルなのは～幻想の交響曲～

2010年10月9日23時29分発行